

怪しさMAXの陰陽師は、  
奈落の底を目指すよう  
です

S・DOMAN

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

リンボをアビスに向けて射出してみました。

# 目次

オースでの出来事

“黒笛殺人事件” 1 | 1

“黒笛殺人事件” 2 | 8

“黒笛殺人事件” 3 + ? | 17

“青髪の子供” 1 | 23

“青髪の子供” 2 | 28

怪異！闇を目指した ●● 1 | 35

本編

・忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落

で探掘家をやっていたところ・・・1

72

忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたところ・・・2

80

忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたところ・・・3

87

忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたところ・・・4

98

忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたところ・・・5

104

忘れもさせぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたところ・・・6

110

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・6・66

117

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・7

125

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・8

136

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・9

149

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・10

158

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探窟家をやっていたころ・・・11

164

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・12

171

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で

探掘家をやっていたころ・・・13

176

忘れもしませぬ。あれは拙僧が口ツク

クライミングを嗜んでいたころ：：14

180

忘れもさせぬ。あれは拙僧がロツク

クライミングを嗜んでいたころ：：15

186

忘れもさせぬ。あれは拙僧がロツク

クライミングを嗜んでいたころ：：16

193

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：17

198

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：18

225

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

203

る獣の秘湯を発見していたころ：：19

209

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：20

213

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：21

218

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：22

225

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた  
る獣の秘湯を発見していたころ：：23

229

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた  
る獣の秘湯を発見していたころ：：24

235

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた  
る獣の秘湯を発見していたころ：：25

240

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた  
る獣の秘湯を発見していたころ：：26

247

忘れもさせぬ。あれは拙僧が老いた

る獣の秘湯を発見していたころ：：27

252

・忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明  
卿と一緒にカートリッジを作っていたこ

ろ：：28

257

・忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明  
卿と一緒にカートリッジを作っていたこ

ろ：：29

264

・忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明  
卿と一緒にカートリッジを作っていたこ

ろ：：30

269

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿  
と一緒にカートリッジを作っていたこ

ろ・・・31 |—————| 275

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

ろ・・・36 |—————| 330

ろ・・・32 |—————| 291

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

ろ・・・37 |—————| 338

ろ・・・33 |—————| 302

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

ろ・・・38 |—————| 346

ろ・・・34 |—————| 308

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿

と一緒にカートリツジを作っていたこ

ろ・・・39 |—————| 356

ろ・・・35 |—————| 316

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・40

361

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・41

369

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・42

376

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・43

381

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・44

387

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・45

393

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・46

399

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・47

404

忘れもさせぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・48

409



忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・49

果ての姫君と戯れていたころ・・・53

413

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・50

果ての姫君と戯れていたころ・・・54

442

418

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・51

ての姫君と戯れていたころ・・・55

447

424

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ

果ての姫君と戯れていたころ・・・52

ての姫君と戯れていたころ・・・56

453

429

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

459

〈ドーマンの生懸〉

ての姫君と戯れていたころ・・・57

471

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・58

477

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果

ての姫君と戯れていたころ・・・59

483

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズ

キャン殿と腹の探り合いをしていたこ

ろ・・・60

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズ

キャン殿と腹の探り合いをしていたこ

ろ・・・61

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズ

キャン殿と腹の探り合いをしていたこ

ろ・・・62

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズ

キャン殿と腹の探り合いをしていたこ

ろ・・・63

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村”

の守護神だったころ・・・64

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村

”の守護神だったころ・・・65

516

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村”

489

500

505

510

496

の守護神だったころ・・・66 | 521

・忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村

“の守護神だったころ・・・67

528

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村”

の守護神だったころ・・・68 | 538



# オースでの出来事

## “黒笛殺人事件” 1

「黒笛の連続殺人だと？ 珍しいな」

眼鏡を掛けた、長身の男がそう聞き返す。豪華な椅子に深く腰掛けて足を組むその恰好は、男がもしモデルであれば様になっていただろう。

この薄汚い男の住処である豪邸は、オースの町でも一、二を争うほど広く、けれどしっかり清掃の行き届いた屋敷は、この男の部屋だけが散らかっていた。

足の踏み場も無い程に書類や本が散乱した部屋の中には、どうやらもう一人の人間がいるようだ。

「はい、それも全て黎明卿『新しきボンドルド』の探窟隊、『アンブラハンス祈手』のメンバーとして登録されている者たちが、です」

「——ハア?! 白笛の探窟隊がどうして殺人なんかするんだ? 彼らは賢いだけでなく、クオンガタリのような狡猾さも持っている。本当に祈手ならば、もつと俺たちの仕事が減るように動くだろうさ」

『助手』と呼ばれた男は、その心情を体现するかのように背を丸め、言い辛そうにしながら応える。今回の出来事は、この破天荒な師匠にしよつちゆう付き合わされる助手の目から見ても異常な出来事であった。

「い、いえ。クオー口様。恐らくは勘違いなさっているのだと思いますが」

「何をだ? ……いや待て、まさか ……おい助手。被害者はどつちだ?」

「それが、信じられないことに」

「ああもういい。なるほど。『祈手』が殺されたワケか ……誰に?」

『助手』が答える。今度は背筋を伸ばし、ハッキリと。

「岸壁街の住人にです。なんでも、今オースの町におられる『祈手』は全て殺されたとか。現在『祈手』は国外にいないので、残っているのは『前線基地』にいる者たちだけだそうです」

「……フフツ。あのなア、君。俺を馬鹿にしてるのか？ 黒笛。さらに白笛の探窟隊に所属してる様なヤツらが、どうやったたらそこらへんの薄汚い浮浪者共に殺されるって言うんだ?! そんなわけ無いだろう!」

「それを説明してほしい。というのが依頼内容ですよ?」

「ハアアアア……俺は便利屋じゃないんだぞ? ま、黎明卿以外じゃオースでマトモに手術できるの俺位だしなあ……全く人手不足が恨めしいよ。しょうがない。ていうかそもそも受けるしかないだろ。俺たちは組合の専属なんだからさア?」

「まあこれも形式というヤツなんですよ。多分ですが」





が実用性に欠けるために、専ら着られることの無い不遇の服なのだ。悲しいね。

「はい。探窟家組合本部、本部長からの命令です。不動卿、オーゼン殿。至急オースの街へご同行願います」

「んん。分かった。準備をしたらすぐに向かうよ……」

「……ところでさあ。キミ、コレホントは誰の要請なんだい？ 組合の使いなら多少は知ってるだろう？」

「私もあまり詳しく知らされておりませんが……恐らくは、『快癒卿』絡みかと」

「……はあ、そうかい。こりやまた厄介事に巻き込まれそうな予感がするねえ……」

「彼がお嫌いなのですか？」

「ああもちろんさ。あのガキと関わるとロクな事がない。『臆病者』、『奇人』、『変人』……いい噂なんて、聞いた試しがないよ」

「まったく。大体特例の白笛なんて作るべきじゃなかったんだ。もっと別のやり方があったらうに」

「夢と希望に溢れる探窟家も、上に行けばお役所仕事ですからね」

「ンふふ。違うない」

オーゼンの笑い声が耳に届いたのだろう。本日何回目かの掃き掃除を終えたマルルクが、間仕切り越しにこちらを覗き込んでいる。

「……ん？あ、お師さま！お客様が来られてたんですね！ちよつと待っててください。何かお出ししますよ」

「ああマルルクちゃん。こんにちは。大丈夫だよ、もうすぐに出発するから」

「そ、そうですか。え？お師さま、どこかに出かけられるんですか？」

「ああ、二、三日留守にするよ。お土産は何かいいかい？」

「何でもOKです！お師さまお師さま！なるべく早く帰ってきてくださいね？飲みつぶれたりして、他の人に迷惑かけないでくださいよ？」

「うるさいねえ、帰ったら裸吊りだよ」

「えっ?!」

## “黒笛殺人事件” 2

部屋から出て最低限身なりを整え、しつかりと寝た男は、翌日、己の得物を持って組合を訪れていた。ロビーに入ればそこに既に担当の職員が居り、生気の抜けた表情でこちらを見つめている。

「お待ちしておりました、『快癒卿』。早速ですがコチラに」

「了解した。ババアは？」

「到着は一日後だと思われませう。使いの者が今朝出発しましたので」

「そうか……それまでに手がかりを掴まなければいけないわけだな？ 糞が。殆ど時間が無いじゃないか！ 早く案内しろ！」

「分かりました。行きましよう」

入り組んだ廊下を地下へ地下へと下っていく。普通の探掘家なら絶対に立ち入ることのできないこの領域は、組合、延いてはこのオースの街の禁忌タブー。その全貌を知るのは白笛と、一部の上級職員のみである。

昼間だというのに夜のように暗いこの場所は、事実、高度的には深界一層にあたる。地上にぽっかりと空いた穴に蓋をするように、この組合本部は建てられたのだ。

正に木を隠すなら森の中。活気溢れるオースの街に、こんな穴が開いているなどとは誰も思わないだろう。

地下二十七階。階段を下りて三つ目のドアを職員が開く。ドアを開けた途端に広がるのは、噓せ返るほどの老廃物の臭いだ。ベッド……とは名ばかりの鉄製のフレームの上には、幾人もの人間が目隠しをされた上で全身を拘束されている。口枷からは涎が漏れ出て、下半身からは糞尿を垂れ流す。それをどうにかしようにも、暴れ散らすのでどうにもならない。

「ウヒャア。これはまたスゴイ数だな……」

「全部で三十三体。全員が貴重な黒笛を殺しています。報告に依れば一部は徒党を組ん

で殺したとか」

「至極どうでもいいな。とりあえず洗ってからメといてくれ。俺は器具の用意をする」

「分かりました。では略式ですが、即座に死刑に処して」

「おい待て。首を切ったりなんかするなよ？全部そっくりそのまま暴くんだけ。傷はなるべくつけず丁寧に殺せ」

「……手練れの者を呼んできます。私だけでは厳しい」

「ああ。是非ともそうしてくれ」

床に飛び散る血が、彼らの糞尿と混ざり合っていくのを眺めながら、男は持参してきた紅茶を飲んでいった。

「遅いぞ、どれだけ待たせるつもりだ？検体どもの処理を見ながら飲むのもそろそろ飽きてきたんだが」

「今の物で最後です……終わったようです。では私は、少し休憩を」

「ああ待て。せっかくだから見学していけ。『快癒卿』の解体ショーが見れるんだ、見ていくよなア？」

「……………ええ。光栄です」

「ハハハ！そんな嫌そうな顔をするな！さあこっちにこい。そこで見ていろ」

「ウーン、これは、スゴいな」

一番最初に処理された物は、齢二十もいかぬであろう若い女だった。首を切られ魂を

失った相貌は、つい数時間前の検体の痴態からすれば驚くほど綺麗で、歯をむき出しにして狂っていたあの様子こそが夢だったのではと思わせるほどだ。ちなみに容姿も悪くない。

そんなコレは今、全身を隈なく切り裂かれ、内臓をそれぞれ銀のプレートの上に分けられている。

「申し訳ありませんが私は医学にあまり明るくありませんので。何がどう凄いかさっぱり…」

「ン、ああ。すまないな。よし、では説明してやろう。おまえ。舶来品のなかにチーズがあるのを知っているか？ほら、力を加えると裂けるアレだ」

「ああ、最初は物珍しさに裂いていましたが、飽きて買わなくなりましたね」

「そ、そうなのか……と、とにかくだ。今回のイメージとしてはアレに近い。これを見ろ」



検体の背骨を両手で掴んでぐりつとねじる。

「…背骨に、線が入っている?」

「ああ。恐らくは何か意味のある線。文字なのだろう。ところどころ太く、そして細い。強弱をつけているんだ。まあ、こんなベニクチナワがのたうち回ったみたいで文字見たことないし、文字なら切れ目がないオカシイがな」

「にわかには、信じられません。だって背中には傷跡がなかったんですよ!?!何者かが背中を割いてコレを書いたとしても、手術の傷跡は残るはずだ」

「そこで、さっきのチーズだ。我々の筋肉は、あのチーズのような構造をしている。つまりだ、アレは横からだどうやっても裂けないが、縦からならスルツと裂けるだろ?筋肉もそうだ。原生物にやられたりなどしてついた傷は、筋肉の繊維を無視してメチャクチャに付けられる。だから、跡が残りやすいんだ。筋肉の繊維の境目。筋に沿って切れば、跡は全く残らない。裂けたチーズが、再びくっつくように。まあ聞けばわかると思うが、まともな人間なら、そんなメンドクサイことはしない。というか不可能だ」

「それは、つまり…」

「俺と同じぐらい医療の知識があつて、なおかつ俺よりも手術の上手いやつがいるかもしれん、ということだ。しかも、コレだけ体を開いてるのに、今までに俺がつけたであろう傷が一つも見当たらない。こんな芸当は、俺でも無理だ。まあ？6人までなら俺もやれんこともないが。それかもしくは——」

「遺物、ですか？」

「おお訝えているじゃあないか。その通りだ。組合に届け出の出されていない、新しい遺物で行ったのかもしれない。ツ！おい見ろ!!頭蓋骨の内側にもあるぞ！何たることだ!!どうやって付けたんだねこんなトコ!!」

「そんな、あり得ない…」

「ああ。どのように行ったか、非常に興味があるが……これは俺にもわからん。お手上

げだ。他のも一応開いてみるが、恐らく何も新しい発見は得られんだろう」

それからずっと作業に没頭する男を置いて、職員は補助役——医学に明るい者たち——を除いて全員上に戻っていった。

仮眠をとって部屋に戻ってきた彼が最初に目にしたものは、山積みになった紙の束であった。ちよつとした山脈を築いている。

「信じられん、信じられん。信じられん。こんなことが……う？」

「おはようございます、『快癒卿』。朝食の準備ができておりますが」

「ありえん。こんな、どうやって？」

「『快癒卿』殿？『快癒卿』殿!!」



## “黒笛殺人事件” 3 十 ?

あれから数時間後。男は粥と仮眠を取って、体調が戻ったようだ。

「フーう。ようやく眠気が取れた。さて、と。続きと行こうか」

「やあ、まだやってるのかい？ヤブ医者」

「げえッ！ババア?!ハヤツ!!オイ誰だ呼んだの！俺だった!!!ぶふえッ」

「うるさいねえ……久しぶりに裸吊りするかい？」

「断じて、否だ!!それよりも早く降ろしてくれ！俺は説明をしたいんだがねえ?!」

「まったく。ほら」

「ハアアアア。ヒドイ目に遭った……それでだ、大体の説明はここに来た時に聞かされたらどう？」

「ああ。なんでも、アンタ以外に『傷跡を残さない手術』のできるヤツがいて、ソイツのせいでわたしが呼ばれたってねえ」

「上出来だ！その貧弱なオツムでよく理解できたなあ。ぶぶうツ……ウウンツ。ああ、これを見ろ、頭蓋骨の内側にまで彫つてある。信じられんだろう？」

「ンん、まあ、にわかには信じがたいが。それで？」

「繰り返し返すようだが、これはこいつらの体に直接『彫られてる』んだ。全身207カ所、これらの骨の、すべてに。ひとつ残らず」

「それに加えて、だ。面白いのはここからなんだ。さあてどこにやったか……ああ、あつた。これを見てくれ」

「ん？この紙は…」

「33人全員の骨に書かれていた”文字らしきもの”だ。1から順に、番号が降ら  
れる。光に透かしてみろ」

「ン、おお、重なってる。へえ、これもかい？おお……それが？」

「まだ分らんか？全部同じなんだよ！寸分違わずな。オーゼン。オマエは  
一週間前書いた文字とまったく同じ文字が書けるか？」

「……ふうん、そういうことか。分かったよ」

「ハアアアア。どういふことなんだ……やはり」

「遺物かい？」

「……あのなア、俺のセリフをとるなよ。まあうん、そうだな。そういうことだ。要するに」

「これは何らかの遺物を使って行われた事件の可能性が高いんだよ。少なくとも、今の技術じゃ不可能だ。それは俺、『快癒卿』が保証しよう」

「まったくとんだ無駄足だったよ。もう土産も買ったし、何も無ければ私は帰るけど、クオーロ。他に用事はあるのかい？」

「いいや、もうないぞ。現状これ以上の事は俺にも無理だからな。何か進展があつたら——」

師弟が話していると、勢いよく扉が開かれる。



「お二人とも！ご歓談中、申し訳ございません。オーゼン殿、『快癒卿』殿」

「おお、君は昨日の！どうしたんだ。そんなに慌てて」

「大変です。非常事態です。白笛が……白笛が！」

「んん？とりあえず、いったん落ち着け」

男は息を整え、続ける。

「ほ、報告します。白笛の一人、『黎明卿』、『新しきボンドルド』、並びに深界五層の『イドフロント前線基地』が」

「完全に消失したとのことですよ」

「……あー。どうやら、進展があつたようだな？」

「はあ、全く……こんなところ来るんじゃないよ。面倒くさいねエ」

## “青髪の子供” 1

「連絡は取れなかったのか？音声通信は不可能とはいえ、石塔信号メイドインアビス版モールス信号ならば通じるだろう？」

「いえ、駄目でした。他の物は無事だったのですが、前線基地の物だけ爆発しました」

「……なにか凄まじい量のエネルギーを一度に注ぎ込まれたのか？」

「それ以外には（破裂させる方法が）ありませんので、そうでしょう」

快癒卿の推察は即座に肯定された。それ以外に理由が考えられないので、当然と言え  
ば当然だが。

だがそうなる新たな疑問が湧いてくる。あのボンドルドが間違えて、通信機に莫大

な電気を流すなんてヘマをするだろうか？いや、するはずがない。

「ふーむ……今から五層までババアを送り込むのも下策だろうし……アアーツ!! イタイ イタイ イタイ! わかったわかった!」

「ハあ、このバカは……で?これからどうするつもりなんだい?」

「これは完全に直感だが……今回の祈アインフラハンス手の大量殺害事件と前線基地イドフロントの消失。どうも無関係じゃないような気がする」

「——いや待て、理由を思いついた。おい君イ! 通信室まで案内しろ!」

「かしこまりました」

「おいオーゼン。荷物運び、手伝ってもらうぞ」

「はいはい」

「こちらが通信室になります。まだ瓦礫の撤去中ですのであまり近づかれないほうが——」

「駄目だ！瓦礫は撤去せずにそのまま残しておけ！」

「……かしこまりました」

「——この感覚」

「ああ、なんとなく感じるだろうか？あの文字から感じていた不気味な感覚と、全く同じものをだ」

「……じゃあ何だい？犯人は上で手練れの探掘家をダース単位で殺す計画を練っておきながら、前線基地イドフロントまで行ってボンドルドを殺したっていうのかい？いくら遺物でもそんなイカレたことできないと思うけどねエ」

「それ以外に何が考えられるか？これ以上しつくりくる推測もなかなか無いぞ」

「……にわかには信じがたいが……」

「いや。遺物ならばあり得るだろう」

「それを言ってしまうえばお終いだろう？死人だって生き返らせる魔法の品なんだからさあ」

「それはそうだが……ではそれ以外に何かあるというんだ？」

師弟が問答を交わしていると、慌ただしく作業をしていた職員が一人近づいてきて、オーゼンに話しかける。

「すみませんオーゼン様」

「あアン？何だい」

「青髪のメイド服姿の子供が先ほどこちらを訪ねてきまして……オーゼン殿に渡したいものがある、と」

「——付き添いは？」

「いえ、一人だけです。渡したあとはすぐに帰ってしまい……」

「……ほうほうほうほう？こりやアまたキナ臭くなってきたな……」

## 「青髪の子供」 2

「クオーロ、私はちよつと出てくるよ。帰りは遅くなるかもしれないから先に寝ときな」

「飯は一応持っていておけよ？」

「……言われずとも分かつてるよ」

「いや。その反応は十中八九忘れて——アアーツ、！」

クオーロを締め上げた後、私は少しばかり早足になりながら道を駆けていた。

あの職員が伝えてきた人相はマルルクのそれと酷似していた。あの奇抜な格好は私の趣味ではない。ないつたららないのだ。ああいう服を着せとくところという時に役に立つのさ。

届けられた荷物はオース ज्या大して珍しくもない菓子的一种だった。だが念の為手



は付けていない、そもそも届けた人間の存在自体が怪しいからである。

聞くところの風貌は完全にマルルクのものだが、それに扮した別人の可能性だってある。そいつが悪意を持っているとするなら尚更だろう。

「んん？こつちか…？」

白笛<sup>あてずっぽう</sup>としてのカンと周囲の人間からの聞き込みから、場所の把握はある程度済んでいる。後は追いつくのみ——

「……………マルルク」

「——どうされましたか？お師さま」

そして、そこに居たのは見知った顔だった。

青と白で構成されたメイド服を着てマルルクはそこにいた。

何でもないように日傘も差さずに、一人で外を出歩いていたので。

「マルルク。いつもの傘はどうしたんだい？」

「ああ！実はアレ、要らなくなっただけです」

「…」

「あの時ドーマンさんに抱きしめられて……あれから陽の下に出てもなんともならなくなっただけですよ！」

「……………もういい」

「え？お、お師さま？どうされましたか？」

「その三文芝居をとつと止めろと言っているんだ。マルルクはねえ、自分の体にそんな重大な変化が起こって、それを私にも、〈地臥せり〉の連中にも伝えないなんて子じゃ

あないんだよ」

「…」

「アンタ、いったい何処の誰だ？ マルルクの中にいるのは何処のどいつだい。とつとと答えないと…その首叩き折るよ？」

沈黙が耳に痛い。私が問いかけてみれば、マルルク——いや、眼の前の不審者は表情を失い、瞳の奥に全く光を宿さなくなった。

痺れを切らした私が戦闘準備を、と思い、地面に手を置くと、コイツが口を開いた。

「……そのような蛮行、この身体に働くことなど出来ぬでしょうに」

マルルクの口から出てきた声は一応、マルルク本人のモノではあった。だが口調は似ても似つかない……忌々しいことに、私はこの口調に聞き覚えがある。

そう。あの時ライザの娘らの付き添いで潜っていた、笛すら持たない、道化の格好をした大男。監視基地での戦闘においてこの私に膝を付かせた真正銘の化物<sup>バケモノ</sup>。彼女らにドーマンと呼ばれていた男の特徴的な物言いが、マルルクの口から発せられていた。

「——へえ？あの時の道化かい。いったいどうやったんだい、ソレ」

「ンン!?何と！拙僧のことを覚えていらしたのですか？それはまた何とも……！ああ、いえいえ。申し訳ありません、少し取り乱しました」

「そうそう。拙僧がどの様にしてマルルク殿の身体を奪ったのか、でしたかな？……それはご想像にお任せしますとも！オーゼン殿が眠っておられる間に何かしらの遺物を使用したのでしょうか？それとも監視基地にて調理した食材に、何かしらの細工が仕掛けられていたのでしょうか？それとも……」

「別れ際に拙僧がマルルク殿と抱き合った時、何らかの遺物が使用されたのですかなア？」

「さてさて！ いったいどれなのでしょうねエ！」

眼の前のコレが言い終わるが早いか、私は掴んでいた地面を抉り出し、勢いよく投擲していた。

「フフハハハハハ!! 良い！ 実に良いですなアその御尊顔！ ああなんとスバラシイ!!」

「煩い。その声で喚くな」

マルルク……いや。ドーマンは宙へと飛び上がった。そして、どこからともなく紙状の遺物を取り出すと、それはたちまち紫電を迸るようになり、私に向けて放ってくる。

「さてさて、戦闘開始。というヤツですかな？」





「た、助けてくれええ!落ちるウー!」

「ソソソ?如何なさいましたかア?ラウル殿」

「ど、ど、ドーマン…ツ!何やってんだよ!うああつ。お、落ちる…ツ、助け、てっ!」

「嫌です♡」

「——は?」

「あ、人避けと防音の呪符を辺り一面にバラ撒いておりますので、万に一つも助けは来ませぬよ?貴方様の冒険はこれにて終幕です……ああ!ですがその前に背囊をば…『急如律令』!」

「ほっ、と。どれどれ?……なアんだ。本当に孤児院から支給された物資しか携帯しておられませんでしたので?このような体たらくでは、奈落では生き残れませ——」

「うわア—ツ!!?」



「——ンンン♡サヨウナラ♡しかし、なんとも良い収穫でありましたなあ！これで所持金も二倍、ロープも二倍！ツルハシも…壊れかけですが、この程度であればまだ修理できますので？いやあ大漁大漁！」

〈怪異！闇を目指した●●参〉

こっちにもいねえ…どうしよう。もうこの辺は探し終わっちゃったぞ!?もしかしてまたベニクチナワなんか下層から上がってきて、それで…っ、いや!違う!そんなワケあるか!

「ドーマン！そっちにはいたかー!？」

「……ええ、見つけましたとも！」

「ツ!ほ、本当か!——それって」

「ティアレ殿の赤笛ですな」

「…」

「この傷の付き具合からして、恐らくは…」

「…なんで」

「んん?」

「なんでお前、そんな平気そうなんだよ…?仲間がまた一人死んじゃったかもしれないんだぞ?」

「……そのように心配なさらずとも大丈夫ですよ、ナット殿。ティアレ殿はきつと生きておられる。拙僧はそのような予感がするのです」

…あれが原因で、俺は前ほど熱心に〈奈落〉を目指さなくなった。別に、友達がまた死んだからだとか、そういう理由じゃない。

あの顔を見ちまったからだ。

全てを悟ったかのようなあの顔。そう。例えたとするならばながら神がかり…

奈落の深淵を目指すには、何かしら『人間らしさ』みたいなのを捨てなきゃいけない。そんなどうしようもない現実を、ドーマンのあの表情から察してしまったから。

（俺は。俺は…）

もうこの奈落に、正しく挑めない。

〈怪異！闇を目指した ● ● 肆〉

ンン……辛子饅頭。この身体ではちと辛すぎるか…？

「あつはは!ドーマン君すごい顔してるよ?ちよつと待つてなよ、今水を持ってきたげるからさ」

「いえいえ、いえいえいえいえラファイ殿。どうかお気遣いなく!この程度の辛味であれば、ええ!そよ風の様なモノでございませすとも!」

「……へー。あ、おかわりい——」

「遠慮しておきますすぞ♡」

「あはははは!やつぱりキツいんでしょ!…ほら、水だよ」

おお、まったく。探窟家に関わる女というのは皆一様に強かですなア…

〈怪異！闇を指した●● 伍〉

もつきゆもきゆ、もつきゆもきゆ…

(……この芋モチなる料理。安価な上に持ち運び易いので、最近では塩もあまり持ち運ばなくなりましたナア)

(……でも十個は持ち歩いているのですがね、塩)

「つええい虫ケラ風情がツ、邪魔だ！疾く失せぬか！あいダツ!?グウオオオ…」

数分後♪

(ふう。なんとかかりましたが……おっと、モチが尽きてしまいました)

「そんなときに役に立つのがこの塩！肉なぞそこら中に湧きまするので、ええ！」

「し！か！も！なんとですよ！この塩をかけると味がするのです!!>NNNNNNNNNN♡美味！

美味ですなア！塩、あゝ塩！まさに万能の調味料……！」

(………はあ。一人で何やってるんですか儂は)

(……やはり共に探掘してくださる仲間というのは必須だと、儂は思うのです。この奈落

は一人で旅するには些か広大が過ぎる…)

「……………戻ったらナット殿やシギー殿を尋ねてみましょうかね」

(赤笛であれど……………ンンン? 赤笛は一層までしか潜れぬのでしたっけ? でしたらなんですか? それ以降はまた一人で探索せねばならぬと? これでは監視基地に皆様を連れて行けぬではありませんか…)

〈優しいサプライズ 1〉

「……………なあ」

「どしたのナット?」

「ドーマンのヤツさ、今度昇級試験い受けに行くだろ?」

「うん」

「だからさ、合格祈願に旨いモン食わせてやりたいんだよ」

「……驚いた。まさか君が他人のためにご飯を作ろうとするなんて……」

「いくらなんでも酷くねーかよ!？」

「とは言っても合格祈願は僕もやってあげたかったし……柔らかい肉でも獲りにいく?」

「おっいいな!よし、じゃあ今から行くか!」

(一層と二層を繋ぐ洞窟の前を、ヘンな機械が占拠してるって噂があったし、多分それをどうにかするのが試験内容なんだろうけど……それって赤笛がやる仕事なのかなあ?)

「……まあ、ドーマンなら大丈夫か」

「どろしたシギー!早く行くぞぞ!」

「あ、待って〜!」

〈優しいサプライズ 2〉

「おおお……溢れんばかりの肉汁、様々な香草が生み出す芳しい香り。一口噛めば溢れんばかりの肉汁が舌に絡みつく……」

「へっへくん! どうだドーマン! 我ながらうまく出来たぞろ!」

「途中からは僕が作ったんだけどね……」

「——御二方、探窟家目指すのは辞めなされ」

『『ええッ!?!』』



「いや。すごい美味ですぞこれ。フツーに店で出せます。腹にもよく溜まりますし、何より傷ついた身体に深く染み渡るこの優しい味わいと言ったらもう！」

ンン、ooooooooooooッ、ッ!!」

「あ、よかった。後半はちゃんとドーマンしてた」

「ナット殿ツ、シギー殿ツ！もしも店を開かれるのでしたら、不肖このドーマン、微力ながらもお力添えをさせていただきますとうござりまする！」

「わ、分かった分かった！いいから落ち着けて！」

〈合格祈願ハンバーグ〉

ナットとシギーが貴方に作ってくれたハンバーグ。一口噛めばどんどん肉汁が溢れ出してくる。

所々焦げているのは、きつと親愛故だろう。あるいは、それこそが美食たる所以だろうか。

150g。体力を200回復、満腹度を40回復する。

〈昇格試験。そして青笛へ——〉

さあ。いよいよ昇級試験本番ですぞ！ンンンワクワクしますなあ！

（げっ、ゴゴウゲ：彼奴は同じ地域にいただけで、どれだけ離れていても目線を合わせてくるから本当にホラーなのです…）

いったい何なんですかアレ。儂の式神越しても探知してきますし。おおクワバラクワバラ。恐ろしいですねえ…

（……さあ着きました。つて）

干渉機「ワインワインワイン…」

「え、ーーツ!? (ほんとにこんな声出たよ)」

儂の相手これなのですか!? え、奈落の至宝が初ボス戦なので!? アホですか! こんなの勝てるわけ無いでしょう…

干涉機「ビーム!」

勝てるわけ…

干涉機「オリヤー!」

…

(…)

「…おっ！お帰りドーマン！試験はどうだった——よ？」

「……………ナツト殿」

「……………おう」

「この孤児院は、ペットを飼うても宜しいのでしょうか？」

干渉機 「ハナセ——」

「……………流石に無理じゃねーか？」

「拙僧ベルチェロ殿に直談判して参りまする」

「止めとけよ!! オイ……………うあゝ あゝ なんかコイツ力強え…」

許可は降りました。ついでに青笛にもなりましたぞ！

「ドーマンつてもしかしたらスゲーアホなのかもなー…」

「笛はついでなんだね…」

〈新人青笛探掘家、ドーマン〉

ようやく青笛になりましたので？青笛になったら一番始めにやる事と言えばやはりこれでしよう！

「装備の更新に来ましたぞ！」

「おお…：つっても俺たちはまだ見学だけだよ」

「ご安心召されよ!この時の為にコツコツ貯めておきました貯金がありますので!今日は合格祝いです!拙僧の装備を整えるついでに皆様用のツルハシも買わせて頂きますように!」

「ドーマン?そ、それって制度的に駄目なんじゃ…」

「大丈夫ですよ。形式上はただ拙僧がツルハシを四本買うただけですので!何も心配はいりませぬぞ」

「青笛の武装をしておられるのですから、皆様が青笛に成る日もきつとそう遠くないでしょうねエ!」

「へ、へへっ、よせやい。照れるだろうが…」

(……ふふ。風邪を引いちやって来れないドロテアのぶんまで買ってあげるんだから、ドーマンったら優しいな〜)

〈ある日の孤児院…〉

「時に皆様、こちらをご覧になっていただきたいのですが」

「ん？んー……ん?!?これ奈落の地図じゃねーか！」

「ええ!?!ちよ、ちよつと見せて…本当だ。すごく精密な奈落の地図この世界には『正確な』奈落の地図は存在しないのだ！盗掘とかを防ぐためにかなりボカして描いているらしいぞー……一層だけだけど」

「折角ですので皆様には差し上げようかと思いましたが。いざ描き上げても使う者がいないのでは意味が無いですからね」

「す、スゲエ。よくゴゴウゲが出るポイントまで描かれてる…えっ、マジで!?!ここも出るんだ…」

「あ、因みに二層の地図作成も五割ほど済んでおりますぞ」

「——す、すごいよドーマン！僕、君のこと見直しちゃった！」

「ンンン！そうでしょうそうですね……」

（……あれ？元々の拙僧の評価、いったいどれほど低かったの？）

〈ある日の新人青笛探掘家……〉

もつきゅもきゅ、もつきゅもきゅ

『キュイイイイイイン!!』

「つ。ええい！獣除けの呪符を使うておるといふのにイイ！死ねエい！」



『じギヤ—!!』

「…………ふう」

もつきゆもきゆ、もつきゆもきゆ…

〈またある日の新人青笛探掘家〉

もつきゆもきゆ、もつきゆもきゆ

(……………いかんいかん。先ほどからヤケに腹が減る……………なにやら体から青い煙も立ち上っておりますし、そろそろ芋モチも底を尽きそうですなあ…)  
(いったん戻って遺物を換金してきますか)

孤児院への帰還後♪

「もし、もし。シギー殿?少しばかり尋ねたいことがあるのですが」

「ん?どうしたのドーマン」

「探掘をしておりますと、時々体から青い煙が立ち上ることがあるのです。あれはいつたい何なのでしょう?」

「……………えーつと。たぶんそれ『青毒』じゃない?ブスチラシに攻撃されたら感染するヤツ…」

「『ブスチラシ』…?はて…」

「ああ。ブスチラシってのはロープを昇ったりすると襲ってくる蝶みたいな——」

「あの畜生が…」

「う、うん。だから事前に解毒薬を買っておくか、攻撃される前に全部倒しておくといいいい」

「……ええ。教えてくださりありがとうございます、シギー殿」

〈報復、地獄の業火〉

「なあシギー。なんかドーマンがヘンな事してるぜ？」

「……な、何をやってるの？」

「ん〜。なんか“カエンホーシャキ”作ってるみたい」

「何やってるのさ……——え？か、“火炎放射器”だっけ!？」

二日後♪

「ド、ドーマン? ソレ本気で使うつもりなの? ここで??」

「ええ! 勿論ですとも! あの糞虫共は一切悉く焼き殺してやらねば気が済まぬので!」

「…ドーマン。一応言っておくけれど、ここは〈逆さ森〉だ。つまり周りは燃えやすい樹<sup>ツ</sup>なワケだよ。分かる?」

「ええ」

「それを踏まえた上でもう一度聞くけれど、ホントにソレ<sup>火炎放射器</sup>使うつもりなの??」

「ええ!」

「『ええ!』じゃないよ! 止めて止めて! ここで逆さ森を焼き払ったら、僕ら赤笛組が青笛になった時、どうやって監視基地<sup>シーカーキャン</sup>に行けばいいのさ!?!」

「それはその時に考えれば宜しい！拙僧、今はただあの糞虫共を——」

「だーつつ!!誰か助けてー!!」

「……まったく、ウルサイねえ……」

〈クソデカ感情オバアサン ー〉

「ふうん？虫憎さにウチごと、ウチごと森を焼き払おうとしてたのかい？へエー？そりやまた随分と……」

「ンンン。申し訳ございませぬオーゼン殿……拙僧、この通り深く。ええ。深く反省しておりまするので、ここはどうかお許しいただきたく……」

まさかたまたま外出していた〈不動卿〉とあのタイミングで出くわすとは……拙僧もなんとも運の無い……

「ふ、不動卿!ドーマンを許してあげてください!別にドーマンも悪気があつてやった訳じゃ……」

「……ん?君は?なんで赤笛がこんなトコにいるんだい?」

「うゝッ。そ、それは……」

「はア。最近はルールを守らないガキが多いから、ホント困ったもんだよ……いいかい?赤笛つてのはねエ、月笛の付き添いがなきや二層に立ち入れないんだよ。だというのにキミらは何だい、青笛と赤笛のコンビかい。ええ?そりや随分と楽しそうだねえ?」  
 「でも、そういうルールや規則を守らないバカからここ奈落では死んでくんだよ……ま、長生きしたいんだつたら覚えとくことだね」

「不動卿……」

「…ハア。ほら、分かったらとつと行きな。部屋の外にキミと同じぐらいの子供がいる、後のことはソイツに聞きな」

「えつ、で、でもドーマン…」

「コイツはまだワタシと話すことがあるからねエ。そうだろう？ドーマン君？」

「……ソソソソ♡お手柔らかに…♡」

へクソデカ感情オバアサン容姿端麗才色兼備な オネエサン 2

「お前さア……良くもまあ恥ずかしげも無くワタシの前に顔を出せたもんだよ。ねエ？」

「——ンンン♡何とも勘の鋭いことで!ええ。その節は、我が遊戯の悉くにお付き合  
いいただき真に!真に!——おオツと」

「……チツ、外したか」

「い、いきなり殴りかかるなど?!?なんてヒドイことをするのですか!人の心とか持ち  
合わせておりませんか?!?」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ」

「生憎、オマエにくれてやる慈悲なんてものはこれっぽちも持ち合わせてないんだア  
……だから、うん。これも何かの縁だしね?」

「もう一度、ここで死ね」

〈ナツトの料理修行! 1〉



はあ。何ともまあ居心地の悪い空間でしたが、何とかオースの町へと戻ってこることができましたぞ…

「ソソソ……しかしこれは、何とも…」

「な。すごいよな。こないだ〈不動卿〉が『正体不明の原生生物』と戦った時の跡だぜ!?ほんっと、人間業じゃねえよ…」

「——おや? ナット殿は白笛を指されていたのでは? もしや拙僧が進めた通りに料理人を目指さんとするので?」

「う、お、おう……まあボチボチな…」

「でしたら! ええ! 食材は拙僧が卸しますので! 早速料理の修業を」

「だあゝツ! まだなるって決めたワケじゃないから!」

〈ある日の孤児院〉

「ナット殿〜！活きの良いガンギマスが手に入りましたぞ！」

「おー。良かったな」

「ではここに置いておきまするので！」

「…えっ、ちよっ!？」

またある日の孤児院…

「ナット殿〜！今度は取ってきたばかりのオットバスの肉が…」

「…」

またまたある日の孤児院…

「ナツト殿〜！今日は——」

「いやなんでだよ!!」

「!？」

「なんツツで毎日毎日食材を俺のところに持つてくるんだよ!?! おかげで俺はすっかり料理係になっちまったよ!」

「ドーマンのせいで! 最近の俺の印象は “食堂の人” だけ!?! キュイなんかこの前『おかあさん…?』って。俺のことを、俺のことを…ツ!」

「ソ、ソソソ…そこまで思い詰めておられたとは拙僧も思いませんでした…」

「グスツ……いいか?もう俺のところに食材とか持つてくんなよ?」

「いやです♡」

「なんツツツでだよ!!!」

〈おお、おいしい…!?!〉

「……シギー殿」

「……なに?ドーマン」

「なんでしょう、このおにぎり。何と言いませればよいのか…」

「…」

「ナツト殿の作られる料理、ぶつちやけラファイー殿ハボルグの奥さん。お店をやつてるよの作られる料理よりも味が良い気が…」

「だめだドーマン」

「!?」

「……それ以上は、いけない」

〈ナツトの手作りおにぎり〉

ナツトが作ってくれたおにぎり。具はどうやら「シヨウユ」なる異国の調味料で甘辛く炊いてあるようだ。

濃い塩味は、疲れた身体に心地よく、通常の料理よりも多く疲労を回復する。

その味はどこか、故郷に置いてきた母を思い起こさせる。目を閉じれば。きっとそこが奈落の底であろうとも。

130g、体力を220、満腹度を40、スタミナを40回復させる。

「監視基地で休憩したいよ!!それにマルルクちゃんに膝枕されたい!あ、あと——」

さらつと二層を突破し、いよいよ三層という所ですが。ここで少しばかり愚痴を…  
なぜ監視基地が休憩ポイントとして使えぬのです?

……いえ、考えてみれば当たり前でした。そもそも拙僧が歓迎されるわけないですよ。そうですね。そうでした。そうでした。

……で、ですが、少し補給をしたり、ツルハシなどを修理する分には使わせていただいても…

「ごつちくんな」

え。

「ごつちに、来るな」

え…

ええ、まあ、ハイ…

…

…

『急々——』

『  
』

〈ちよつとした疑問〉

「そういえばさドーマン」

「んん? どうされました?」

「キミさ、オー…〈不動卿〉と知り合いだったんだね! 言ってくれたら良かったのに…」

「んんん…まあ、昔色々ありましたなア」

(マルルク殿の身体を乗っ取って死ドンパチした合った仲です。などとバカ正直に言う事などできませぬからねエ…)



「つていうか！あの火炎放射器もう使っちゃダメだからね!?なんでワザワザ監視基地で使うのさ！あと火力強すぎ！二つ隣の部屋にいたボクの髪がチリチリになったんだよ!?!いったいどれだけ油をバラ撒いたのさ！」

「ソソソ……鎮まりなされ、鎮まりなされ……」

「真面目に聞けーッ!!」

「そのウロコ、いったい何処から……?」

「ドーマン、ドーマン」

「んん？どうしたのです？キユイ殿」

「今日もアビスに潜ったんでしょ。ならさ、キラキラした石、あつた？」

「ええ！勿論ありましたとも！よろしければ一個分けて差し上げましょうか？」

「ほんとー？うれしーなあ！見せて見せてー」

「確かこの辺りに……はい。〈発光石〉です。落としたりして割らぬように、気をつけるのですよ？」

「わあ！光ってるー。ドーマン、ありがとねー」

「いえいえー！」

「はいこれ。おれいー」

「……………この魚のウロコ、何処で入手されたの？」

「知らないー」

「……知らない？」

「知らないよー」

「……はあ、そうですか」

## 本編

・ 忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ・・・ 1

目が覚めると、何も無い場所にいた。

……ンンン！このような使いまわされた導入など、様々な小説を食い散らかして舌を肥やした皆々様であればさんざ見飽きたでしょう！

ええ、ええ。わかっておりますとも！

拙僧転生する前はこのようなSSなど多少は嗜んでおりましたゆえ！度々入ってくるこのような導入を煩わしく思っております。

ふふ。それに転生する前の拙僧の身の上話など微塵も興味が無いでしょう？

ですので、ええ。彼女らが冒険を始める所から始めましょうか。

『きゆうきゆうによりつりよう  
急々如律令』！

さアて、場所は変わりました。ここは岸壁街。皆様の知るところのスラム街というやつです。

こう見えて拙僧我慢強いのですか？原作に乗り遅れないようにするために一か月ほど前からここ岸壁街にてスタンバイしておりました！

体調は良好！眠気も無く式神の調子もよい。それに予備の式神も、新しく作るための紙も大量に用意しておりますので、これだけあれば奈落アビスの中でも十分戦えるでしょうな。

「ああ、もし。この探掘家さま方」

「ええ!?ど、どうしたん、で、すか…」

「や、やべえぞリコレグ!急げ!クソツ、貧民街の住民か?」

…おやおやあ?どうやら彼女らは拙僧の体の大きいのに恐れを抱いている様子。

もしや第一印象は最悪ですかな?と、いいますか。拙僧岸壁街の住民に間違えられるほど薄汚い恰好はしていないはずなのですがねえ…

因みに今の拙僧はゲーム『Fate/Grand Order』に登場するキャラクター、『あしやどうまん蘆屋道満』の第一再臨。

俗に言う『キヤスター・リンボ』の姿をとっております。ああそれとも、この服は子供には刺激が強うございましたかな?式神によって所々を覆っているといえども、半身を露出しておりまするゆえ。

「あ、あの!」

「ん? どうしました?」

「そ、そのう……私たち! 今から、アビスに潜るんです! けど、だから。その…何か、用事があるん、ですか?」

「お、おいリコ! 早く行けよ! コイツ危ねえぞ!」

「ええ、まあ、はい。拙僧もこれからこの大穴に潜ろうと思わして……ですが」

「いや気にしろよお前!」

「で、ですが?」

「拙僧図体は大きいのですが、心は硝子ガラスの如く繊細でありますゆえ! 一人で降りてしまえば、上昇負荷で死ぬ前に、寂しくて死んでしまいまする!」

「は、ハハハハハ……そうですか……」

「ですので、ええ。ぶつちやけて言いますと拙僧もあなた方の旅に同行したくございませぬ」

「…はあ!?じよ、冗談じゃない!おいりコ、やっぱこいつヤバいつて、ヘンだつて!」

「心外な!何をおっしゃりますか!拙僧は怪しいものなどではございませぬぞ!」

「嘘つけ!フシンシヤは大体そう言うんだよ!」

「ナツト、ちよつと静かにしてて」

「えっ!?う。おう…」

「その…私、レグと一緒にアビスに潜るんですけど、もう地上には戻つてこないつていうか。なんていうか…と、とにかく!一緒には行けないんです!ゴメンナサイ!」



「——はて？心配はいりませぬぞ？もともと拙僧も此処へ戻る気はありませんゆえ。先程の上昇負荷云々は拙僧の場を和ませるためのジョークにありますれば！それよりも、ああ。そちらの鉄帽をかぶった少年」

「な、なんだ」

「尻ポケットの中に何か入っておりますよ？確認してみてはいかがですか？」

拙僧がそう言うと、レグ殿はポケットの中に入っていた手紙の存在に気付き目を通しました。

作中において深界一層でリコ殿とレグ殿が気付かれたジル才殿からの手紙ですねエ。

それを拙僧が、原作よりも早く知らせた訳です！

原作を破壊するならばこのような所から変えなければ！なりませんゆえ！！

手紙に目を通したレグ殿と、内容を横から覗いて見ていたりコ殿の顔色が見る見るうちに青ざめていきます。

「ま、まずい、まずいよレグ！捜索隊が追いかけてきちゃう！私たち捕まっちゃうよ！」

「急いで出発しよう！今がまだ日が出てすぐだから…と、とにかく、今すぐにだ！」

「あ、おいリコ！レグ！もう、どうしちまったんだよ!? あーもう！じゃあなー!!! 手紙送ってくれよー!!!」

「二人とも気を付けてねー！危なくなったら、すぐに戻ってきてもいいんだからねー!!!」

ンンンンンン……これもしかして拙僧忘れられてるのでは？

ええい！今日のために拙僧、この薄汚い岸壁街で1か月も過ごしてきたのですぞ!!  
何が何でもついて行かねばなりません！絶対に！絶対に!!

「ンンンンンン！では、いぎ！いぎ征かん！奈落の果てへ！」

「えええ?! やっぱりついてくるんですか?!」

「勿論ついて行きますとも！それに拙僧は初めから、あなた方がなんと言おうとついて

行く予定でありましたゆえ！」

「わああああああ!!レグー!レグー!!この人ヤバイよお!!あの光線撃つてー!!」

「分かった、やってみる！」

「ンンン!!ヒドイ!!」

な!?そんな殺生なア?!

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・2

「はー…あのあと結局、ここまでついてきちゃったんですよねー…」

「ふふふ。おやおやア？拙僧はお邪魔でしたかな？」

孤児院の子供たちに温かあく見送られた後。拙僧はリコ殿、レグ殿と共に食事を摂っております。

ああ！そうでしたそうでした。説明が必要でしたねえ？

岸壁街より飛び降り着地した後。お二方は未だ拙僧を警戒しているのか、拙僧より少しばかり離れてヒソヒソと作戦会議なぞやっておりました。

どうやら早く二層まで降りようと急いでいたようなのですが、『まだ余裕があるだろう』という事で先に腹を満たす事にしたようです。

“それならば！”と微力ではありますが、拙僧が食材集めを手助けさせていただいたのです。

：何やら鱗が虹色に光っている魚が採れましたのでリコ殿に調理していただきまして。リコ殿の味噌汁は大変美味しゅうございましたよ！

原作ではその時に投げ飛ばされてしまった遺物『星の羅針盤』も、リコ殿に投げ飛ばされ手を離れた直後に、彼女の右隣で味噌汁を啜っていた拙僧が見事キャッチしまして。傷一つなく無事でありませう！心配ご無用です！

しかしまあ、これこそが枢機の姿でありますか。この不可思議なる羅針盤の正体はいつたい何なのでしょうねえ…

握っていると少々活力が湧いてくる感覚がありますぞ。

「いやあお邪魔っていうかなんとか……今のところ邪魔ではないしむしろ助かってる。決して！邪魔じゃないん、だが…」

「うん。さつきも珍しいお魚獲ってくれたし……けど…」

「なんというか……うん、そうだな。これは」

『度し難い、つていうか…』

「……それ言葉の使い方正しいのですかねエ？」

ンンンンンン、ヒドイ……拙僧はこんなにも皆様のお役に立っておりますのに、なぜ怪しまれているのでしょうか？不思議ですねエ……

やはりこの身長のせいなのでしょうか？

「いや、そういうわけではないんだが……」

「うーん。なんだろう……なんというか、雰囲気が胡散臭いっていうか……」

「おやおや、口に出ておりましたか？これは失敬！」

ああ。げに忌々しきはこの前世からの癖、いけませんいけません……早く治しておかなければ。

「それで、このペースで進んでゆくことができれば昼頃には深界二層につくワケであります。……その後はどうするのでしょうか？そのまま三層に行かれるのですか？」

「ええ!?!奈落に潜るのに監視基地シーカーキャンフを知らないんですか!?!」

「……ああ!申し訳ありません。何分拙僧オースの街に来てからまだ一月も経っておらぬ身であります」

「それでよく奈落に潜ろうって思いましたね……二層の途中には監視基地っていう施設があるんです。下層に降りる探掘家たちの休憩地点なんですよ!」

「へえ、そんなものがあるのか」

「レグサー孤児院で習ったじゃんか……」

しかしまあなんと、このようにわざわざ知っている事を繰り返して聞いたり聞かされ

たりしなければならぬのは、少しばかりメンドクサイですなあ。

まあこれも必要経費というモノ。この物語を進めるため、成り立たせるためにも必要不可欠なわけですが！

「ああ！そういうえば。自己紹介がまだでしたねエ！」

「え？あ、そーでした！私リコって言います！んでーこっちはレグ」

「レグだ。その……よろしく」

「なんと。どうやらまだまだ警戒されているご様子で……ああ、そうでした。自己紹介でしたね」

「拙僧、名を蘆屋道満と申す法師にて陰陽師——」



「探掘家など、これっぽちもやったことはありませんが！ええ！」

「——まあ、何はともあれ、以後、よろしくお願いいたします。リコ殿、レグ殿？」

ええ、ええ。それこそ地の果て。奈落の底まで、ねエ？

「ああそれと。拙僧に敬語などは不要ですよ、リコ殿、レグ殿。拙僧のことはどうか、使い捨ての道具とでも思ってください」

「ほあああああ………そ、その！」

「ンン？」

「その、ホウシ？ オンミヨウジ？ つていうのなんなの？！ 聞いたことない！ ねえねえなんなの！！？」

「おい！ り、リコ！？ 何してるんだ！？」

「ンンンンンン！？ リコ殿？！ 鎮まりなされ！ 鎮まりなされ！！！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ……3

さてさて、今は暴れるリコ殿をレグ殿と協力して宥めた後。お二人ともどうやら疲れ果てて眠ってしまわれたご様子です。

まあ無理もないでしょうな。前日にしっかりと休息をとられていたとしても、まだ日も昇らぬほどの時間からの強行軍は年端もいかぬ子供がするには些か荷が重い。

このように間拔けな寝顔を晒してしまうのも無理のないことでありましょう！

……因みに拙僧、レグ殿の腕のトラップの外側にはじき出されてしまつております。おお！なんと、拙僧は悲しい……

『このペースで進んでゆけば——』などと先程は息巻いておりましたが、二層突入の目印である『風乗りの風車』なるものは未だ遠く、拙僧らの遥か足元にあります。『石の箱舟』は、既に越えたのですが。

しかし、原作でもこのペースで進んで行かれていたのでしょうか？よくもまあこれだけ追っ手を撒けたものです……おっと！そうでしたそうでした！拙僧今まで忘れておりましたが、この後追手の探掘家との遭遇イベントがあるのでした！

かくなる上は拙僧だけ幻術を使って隠れましょかねエ……

……ああ、そういえばレグ殿インシネレクターの火葬砲。あれはどうやって習得されたのでしょうか？いやはや、1ヶ月も岸壁街でサバイバル生活なぞしておりますと原作知識もろ覚えになつてしまいまするゆえ……

せっかくの機会です。リコ殿が密かに書かれておられるという日記でも一つ、拙僧も記してみようと思いまする。

「ん、ううん……」

——ンンン？どうやらリコ殿がそろそろお目覚めなさるご様子。この話は、また後程……

えいつ

ちよんつ

「ふえあああああああうツツツ!!!だれあああつ!!!」

「ひゃあつ!!どしたのレグ?!」

「フフフフハハハハ!!おはようございます!リコ殿、レグ殿!よく眠れましたかな?」

「あえあ?!?ドーマンツ?!……ああ、ドーマンか、びつくりしたあ…」

「ええ、お二人とも随分と深く眠られていたようです。あれ程動き回っておられたのですから。よほどお疲れだったのでしょうなあ」

「くあつ……うーん、たしかに。私、いつの間に眠っちゃってたんだろう……ごめんねレグ。レグのおなか、あつたかくて」

「まあ無理もない。今日はずっと起きてたからなあ……」

「さあさあお二人とも！軽く眠気覚ましの運動をしたら出発いたしますぞー！」

「ふあああ、分かった……つて、ドーマン！私が隊長だもん！！んもう、忘れないですよー」

「ソフフフフー！随分と大きな欠伸ですな！この様子であれば眠気覚ましは必要ないかもしれませんねエ？」

「もーうー！！」

ああ、画面越しに見ていた方々との会話というのは、斯くも心揺さぶられるものでありましたか！ンンン！甘露！甘露！！

拙僧の鍛え上げられた腹筋をポカポカと叩いているリコ殿を見て、つつい頬が緩ん

でしきうのでありました。

「ん？あれ……ねえレグ、ドーマン。今何かへんじやなかつた？」

「どうしたんだ？」

「いや。あそこでなにか光ったような気がして……気のせいかもだけど」

おやア、おかしいですねエ？本来ならばこれはレグ殿が気付くべき事であるはず……先程の巨大なカマキリの如き虫……はて、*“ゴゴウゲ”*でしたかな？を避けて通るよう拙僧が誘導したのが、徐々にズレとなつてあらわれているのでしょうか？

この手の転生モノであればある程度『世界の修正力』、『抑止力』なるものが働きそうなものですが。どうやらこの世界、あの程度の些細なズレも物語に影響するようですねエ。今回はこの程度で済みましたが、さらに大きい変化であればどうなるか……

いやはやしかし、この躰が『蘆屋道満』のもので本当に良かった！陰陽術というモノ

は正に万能の代物でありますれば！拙僧も多少であれば未来を見通せまするので。微細なるズレはその都度気づかれぬように修復しておかなければなりません。

「いえいえ、どうやら気のせいではないようですぞ。さすがリコ殿！よく気付かれましたなア！」

「えへへへへ、そうかなあ…？」

「どうやら追っ手にありますれば。さき、では拙僧少しばかり隠れます。拙僧はすぐ傍に付いておりますのでご安心召されよ。おおっと！ではもう時間がありませんので、これにてエツ!!!」

「つ。て、ええ?!ほ、ホント!?!レグ！」

「ああッ、僕も今確認した！探掘家だ！一人だけどまつすぐこつちに向かつてくる！あの三つ並んだ岩の近くだ！走るぞリコツ!!!」



「うん！急ごう！」

さてさて、うまく逃げ切れますかなア？

……なーんて。土台無理な話ですよねエ？

「さすがライザさんの娘だなあ。おい。リコ」

「どうだい？俺もなかなかやるもんだらう」

「は、ハボさん?!そんな、どうしてハボさんが…」

「それにしてもよオ…」

「いやあく盲点だったぜ!!お前さんが『奈落の至宝』だったとはなあ!レグ!」

「……んん?肌の部分も遺物なのか?まったく見た目じゃあ分からんもんだな!それに金玉も!おつ、ここは機械仕掛けじゃねえんだな!荷物の分も差ツ引いたとしても……なんだあ、結構軽いんだな。っおいおい蹴るなよ!」

「ハ、ハボさん。そこまでにしてあげて……」

「ん?……あつはつはつは!!悪い悪い!話がまだだったな!俺ア、別にお前たちを捕まえに来たんじゃねえんだ」

「……ふえ?」

「ああ、ナットとシギーが訪ねてきてな。『奈落の至宝』を見れる、最後のチャンスですよ!つて。そんでまあ、こうして拌みに来たわけだ」

「できれば、拜むだけにしていただきたかった」

「ぬあツはっはははは!!はー。ああ、ちなみに連中はねじれ石英のあたりを探してたぜー!ありやあまだかかるな」

「……さてと、で?さっきのヤツは誰だったんだ?」

(リコ殿!拙僧の事はどうか内密に!!知られると少々マズいのです!)

「うええ!?!……だ、誰の事?」

「いやあそれがな?さつき望遠鏡からお前たちを覗いてたら、なんかヘンな服着た大男がいたんだよ!お前たちと一緒に降りているようだったからな、俺アてつきり、親切な道案内かと思つてなあ!ぜひともお礼がしたくつてよオ!!」

「……そ、その大男なら、もう自分たちよりも先に行った。そつちの崖から、そのまま下へ」

「——へえ!そいつア残念だったな!辛子饅頭の一つでもやろうかと思つたのに。先にいつちまうたあソイツも残念なことしちまったなア!!ハッハッハハハ!!」

「ア、アハハハハ…」

「さてと、『奈落の至宝』も見れたことだし、あいつらとの約束も果たしておかんな！」

いやあ。なんとか乗り切れましたな。しかしハボルグ殿もやけにカンの働く御仁で……思わず冷や汗が出てしまいましたぞ。

しかしまあ最後の方。もしも拙僧がリコ殿に語り掛けていなければいったいどうなっていたことやら。

これこそが探掘家どもの本能というヤツですか？嫌に嗅覚が鋭いのは気に入らない事です……なんとも恐ろしいものですなア。

それにしても、ねエ。

(先にいつちまうたあソイツも残念なことしちゃったなア!!)

ンンンン！笑わせる。そのような事は微塵も思っていないクセに。万が一遭遇でもしていたら殺し合いになっていたでしょうに！よくもまあいけしやあしやあと殺気も隠さず言えたものですなア。最後の方なぞ、もはや隠せておらぬというのに!!

その面の皮の厚さ、拙僧も見習わなければなりませんなア!!フフハハハハハハ!!!

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・4

あの忌々しき探掘家と遭遇した後、レグ殿は無事に火葬砲インシネレーターを習得なされました。

……あ。もちろんナキバネに襲われるなどという初歩的なミスは犯しておりませぬよ？拙僧がそれとなく、レグ殿が腕部の武装に気付かれるよう話題を誘導し。結果実験と称してそこらの岩に向けてぶっ放すという、環境保護の四文字に中指を立てるような行動の末の習得にございます。

この砲の威力ときたらそれはもう！台地が抉れ、当てられた原生生物どもは跡形もなく消し飛びましたぞ！あれを食らえば今の拙僧であっても一溜まりも無いでしょうなあ！

そのように度々茶々やら横やりなどを入れつつも、拙僧らは無事深界一層を突破し、二層へと足を踏み入れたのでした。

二層に突入した拙僧らを出迎えたのは、巨大な樹が空から生えているという摩訶不思議な光景でした。

拙僧が乗つてもびくともせぬほどに太い木の幹を、ひよいひよいと飛び回りながら先を目指します。途中ザリガニを巨大にしたような原生生物などを見かけましたが、それらも全て無視し、極力戦闘を避けるように進んでおりますぞ。

……もちろん。度々目に入る、樹の幹などに埋まったキラキラと光る遺物に、涎を垂らしながら飛びつかんとするリコ殿を二人がかりで宥めつつですよ？

「おお、なんと！アレがリコ殿のおっしゃっていた監視基地ですか！これはこれは！実に大きな望遠鏡ですねエ！拙僧驚きました！」

「えー？そんなに驚くほどかなあ？確かにアレはだいぶ大きいけど、性能の良い望遠鏡ってあーいうものじゃない？」

「そうだったかな？地上ではあまり見かけなかったけど」

「なんと?!カルチャーショック!!」

そのような事を談笑しつつ歩いておりましたが、名残惜しい事に監視基地の入口、ゴンドラ乗り場に着いてしまいました。ンン。ですが、まあ、やはりと言いますか。ゴンドラは降りて来ませぬなあ…

この監視基地は二層の天井にぶら下がるような形で建てられていますので、中に入るためには昇降機を使わねばならぬのです。

原作にはもちろん拙僧がいませぬのでレグ殿が腕を伸ばして云々……といった感じでしたが、今は拙僧がおりますので。

折角のよい機会ですしここはひとつ、拙僧の陰陽術でも披露してみせましょうかねエ  
!

「あれ？おつかしーなあ……監視基地の中にはいつも見張りさんがいて、基地に近づくとゴンドラを降ろしてくれるって聞いたんだけど……」

「じゃあ僕が腕を伸ばしてみようか。この距離であれば……うん、両手ならおそらく届くだろう。リコ、掴まっけてくれ」



「お待ち下されレグ殿！それには及びませんとも」

「ん。どうした、ドーマン」

「ここはどうか拙僧におまかせなされ！レグ殿はこれまでずっとその腕を使われてきたので、とてもお疲れでしょう。折角ですので？拙僧の術でも一つ披露してみとうござい  
まする」

「「ジユツ？」」

「ねえねえドーマンさん、ジユツってなあに？」

ソソソソ。そうでしたそうでした。この世界は魔法の出てくるお伽噺が無いのでした。そういった童話の類はどうやら全て奈落を題材にしたものになっているように……困りましたねエ、どう説明したものか……

「そうですねエ……拙僧は身体が大きく力の強いだけでなく、少しばかり遺物の如き力

を扱うことができるのですよ。実は先ほどの食事の時も、火などは拙僧の呪術にて！」

「——す、すごーい！スツゴいじゃんドーマン！え!?じゃあドーマンさんも、火を噴いたりとか、腕がすつつごい伸びたりするの!？」

「スゴいな……ボク以外にも奈落オールドの至宝がいたとは……」

「ええ、いえ。厳密には違いますが。よい例えが見つかりませんでしたゆえそう言うただけでございます。残念ですが拙僧、奈落の至宝で無いことは確かです……ンンン? いや、そうであるとしておいた方が分かりやすいですかな?」

「ん、よく分かんないです!」

「ンンン—そうですかそうですか……」

「だから、また教えてください!今日の夜とかに!」

「——ふふふ！ええ、仰せのままに。さあて、お話はここまでにしておいて、早く昇るといたしましょうか。そろそろ監視基地の方々も痺れを切らし、その顔を真つ赤に茹で上がらせている頃合いでしょうからねエ！ではお二人とも、行きますよ！そォーれ！！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ・・・5

「ではお二人とも、行きますよ！そオーれ!!」

「急々如律令！」

拙僧がそう言うのと式神が5、6つほど拙僧の服の袖から飛び出し、お二方の服に貼り付くと、たちまち宙に浮かせました。

上上がる、という行為がこの奈落においてどれだけ危険な事であるかというのは皆様ご存じの通りにございます。それは当然お二方も同じ。一瞬間を強張らせましたが、まだ少ししか浮かばせておりませんので、今はもう純粹に楽しんでおられます。

子供の適応力というのは凄まじいですなあ…

「わあ！スゴイ！ねえレグ！私、紐も無いのに浮いてるよ！それになんか紫色の光も……って、れーぐー。何やってんの…」

「おわわわわわわわわア!!」

「れぐー…もうっ、そんなに慌てなくってもいいのにー」

「いや、自分で飛んだりするのは、怖くないんだが、自分以外の人に、ゆっくりと浮かせられるのは、ちよつと……怖いぞ。予想の倍ぐらい」

「おやおや！どうやらレグ殿は空中浮遊が恐ろしいご様子。でしたら拙僧が抱えて行きましょうか？」

「ツ、いや、このままで大丈夫だ！やってくれー！ドーマン!!」



「ソソソー? どうされましたか?」

「もう二度と、ドーマンには頼まないぞ、ボクは!」

「ンンンン?! 度し難アい!!」

『『こっちのセリフだー!!!』』

「ウルサイねえ……声が大きいよ、君たち。漫才なら他所でやりな」

お二方のどうしようもないモノを見るような視線を一心に受けておりますと、入り口から声が聞こえます。どうやら何者かが入口までワザワザ出迎えに来てくれたのでしよう。

——ンん? それにしてもこの声は……ああ、遂に! 遂に来ましたねエ!!

「全く、中に入ろうともせず喋り続けて、やつと来たかと思えば赤笛が1人に機械の少年、オマケに不審者かい？これはこれは……随分と愉快な来客だねえ……」

探窟家の最高峰。白笛が一つ！無双の怪力を誇る不動卿、『動かざるオーゼン』！

——つて、

「ンンンンン?!お待ちなされ、オーゼン殿！拙僧は決して怪しいモノなどではありませんませぬ!!」

「そ、そうですね！ドーマンは性格は度し難いし、見た目も胡散臭いし。さつきも私達をふっ飛ばしたけれど……」



「リ、リコ殿……そこまでおつしやりますか……？」

「で、でも、なんやかんやで私達の隊のメンバーなんです！」

「……ふうん、そうかい。ま、とつとと上がっていきなよ。玄関でずっと立ち話されると迷惑だ」

ンンン！ 実に良い事です！ 拙僧もどうやら、彼女らの隊の一員として数えられるようになったようで！

ええ、ええ。いい感じですねエ……上手く取り入っているようで。拙僧安心しました

！

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・6

ガリツ、ガリツ、ガリツ

「ふうん？この笛確かにライザのだな……まさか、また見ることになるとはねえ……」

ああ！素晴らしい！スバラシイ！拙僧、監視基地の中にてかのオーゼン殿と面談しておりますぞ！！オーゼン殿の白笛ガリガリ！よもやこれほど間近で見ることができようとは！

いやはややはり、一度死んでみるものですねエ！

「あ、あの！オーゼンさんです、よね……う？さつきドーマンもそう言ってたし……その

笛、見つけてくれたって」

「……そうだよー、私がオーゼンだよー」

ンンンンンンンン  
!!!!!!  
(限界オタク魂の叫び)

「あ、あの！助けてくれて、ありがとうございました！」

ライザ殿の白笛を未だ掻きつづけるオーゼン殿に、流石のリコ殿も痺れを切らしたのか、意を決して話しかけられます。

「んん?」

「リーダーから聞いたんです！アビスの中で生まれた私を『呪い除けの籠』の中に入れて、それでお母さんと一緒に地上に運んでくれたって！」

「……ああ、アレね。アレさー、重くて途中で何度も捨てていこうと思ったよ」

「ああ思い出すなあ、大事な『鐘』まで放置して……置いとけばあの子も来てくれたんだよなあ……」

「ンフフフフフフ……君、赤笛だろう？ダメだよ、こんな所に来ちゃさあ」

「あ、あの！そのですね！私、お母さんに呼ばれてきたんです！ほらこの手紙も……それでレグと一緒に奈落の底まで行くんです！」

「だから、お母さんの事だけ聞いたらすぐ出ていきますから……」

「あーそう。そうなんだねえー」

「で？果たしてそれは君たちがここに来ていい理由になるのかねえ？」

「ううっ。その、ゴメンナサイ……」

「……とは言ってもだ。その赤笛がどうやってここまで来れたかには、多少興味があるけどね」

「機械の少年の尽力か、はたまたその胡散臭い大男のおかげか……」  
「まあいいや。ねえ、そこの変態」

「ンンン？ どうされましたかなーオーゼン殿ー。もしや今ー、拙僧の事を呼ばれましたかなー？ ああーなんととも悲しい事ですすよ！ 白笛ともあろう御方が初対面の人間をヘンタイ呼ばわりするなどとー！」

「うるさいねえ……オマエみたいな変な格好のヤツ、オースの酒場でも、深界五層でも見たことないんだ。オマエなんて変態で十分さね」

「大体なんなんだいその服。破産した道化師の真似事かい？ ああなるほど、随分よく似合ってるよー！」

「……ふふふ。随分ボロクソにおっしゃりますねえ……この服、拙僧のお気に入りなのですが……」

「ですがまあ。そこまでおっしゃるならば着替えましょうともー！」

全くしようがないですねエ!! 拙僧、別に着替えたいわけではないのですが!?!? そこまでお望みになられるのであれば! 着替えないワケにはいきませぬゆえ!!

今こそ最終再臨の時!!

「別にいいよ」

「ンンン!では、ご笑覧あれ!!」

「結構だよ」

「フォルム、チエーン」

我が躰の精強なりし様を、その全てを余すことなく皆様方にご覧になつていただくとうしまして。拙僧の身体が眩い光を放ち始めますと、いきなりオーゼン殿が立ち上がり拙僧の腹にグーパーパンをブチ込んで来られました。

グウツ、おおおおヲヲ?!?! 痛い?! おお! なんとという馬鹿力!! これはツ、腹に響きます

!!!

やはり遺物の力とは恐ろしいものですなあ! 『千人楔』……よもやこれほどの力を  
持っているとは! 何とかして手に入れたいものですが…

「まったく、この変態め。度し難い……子供の前で何考えてるんだね。もしものことを  
考えてここに残つといて正解だったよ」

「お師さま?! 今すごい音がしましたけど!」

「ドーマン?! だ、大丈夫!?!」

「ンツ♡ええ、大丈夫です! ご安心召されよ! あなた方がおられる限り、拙僧は何度でも  
蘇りますれば!!」

「——チツ。まったく、度し難いねえ……マルルク」

「はい！お師さま！」

「この子たちを部屋に連れて行って、話聞いといて。子供同士の方が話しやすかる？」

「え、あの、オーゼンさん？ドーマンは…」

「私はコイツと話すことがあるからさ。ライザの話は明日聞かせてあげよう」

「ほら。サツサと行きな」

——はて？何故拙僧だけが残されたのでしょうか？まあ拙僧としては、原作の登場人物と話すのは楽しいので？決して苦ではないのですが…

「さて、で？何考えてるんだい、オマエ」





よ?。」

「そういう薄っぺらい言葉が聞きたいんじゃないだよ。私はねえ、オマエがあの子達に何をするつもりなのか聞きたいのさ」

「ンンンンン! おやおやあ? 不動卿ともあろう方が子供の心配ですか? ンンンン! 実に良いご趣味をされているようで! もしくはこれこそが長生きの秘訣なのですか? であるならば是非ともご教授いただきたく!」

「くどいよオマエ。それとももう一発殴りたいのかい?」

「——ほおう? 脅しのつもりですか? エエ、それであなた様の気が晴れるというのならばどうぞ心ゆくまで! あ、拙僧としては先程よりもっと下側、ヘソの上辺りを狙って下さると嬉しゅうございます♡」

拙僧がそのように言うと、オーゼン殿は心底気持ち悪いものを見るような視線を向けられます。

「……ふん。つまらないねエ。大方何かしら腹に仕込んでるんだろう？道化の格好をしてるんだ。騙すなら、もつと上手くやるんだね」

「んふふふふ、これは失敬！……で、何でしたかな？ああ、そうそう！拙僧が何をするつもりか、でしたねエ。でしたら、ええ。『何もしない』が答えになります。勿論嘘ではないですとも！」

「ふうん。ここまで言つてまだシラを切るんだ？面白いねえ……なら理由は何なんだい？」

「理由、理由を問いますか……ふむ、そうですねエ、敢えて言うならば……放っておけなかつたからでしょうか？」

「……へえー、続けなよ」

拙僧の言に興味を持っていただけたのでしよう、オーゼン殿が続きを促しておられま

す。はてさて、どのようにして丸め込んだものか…

「拙僧は彼女らとアビスに潜る前、岸壁街などという薄汚い場所におりましてねエ。あの場所のことはご存じでしょう？そこで何が起こっているのかも。拙僧はずつと見ておったのですよ。——奈落に墮ちていく者たちを」

「ええ、ええ。悲劇ですよねエ？明日の朝を迎えるために、己の未来を贖とする。本末転倒ではとか拙僧思うのですが……まあある意味、あれも一種の地獄でありましようなあ」

まあ拙僧、彼奴らも全て喰ろうたわけですが。

「さてある日、そんな地獄に子供が四人迷い込んで来ました。二人は荷袋をぎゅうぎゅうに詰めて、もう二人は其れの見送りで、ですよ？何かと話を聞いてみれば。その二人は自らの意思で挑むというではありませんか！この奈落に！総てを飲み込む大飯食らいの王様んです。ふふふふふ！到底、正気の沙汰とは思えない！」

「——ですが、拙僧興味が湧いてきまして。そうでしょう？悪政を敷く王とは、深層の獣より恐ろしいものである。そう聞きます。その食欲の赴くままに、喰らい尽く

す。老いも若きも！男も女も区別なく！平等に!!!——そしてもちろん。子供も」

「そこでふと思つたのです。彼らについていけば面白いのでは？」と

「唯の悲劇はもう見飽きました故。ええ。悲劇の後は喜劇です。年若き少年少女が、艱難辛苦を乗り越えて、大冒険を繰り広げる。ンフフ！何という王道物語！後の世において陳腐だと言われても過言ではないでしょうなあ！」

「ですが。ええですが！見てみとうなつたのです。ただ美しいだけの物語というのもそれはそれで興味がありませんゆえ」

「ただ美しいだけの物語。苦痛は無く苦難も無く、ぬるま湯の如き安寧だけがある。アナタも駄作であると罵られますかな？当人からすれば極楽のごときそのの、一体何処が悪いというので？ええ。その苦痛も苦難も嘲笑も、そして試練すらも！全て全て、拙僧が喰らうて差し上げましょうや！」

「フハハハハハ!!不動、いえ。動かざるオーゼン殿。アナタはそこで指を啜えて見ておれば宜しい！我らは、先へと進みまするので！」



ああ、しかし。何とも。

よくもまあ滑らかに回ることですよ、拙僧のこの口も。

「あー。ドーマンおかえりー」

「ンンン、道満が只今戻りましたぞ。ああ、それにマルルク殿もおられたとは！」

「…なあドーマン。さつきスゴイ音がしたんだが、大丈夫——な、何があつたんだ？」

「ソソソ、ご安心召されよレグ殿。あれはオーゼン殿が拙僧の肩に止まった虫を、思い切り叩き潰した音でありますれば」

「へえー…そうだったのかー……」

「ソフフフフフフ。ええ、ええ。そうですとも」

「あ、あのー。ドーマンさんですよね？」

「ソソソ、如何なさいましたか？マルルク殿」

「お、お風呂、あつちですの……あ、そ、その！僕！」

「なにか冷やすもの持ってきます！顔がスゴイことになってますよ!?もうメチャクチャですー!!早く冷やしてくださいー!」

「ああーいらぬよー。そいつなんかにはインビヨウのゲロで十分だよー」

「ぴえっ!?お、お師さま?!いつからそこに……?」

ソソソ……おかしい。何故です?何故このようなコトに?



忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ・・・7

さてさて、オーゼン殿がマルルク殿を連れていかれた後。リコ殿とレグ殿は部屋の中に置いてあつたガラク四タ遺物級をまじまじと観察されております。

この層で採れる遺物というのは大抵が、刺激を与えると眩い光を放つ“太陽玉”であるとか、そういった、飯のタネにはならぬような取るに足らぬものです。ですがそのような物もリコ殿にとっては金銀財宝に等しき宝物、放つておけばきつと何時間でも観察されておられる事でしょう。

「……ところでお二人共。そろそろ夜も深くなつてきた頃でしょうしお休みになられてはいかががでしょうか？」

「ええ〜？でもまだオンミョウジ？つてやつの話聞いてないよー」

「ああ、実はボクも気になってたんだ。ドーマン、君はどんな事ができるんだ？」

——まさか覚えておられたとは。ここは適当に煙に巻いておきましょうか。

「そうですねエ……天体観測や占いなどをする人々のことを、拙僧の故郷では陰陽師と呼んでおりました。拙僧は……運気を上げたり、多少天気を変えたりなどできますな。あとは人を呪ったり、でしょうか？」

「の、呪うのか?!人を?!」

「——ええ!拙僧そういつた類の術も多少は嗜んでおりますれば!例えばそうですねエ……真夜中、月の出ておらぬ夜に枯れ草で編んだ人形に呪う人間の髪の毛を入れるのです。そうして作った呪いの人形に!思い切り杭を打ちつける!!そうすると次の日の朝には髪を持ち主が死んでいるのです。それも苦痛に歪んだ表情で」

「や、やめろドーマン！からかうな！」

「ふふふ、信用できぬと言うのであればお作りしましょうかア？未だ二層ですから草などどこにでも生えておりますよう！」

アララ、リコ殿の陰に隠れてしまわれました。

ンン♡知識としては知っておりましたが、本当に幽霊が怖いとは！ああ。なんとも、可愛らしいですねエ！

「ささ、もうよろしいでしょう？明日は朝早いのですから早く寝なされ。でないと拙僧が呪うてしまいまするよ？」

「も、もう寝る！お休み!!」

「うん。ふああ〜……わたしもねるねー。おやすみ……」

「ええ、よい夢を」

チヨロいですなー。甘々過ぎていつか悪い輩に騙されないか心配ですぞ？

……さて、と？もう寝付かれたのですか、子供は寝付きが良いですねエ。安眠できるまじなよう呪いでも一つかけて差し上げましょう。

あとは……拙僧どうせ朝まで暇ですし。明日はオーゼン殿とイチャイチャする予定です。拙僧の能力の再確認などしておきましょうかね。

さて、こうして懐より取り出したるは拙僧特製の手帳にございます！

表紙には拙僧の作成できる中でも特に強い式神が憑いておりますゆえ、唯人には触れることすらできぬという優れもの！まっこと、陰陽術とは便利なものですねエ

しかもこの世界ではあり得ぬようなパスワード機能付き！……ンンン、拙僧。陰陽術つてもはや何でもアリなような気がしてきましたぞ？

『其が一番初めに現れたのは、何処？』

勿論、下総国ですな。英霊剣豪七番勝負が拙僧の初登場シーンでありますゆえ！拙僧が回答を書き入れると式神がスーツと手帳の中に消えていきます。

これで拙僧が再び手帳を閉じるまでロックが解除されたわけです！ささ、では。見ていきましようかねエ：

### 『DOMAN道場』

お恥ずかしながら準備に熱中しすぎてしまいました。拙僧ここから先朝が明けるまで終始無言でしたので、皆様には特別に！特別に！拙僧がどの様な能力を持つのか解説させていただきとうございします！

ここに記されている内容は物語にはしばらくは直接関わって来ない予定であります

れば。煩わしければ飛ばしていただいても結構ですぞ！

さて、その前に。拙僧のこの体は『Fate/Grand Order』に登場する「サーヴァントのものなワケですが、サーヴァントのレアリティをこちら側の『メイドインアビス』のキャラクターに対応させてみましょうか。

ふふふふふふ！それでは参りましょおう！

・ レベル1のサーヴァント・・・測定不能

分かりませぬ。恐らく赤笛と青笛の間ぐらいでしょうか？さすがに未強化のエイリーク殿でもナット殿やシギー殿らには勝てるでしょうし。ネエ？

・ 一部の星3のサーヴァント & スキルとLvMAX ①・・・黒笛以上白笛未満。

ぐらいでしょうか？一気に飛びましたなア!!ンンン。正直、一部の星4サーヴァントもこのあたりかと思われませんが……

因みにイメージはマシユ、ステンノ、エウリュアレ、ジルドレエ(剣)、あたりですぞ。

・ 一部の星3のサーヴァント十星4サーヴァント & スキルとLvMAX  
 ②・・・事前情報アリで白笛と善戦できる。場合によつては勝利可能か？

ぶつちやけ相性の問題もあると思いますぞ。

イメージはロビンフッド、ランサー、メドウーサ、アストルフォ、ヘラクレスですぞ。ですが、対オーゼン殿を考えた場合、彼らの殆どが負けるでしょうなあ。特にヘラクレスは。

唯一善戦できそうなのは、かの英雄王と半日戦い続けたランサーぐらいか…？

逆にボンドルド殿であれば、アンブラハンス祈手のサポートがなければロビンフッド、アストル

フォならばあるいは勝てるやも？

どちらにせよヘラクレスのような狂化のレベルが高い、理性の無いサーヴァントでは厳しいでしょうな。

・ ほとんどの星4サーヴァント & スキルとLvMAX・・・いきなり遭遇しても互角に戦える。

このあたりから、英霊側もトンデモない力になつてきますからねえ……

それでも水着サーヴァントなどでは厳しいでしょうか。

イメージは柳生宗矩、アストライア、太陽3倍ガウエイン、ジークフリート&ゲオルギウスペア（最後2つは少々インチキ臭いですが…）ですぞ。

さアてお待たせしました!!いよいよ星5サーヴァントでございまする!

・ ほぼすべての星5サーヴァント & スキルとLvMAX・・・白笛に余裕で勝利できる。

ンンン。悔しいですが……闇の女狐らに勝てる光景が想像できませぬ。

なんです? ツングースカ大爆発で攻撃するとか、ピラミッド×2の尖った部分で挟み込むとか。頭がオカシイのでは???

他の方々も逸話がぶっ飛んだものが多いですからねエ…

英雄王も最初から少し警戒してさえいれば勝てるのではないでしょうか?

イメージは山の翁、英雄王、アルテラ、超人オリオン、オジマンディアス、女狐ら、アラシユ殿ですぞ。

ん、コロンブス殿は?…ンン、ダメですか。そうですか……



はて、『では、拙僧はどうか？』ふうむそうですね……

・ 宝具マLv120金フォウマアペンドスキル全開放足跡MAX超ムキムキケメ  
ン蘆屋道満・・・測定不能

ソソソ？これが昔流行ったチート転生などというやつでしょうか？あ、ああッ！おやめなされ！拙僧に石を投げるのはおやめなされ！聖晶石ならばいつでも大歓迎ですが……

どうやら拙僧、前世でFGOをプレイしていた頃の『蘆屋道満』なるサーヴァントの全てをそっくりそのまま引き継いでしまったようで……

実に陳腐!!陳腐ですねエ!!もしも拙僧が神であるならばもっとマシな設定を考えますぞ?!

まあ拙僧、使えるものは全て使う主義です。ありがたく頂きますが…

あと、これに加えて一度ゲーム内で装備したことのある概念礼装を装備できます。一通り試したところ、『カレイドスコープ』、『魔性菩薩』、『恋のお呪い』、凸『黒の聖杯』、凸『死霊魔術』、凸『クリスマス軌跡』、凸『2030年の欠片』、各種イベント礼装など、ほかにも様々…

いつもストーリー攻略に連れ出していて正解でした！ええ、ですが。もともと持っている『ベラ・リザ』はもちろんの事、一度も装備させたことのない礼装、凸『月霊髓液』、凸『エアリアルドライブ』などは不可能でした。

ンンン…『月霊髓液』が使えるのは、少しばかり厳しいですな。

まあ他の礼装がありますゆえ、別によいのですがね。これ以上を望むのは、厳しいでしょうからねエ…

凸『モナ・リザ』などどこで使うのでしょうか？絆上昇礼装は重宝しておりますが、あ、拙僧普段は凸『ティータイム』を装備しております。

お陰さまでお二人との絆がより早く深まったような気がいたしますぞ！

さて！ではそろそろお二人とも起きられるようですし。この辺りで終わりましたよ  
か！

……あ。そういえば、原作ではマルルク殿も一緒に寝ておられたような気も致します  
が。オーゼン殿が連れて行かれましたからなア。

結局マルルク殿の性別はどちらだったのでしょうか？

今からでも部屋に忍び込んでみてくれようか…

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・8

「んんっー、おはよードーマン」

ンンンンン！実に良い朝ですネエ！

まあ拙僧寝ておりませぬが。睡眠が娯楽にまで成り下がったのはこの身体になった利点の一つでもありますぞ。

「ごめんねドーマン、ちよつとトイレ行ってくるー」

「ンンン、場所はご存じですか？拙僧が案内して差し上げまする」

「うんー、おねがああああああい」

おやア？どうやらリコ殿はまだまだ寝足りないご様子で。

「フッフ、では。どうぞこちらへ」

監視基地で厠といえは少しばかり心配ではありますが……厠に行く時間も原作とズレておりますので、例の『オバケ』が出ることもないでしょう。

「あ、ありがとうねドーマン……ドーマンがいなかったら、私多分漏らしてた……」

お  
り  
ま  
し  
た

ンンン?!なぜです!?!何故か数も増えておりましたし!

昨日の拙僧とのオハナシがよほど堪えたのでしようかねエ……あの程度の嫌味で気分を害されるとは、体は不動であれどもその精神はユル♡ユル♡だったようで!

「くあつ、おはようドーマン。さつきリコの叫び声が聞こえたんだが何かあったのか?」

「……エエ、出たのです」

「で、出た?…まさか」

「ンンン。ご察しの通り、動き回る死体です」

「……………きゆううう」

「何と!!レグ殿?レグ殿?!返事をしてくださいれ!」

これは……オーゼン殿の部屋に行くのはもう少し時間がかかりそうですなあ。

何とかレグ殿が意識を取り戻した後、我々はオーゼン殿と一緒にマルルク殿の手料理を食しておりました。しかしこの肉のなんと柔らかい事か！原生生物の固い肉もここまで食べやすくできるものなのですか。

後で好感度稼ぎもかねて、香辛料など分けてもらえぬか交渉してみましようか…

「オーゼンさん。朝からよくそんなに食べられますね……」

「ンん、探掘家は体が資本だからねえ。とにもかくにも、食わなきゃ始まらないのさ」

「おおー、リーダーとおなじこと言ってる…」

「ンンンン！どうやら拙僧の聞くとおところによりますと、食事を多く摂られる方は小食の方と比べて老けやすいようですぞ？ともすれば……おやア？オーゼン殿は…」

「オマエさあ。人の神経を逆撫でするようなことしか言えないのかい?」

「おやおやおやおやア? どうかされましたかな? もしや最近シワが気になってきたとか?」

「だ、大丈夫ですお師さま! お師さまはとてもお綺麗ですよ…?」

「マルルク…: いい子だねえ。それはそれとして後で裸吊りだよ」

「なんでですか?! 今回はボク何も悪くなかったですよね!」

「気分だよー」

「もうどうしようもない?!」

「マルルク、君も大変なんだな…」



随分と賑やかで平穩な食事風景ですなあ。拙僧のハートも思わず浄化されてしまいそうになりますよ。

さてさて、皆様はもう食事を終えられたようでオーゼン殿が話を切り出されます。

「君たち、もう食べ終わったかい？ならついて来なよ」

「君がさつき話していた動く死体についても話してあげよう。もちろん、知りたければだがねえ？」

「さあ、ついておいで」

「ンンン。では行きましょう！隊長殿？」

「……はぐ」

さあ、いよいよあの「籠」と対面する時が来たのですな。

リコ殿は立ち上がり、決意を込めた眼差しをオーゼン殿に向けておられます。

「君たちのことは大体マルルクから聞いたよ」

「確認したいんだけどさあ、君はライザの行方を追って来たんだとか？まったく察しの悪い……」

「ライザは既に死んでいる。その白笛が上がったろうに」

「君が母を追う旅はここで終わりだよ」

「……オーゼンさんは、どこでその笛や封書を？」

「墓さね」

「深界四層『巨人の盃』。そこにトコシエコウの群生地があつてねえ……そこに墓ができてたんだよ」

「あそこ、ライザが好きな場所だったんだ」

「そ、そんな……。でも、お母さんは私を呼んで、」

「それさあ、ライザの字じゃないよ。ライザは悪戯でも、そんな字は書かないよ」

「んん？アレエ？きみが奈落の底を目指す理由は何だっけ？」

「わ、わたし…自分で確かめに」

「ホウ？それは名案だ。墓でも暴いてみるかね？」

「ふふふ、ご安心召されよりコ殿」

「えっ？どーまん…？」

「貴方の母君は生きておられますよ。もちろん、根拠はありませんがね？」

「別に占いなぞ行つた訳でもありませんが。エエ！拙僧、このような勘は優れておりますゆえー！」

「ですから、ご安心召されよ」

「……………うん！ありがとう、ドーマン。なんか落ち着いたよ」

「ンン！それはよかった！」

まあ、落ち着いたのは拙僧の呪いのお陰ですが。

「チツ、ツマラナイねえ」

凡そ常人には開閉することすら困難であろう巨大な扉を片手で押し開けたオーゼン殿は、そのまま中に入ってしまったわけです。

「ここは何だ？」

「私室さ。知りたいからついて来たんだろう？」

「さあ、入りな」

「オーゼン、この四角いのは……」

「——すごいよ、これ。こんな複雑な模様見たことない…二級以上の遺物？」

「これはライザが買い取った遺物さ。ここに運んだのは私だがね。『呪い避けの籠』っていうんだ」

そう言われると、オーゼン殿は白笛を吹きこの籠を起動されました。

笛の音が鳴り響いた瞬間この籠は、まるで意思を持ったかのように蠢き始め、中の肉が露出した状態へと変形いたします。

全ての工程が終わった後、籠の中央にはちようど人間の赤子が一人入りそうな程度の空間が空いております。

ほオ！ここにリコ殿が収まっていた訳ですね!?何とも興味深い…

「層をまたいで移動ができない生物をこの中に入れておくと、上昇負荷を受けない……なんて言われてるが、実際は呪いを受けるし死にもする。ただ…」

「動きだすんだよ。分かったのは君のおかげさ」

「君、死産だったんだよ。それが邪魔くさいからこの籠に突っ込んだら、なんと動き出したのさ」

「今朝動き回る死体を見たと言っただろう？アレは、元々は晩飯に使う予定だった肉だよ」

「それならコレが動き回って逃げるんだ。途中から面白くなってねえ…結局5、6匹分ぐらい入れたかなア」

「ねえ、きみ」

「きみはいつまで持つのかなア？」

「それとさア……あの時動いた君も、晩飯の食材も。両方とも奈落の中心に向かおうとしたんだよねえ。君なら、なにか知ってるんじゃないかな？」

「君も、あの肉と同じなんだろう？」

「どうして……そんなこと……」

「ああ、そろそろ分かってくれたまえよ」

「私はキミが、嫌いなんだよ」

リコ殿を掴もうとしたオーゼン殿の腕をレグ殿が掴まれます。

……ああ、拙僧はただ見ておるだけですよ。

「……………おやあ？なんだい、『奈落の至宝』の少年」

「オーゼン、あんたの話はとても興味深いが、これ以上リコを傷つけないでくれ」

「いくらなんでも大人気ないぞ！オーゼン！」

「……………ああ、それ。よく言われたよ」

「ねえ、きみ。機械なんだってねえ。ならさあ、神様って信じるかい？」

「?!な、急に何だ?」

「この人たちはねえ、あまり神を信じないのさ。代わりに何を信じているのか、きみに分かるかい?」

「それはここ、大穴そのものさ」

「奈落の底は未知の領域、畏怖されるからこそ神足りうるんだよ。そこに簡単に行つて、帰つて来られたら? 奈落信仰も、遺物の価値も、足元から揺らぎかねないのさ」

「だからこそ……ああ、本当に良かった! キミが記憶を思い出す前で! 思い出す前に処分とかないと——」

「急々如律令!」

「……ンンンー♡真に残念ですがここまでです! オーゼン殿?」

後に残ったのは、能面の如き顔をしたオーゼン殿のみでありました。



忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ・・・9

「急々如律令」

拙僧がそう唱えると、腕を掴まれていたレグ殿とそれを見ていたリコ殿の姿が掻き消えました。これは拙僧の転移術式であります。

その成功率は何と驚異の百パーセント！かの『太公望』なるサーヴァントの扱う土遁の術などよりも優れておりますれば！

まあ、転移先に事前に式神を置いておかなければいけないのですがね……

——ああ別に『いしのなかにいる』などといった不具合が出る訳ではなく、拙僧らの泊まっている部屋光殿に送つただけですぞ。

ついでにポディーガード光殿も付けさせていただきました♡これが俗に言うリップサー

ビスと言う奴ですな。

「ンンン♡真に残念ですがここまでです！オーゼン殿？」

「……あの子たちをどこにやったんだい？」

「ご安心召されよ、拙僧らの泊まっている部屋にあります。ええ、ええ。これから拙僧が行うことを見られては心優しき彼女らはきつと気分を害されるでしょうからねエ？」

「ところで拙僧は今マルルク殿の後ろに立っているわけですが。何もせぬので？」

「へえ？いい度胸じゃないか……それで人質に取ったつもりかい？」

「いえいえ！そのような気は毛頭なく！拙僧、人質を取るぐらいならば既に殺しておりまするゆえ！」

「ただ拙僧は知っておいてほしいのです。あなたの——」

「だまれ」

そう彼女が言うや否や、拙僧は瞬く間にオーゼン殿に殴り潰されました。

ンンン……まだ話している最中でありますのに。全くせつかちですなア。礼儀を知らずとも白笛というのは務まるモノなので？

(ツチ、やっぱりか……)

(昨日殴ったときもそうだったけど殴った感覚が軽い。まるで布を殴ってるような感覚だ)

(これで確定した。こいつ、人の形をした別のナニカだ)

(ハハ、スゴいなあ。本気で殴ったのに相手が形を保ってるなんて何時ぶりだったかねえ?)

(などと考えておられるのでしょーなー)

ンンン！察しの良い皆様方ならばそろそろ分かったかもしれませぬが、今殴られたのは拙僧の式神で作った人形！デコイでありまする！

力尽きて部屋の隅に転がっている式神を分解し、呪符の状態に戻してから回収します。時代はリサイクルですよ！

「オーゼン殿もそろそろ気づかれましたでしょうかねエ！ンン、そうですとも！先程の拙僧は偽物なれば！さあ、この拙僧も殴ってみますか？ええ、エエ！どうぞ、こころゆ

」

「ンン♡ハズレで——」

「ンンン!!これもハ——」

「これもハ——」 「ンン、これ——」

「おやア?どうやらこれも——」

「ンンン♡ダメで——」

「フフフ!残ネ——」 「さあさ、どれが——」

「幼い拙僧も——」

「年老いた拙僧も——」

「無数の拙僧が——」

「ええ！まさに限りな——」

「いくらで——」

「いくつでも——」

「さあさあ？早く殺さ——」

「ここを埋め尽くしてしまいますぞ？ほうれ！どうされたのです！ガンバレ♡ガンバ  
レ♡」

（クソツ、クソツ！キリが無い！）

（こんなメンドクサイやつを相手するのは生まれて初めてだよ。度し難い！）

（数を生かした人海戦術で攻撃してくるから全員を相手しなきゃいけない。それで一匹



オーゼンの部屋の扉が勢いよく開かれる。彼らの目に飛び込んできたのは――

「ドーマン！大丈夫か――え？」

「はあ、はあ…レグ、ドーマンは？」

「――」

「レグ？どうしたの……え?!」

「ハア、ハア、はあ、はあ」

「ンンン？もう終わりですか？ほうれ、白笛とはこの程度で疲れるほどヤワではないでしよう？さあ、立ちなされ！」



膝をつく『不動卿』と、それを見て嗤う道満だった。

「——ドーマンが、勝ってる？」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・10

おやおやア？まだ百体も出していないのですが……もうギブアップとでも言うのでしょうか？

この程度ではF G Oでは生き残れませぬぞ？

式神の全員が妖精國の“もーす”程度の強さであるとはいえ、そこまでキツイものではないか？……まあF G Oでもサポーターあちらがいないと確かに辛いですから、しようがないですなア。

「ンン…大丈夫ですか？オーゼン殿。お疲れでしたら少し休憩いたしますか？」

「っ、うるさい！」

「おつとオ！危ない危ない！ですがやはり先程に比べて攻撃のキレが落ちておりますぞ？」

「幼い子供の、後輩たちの手前。情けない姿は見せられませぬからなア！もつと素早く！力強く打つてくだされ！サア!!」

「くそつ！ウロチョロとすばしっこい！——」

（いや待て、本気を出した私が追い付けない？『千人楔』せんにくさびを全身に打ち込んでる私が？）

「……ああなんだ、簡単な話じゃないか。私が遅くなってるんだね？」

「ンンン！ようやく気付かれましたか！ええ、おつしやる通りですとも。拙僧を一人倒すことに少しずつ上昇負荷の如きものがかかっておったのです！」

「ああ、どうかご安心召されよ。この情交が終わった後にはすべて祓っておきまするゆえー！」

（コイツが私への嫌がらせを主軸に据えて戦い続ける限り、不利なのは私の方かい）

……ツチ、さすがにもう時間切れかねえ。さつきからオマエの隊長がまぬけな顔してこつちを見てるのが鬱陶しくて、たまったもんじやないよ」

「ンンンン？……おお！リコ殿、レグ殿！そんなに息を切らして、どうかされましたかな？」

「ど、どうかされたじゃないよ?!いきなりドーマンがなんか言ったと思ったら部屋にいるし、その部屋にもなんか黒いガイコツみたいな人がいて…」

「めちやくちや迫ってくるのを何とか二人で逃げ切ってここに戻ってきたら、ドーマンとオーゼンさんが戦ってるし！」

「なんと！それはそれは大冒険でしたねエ!!」

ほおう…？恐らく本気ではないとはいえ、顕光殿と追いかけて逃げて切るとは！流石は白笛の娘ということなのでしょうか！ええ、驚きましたとも！

「ほら出ていった出ていった。部屋に戻ってすつこんでなよ、まったく……」

「ンンン♡では、お言葉に甘えてお暇させていただきまする！」

「え？え？ど、ドーマン。どうということなの？」

「ささ、行きますぞ二人とも」

「あ、うん……ねえドーマン、後でちゃんと説明してよ？」

「ンン！ええ、分かりましたとも。隊長殿」

三人が部屋から出ていった後。力が抜けてへたり込んだ私に部屋の隅で動けなかったマルルクが駆け寄る。

「だ、大丈夫ですか、お師さま?!」

「ああ、マルルクか……あの後アイツが離れた時、隙について逃げておけばよかつただろうに、なんでそうしなかつたんだね？」

「……………じ、実は、あの後ドーマンさんがお師さまと戦い始めた時、急に体の力が抜けちゃったんです。まるで日の光に当たった時みたいに」

「フン。（これもアイツの仕業か）ああ、そうかい……もういいよ、ご苦労さまだったねえ。マルルクも部屋に戻って休んでおきな」

「…いえ、すみません。お師さま」

「ンん？」

「ボク、さっきの戦いを見て腰が抜けちゃって……………少しだけ。ボクもここにいいでしょうか？」

「——好きにしな」

まったく。この子の前でこんな情けない恰好を見られるとは。

ああ、こんなことになるならマルルクは部屋に入れるんじゃないよ、まったく。  
度し難い、度し難いねえ……

ボロボロに打ち倒された私と、それに身を寄せて抱きしめる弟子の二人を。

ただあの忌々しい全ての元凶である『籠』だけが見下ろしていた。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探窟家をやっていたころ・・・11

部屋に戻った後僕たちはドーマンから、謎のガイコツから逃げ回っていた間の事の顛末を聞いた。

「はー。私たちが飛ばされた後にそんなことが……」

「ドーマン、君というヤツは。いや、うん。その………ありがとう。僕とリコを助けてくれて」

「ンンン！礼には及びませぬとも！拙僧はただリコ殿が率いる探掘隊の一員として当然のことをしたまでの事でありませぬ」



「それでもだ……なあ、ドーマン」

「ンン？何ですか？」

「さっき僕とリコを助けてくれた手前、こんなことを言うのは失礼だと分かっているんだが。キミは……いや、何でもない。すまない、忘れてくれ」

「ンンン？そうですか、分かりました」

後に振り替えてみればあの時が、僕たちが直接ドーマンの本心を聞ける最後のチャンスだったのではないだろうか。

……いや。あのドーマンのことだから適当にはぐらかされて終わつたかもしれないが。

だが、この時の僕は怖かつたんだ。ドーマンの事を聞こうとしたときに急に鋭くなつたドーマンの視線が。あの、何か薄い膜一枚を通してこちらを見つめるような眼差し

が。

その薄い膜が、ドーマンの何か恐ろしい部分を覆い隠しているような気がして。それに触れるのが、憚られて。

（キミは、僕やリコが考えうる最悪よりも、よほど度し難い人間なのではないか？）

もはや機会は永遠に失われ、再び来ることは無いだろう。

何だかレグ殿の様子がヘンでしたが、拙僧らはなんとかオーゼン戦を乗り切ったわけです！リコ殿らは直接オーゼン殿と戦っておりませんから、必然的にこの後にあつたオーゼン、sブートキャンピン逆さ森も無くなる。

そうすれば拙僧らはより早く三層『大断層』を抜けられるわけです！

素晴らしき計画です……流石拙僧、よくやったと自画自賛して――

「ドーマンドーマン！オーゼンさんが次の探窟隊が来るまで訓練してくれるって！」

ンンンンンンン  
!??????

せめて最後まで嬉ばせて下されよ!?そ、それは兎も角あの埴輪系クソデカ感情オバア  
サンたるオーゼン殿がナゼこれほどまでに譲歩を!?

ツハ！オ、オーゼン殿が、陰から此方を見ておられる……？

(んんんんん)

ン、ンンンンンンンンンンンンンンン  
!!!!!! (こらえきれない怒り)

結局拙僧は観念して、第二層の外郭にほど近い当たりの森へと出向いております。

「隊長殿？拙僧この場所にはあまり来とうなかつたのですが……」

「んもーそんな事言わないでよー。ここの原生生物はみんな光に弱いだろうし、焚火を焚いたら大丈夫だって！」

「そうだぞ。もつとも、ドーマンなら一人でも大丈夫な気もするが……」

「いえいえそんなことはありません！拙僧、前にも申した通り寂しがり屋でありますゆえ！」

「お前たち、うるさいよ。もう少し声を小さくしな。もうポイントに着いたから説明したいんだがねえ？」

「おつとオ？申し訳ありませぬオーゼン殿」

「さて、と。一人十分強いのもいるが。残りの子供は実力不足、このままアビスに潜つてもなれるのはせいぜいが食いでの悪い餌か小さめの苗床。あとは壁のシミぐらいさね」  
「だから、キミたちには最低限奈落で生き延びる事ができるだけの能力を身に着けてもらうよ」

「さつきも行った通り、君らを鍛えるのは次の大規模探窟隊が来るまでの三週間。モノになろうがならなからうが、それで終わりだ」

「…それじゃ、私は帰るよ」

「えっ」

「最初の課題は『生存訓練』だ。その大男のよく解らん手品の力を借りずに十日間生き延びてみせな。こつそり手伝ってもらおうなんて考えるんじゃないよ。私も時々、見に来るからねえ？」

「じゃ、精々がんばりな」

そう言うとおーゼン殿は去っていかれました。

……ンンン。折角ですし、新開発『食べている物の汁が服に飛び散りやすくなる呪い』の実験台にでも、

「ドーマンーどうしたの？ほら、拠点作りに必要な木の枝探しに行くよ！」

「……そうですねエ。分かりましたとも、隊長殿」

まあ、やめますか。興が削がれましたし。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやつていたころ・・・12

「フハハハハハ!!できましたぞ!どうですかリコ殿、この要塞は!素晴らしい出来でしょう!」

ンンン♡苦節三日、ようやく完成した拙僧の要塞!

この暗い森の中に突如現れた巨大な木造建築。少々アンバランスですが、それゆえオーゼン殿も驚かれて腰を抜かすこと間違いなしでありますよ!

ああ、オーゼン殿が来られるのが待ち遠しいですねエ!

「ど、ドーマンは一体何と戦ってるのさ?」

「無論、あの忌々しきオーゼン殿にて!」

「ふんっ」

拙僧が得意げにリコ殿へ説明していると、どこからともなく現れたオーゼン殿が我が要塞に向けて、その拳を振るわれました。

ズ  
ガ  
ア  
ン  
ツ

おおよそ女性の細腕から出てよい音では無いでしょう……土砂崩れのような音を立てて我が要塞が崩壊していきます。

木で組んだ魔術工房ではこの程度が限界か…

「……オーゼン殿？拙僧売られた喧嘩は買う主義なのですが？」

「ふふふーいやあすまないねえ。あまりにもお粗末な掘立小屋だったからついついぶつ



かつちまつたよ。ホント、すまないねえ？」

「ほおう？なるほど！また泣かされたいとおっしゃるので？ええ！もちろんお望みのままに！」

「わーわー！ドーマン！ステイスティ！だめだよー！」

「ンンン。しかしですねエリコ殿……」

「もうっ、だめなものはだめだよー……ほら、ね？また今度新しいの作ろう？」

「……おや？もしやこれ拙僧幼子扱いされておりましたか？」

オーゼン殿が爆笑されているのが非常に、非ツツツ常に!!癩に障りますが。

ええ、ええ。ここはリコ殿の慈悲深き御心に免じて許して差し上げましょう。

どうせ今日が生存訓練の最終日ですの？ええ。どうでもいいですとも。

「まあいいでしょう。ではリコ殿、あちらの方でトラップに足を取られているレグ殿を助けに行ったら昼餉にいたしましょうか」

「えっ?! ああつ、レグー!!」

「おやおや。まだ幼いというのに、元気ですなエ！」

「ンンンンン!! ただいま帰還いたしましたア!!」

「うへーただいまー…」

「なんだか久しぶりに戻った気がするな…」

道中何度かお二人をおんぶさせていたいただきましたが、何とか監視基地に到着いたしました。

ンン、さらば拙僧の『超辺獄大神殿デスチエイテMark. III』：

建築のコツというのは掴みましたので、いつの日かMark. IVを深層に建ててみた  
いものですが。いったい何時になることやら。

「はあ……オマエ。戻ってきたら戻ってきたでバカみたいに食うねえ？」

「いえいえ。オーゼン殿には遠く及びませぬとも！」

「備蓄はまだまだあるからこれぐらいなら問題ないんだが……ま、それよりもだ。キミ  
たち明日にはここを出発するんだらう？」

「せっかくの機会だ。前はそこの変態に邪魔されて説明できなかつたから今してやろう  
じゃないか。『奈落の声』とも称される白笛が伝えてきた、私たちだけが知りうる秘密の  
数々を、ねえ」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が奈落で探掘家をやっていたころ・・・13

さてさて。オーゼン殿による想定外の（原作通りとも言いますが）特訓もありました。が。いよいよ拙僧らはこの眼下に広がる深界三層『大断層』に侵入します。

結局オーゼン殿は見送りには来られず遠目からこちらを覗き見るだけ。この場所におられるのは、監視基地で度々すれ違った程度の面識しかないオーゼン殿の探掘隊『地臥せり』の面々と、マルルク殿のみであります。

拙僧との戦闘がよほど響いたのか、そもそも初めから別れの言葉なぞかける気が無かったのか……今となってはどうでも良い事ではありませんが。

「じゃあね、マルルクちゃん……元気でね」

「はい、皆さんも。どうかご無事で」

「……………でも、やっぱり。ボク、こんなこと言うの嫌なんですが」

「『やっぱり無理だ』って帰ってきてくれたら、どんなにうれしいか…ボクと同じぐらい

の年の子供が奈落に挑むなんて……」

「ボ、ボク……いろんな人たちを見送つてきましたけど、今日が一番悲し——わぶつ?!」

ああ、何と悲しげな表情で泣かれるのでしよう！拙僧は何もせず立ち去ろうかと思いましたが、つい抱きしめてしまいましたなア？

お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ありません。ですが拙僧は、このように泣いておる幼子をこのまま捨て置いて行きたくありませんぬので！

——ええ。本当ですよ？

「ド、ドーマンさん……?」

「ええ、ご安心召されよマルルク殿。拙僧らはどこにいようと奈落にてつながっておりまするゆえ。貴方のお師匠殿をあのようにした拙僧が言う事ではないかもしれませぬがねエ？ですが、ええ。拙僧は常にあなた様の傍におりまするぞ！ですから……そのように涙を流されるな。せめて笑顔で見送つてくだされよ」

「ど、どーまゝん、さん、ん、ん、ん。」

「おやおや。もつと泣いてしまわれしましたなア！フッフ、存分に泣いてください。ここで涙を枯れ果てさせてしまわれよ。ええ、ええ。マルルク殿が泣き止むまでこうしておりましたようや」

「なんだー？お前さん見た目に似合わず優しいじゃん！」

「ンン、ン、ツ。お、おやめなされ！拙僧の肌の露出している部分を叩くのはおやめなされ！ああっ！イイ音を出そうとするのもおやめなされ！！」

大断層の淵にて旅立とうとするあの子たちの探掘隊と、それを見送る『地臥せり』たちを遙か遠くから眺めていた。

普段は鬱陶しいぐらいに立ち込めている濃霧も、この日ばかりは綺麗に晴れていて、遠目からでもあの三人組がハッキリと見える。

「ああ、不安だ……あの子たち。私はここから動くことができないからあの子らの旅について行けないが」

「あのドーマンとかいうヤツ………アンブラハンス『祈手』の一員か、それか本人かと思ったがどうやら別人みたいだし。あんなに声が似てるっていうのにねえ」

(……もし、もしもボンドルドアレなら。私ならば互角に戦えるはずだ。なのに私じゃあ歯が立たなかつた)

(ドーマン……アイツはいつたい?)

「はあ。まあ今更どうしようもない。せめて幸運があるよう祈つとくかね」

「——チツ、これじゃあまるで私が『祈手』みたいじゃないか。全く、度し難い、度し難いねえ……」

忘れもしませぬ。あれは拙僧がロッククライミングを嗜んでいたところ・・・14

「リコ殿ー！レグ殿ー！此方に出口がありましたぞ！」

「わかったー！今行くー!!」

さてさて、ただいま拙僧らは『大断層』の只中にて、迷路のように入り組んだ穴の中を行ったり来たりしております。

リコ殿やレグ殿は体が小さいですからまだよいものの、拙僧は身長200cm程度、体重110kgという恵体でありますから、この穴は少々窮屈に感じますなあ。

「あつみんな見て！マドカジャクだ！」



「リコ！顔出すと危ない……」

「……しかしどうする？もうドーマンの術で岸壁を降りてくか、『呪い』を覚悟で上に戻るしかないぞ？」

「もしもし御二方？あそこの穴なぞ如何でしょう。都合の良い事に我らのいる穴の真下にありますので！」

「——ホントだ！」

レグ殿の腕を崖際に固定し、お二人は緩やかに下って行かれます。かく言う拙僧はレグ殿にぶら下がるわけにも行きませぬので、これまで通り式神で以って空中を浮遊しながら（次いでに獣避けの呪詛も撒き散らしながら）降りておるのです。

「しかし……やはりドーマンはすごいな。空を飛べるなんて。オンミョージュツとは便利なものなんだな」

「ンンン！お褒めに預かり恐悦至極に存じまする！」

「ん…？ああっ！レグ！ドーマン！やったよー！この巢すっごい深くまで続いてる！」

「おお、やりましたなりコ殿………ところでレグ殿はどちらへ？」

「——あつ、今行く！」

さてさて、この会話はなにやら聞き覚えがありますなア。と、いうことは？そろそろ『ベニクチナワ』なる大蛇もどきが襲ってくる頃合いでしょうか？

ここまでほとんど何事もなく進んで来れましたからねエ……ンンン？そういえば、アニメ版と漫画版でこの場面の展開が違ったような気がしましたが。

たしかアニメ版だとこの愛らしい生物——ネリタンタンなどと言うそうですが——の群れから逃げている最中に、何々という原生生物の腹の中に落ちてしまうのだとか。ンン？いや……どちらがアニメ版でしたかな？

まあどちらにせよ、拙僧の目の黒き間はそのような事させませぬとも！

「ドーマン？そんなに持つて大丈夫なのか……？ここで少し減るとはいえ少しは捨てていつてもいいんだぞ？」

「いえいえお気にせずとも！些か多く見えるかもしれないませぬが、これらの八割は食料でありますゆえ、見た目以上に軽うございまするぞ」

「でも飲み水も持つてるだろう？」

「まあ。そこは拙僧鍛えておりますれば」

現在、食料等の荷物は拙僧がすべて運んでおります。幼子らに持たせるものでもないでしょうからねエ？荷物の中身は都合五日分の食料、水。寝袋に鍋、その他諸々ですな。他ではどうかなど拙僧には知りえませぬが、こと奈落において原生生物とやり合う等という行為は百害あれども一利無し！無用な戦闘は兎に角避けるべきでありますれば

!

等と思索に耽っておりますと、何やら木の腐った様な香りが拙僧の鼻孔を擽ります。

「おー！これ昔の船だよー！スゴいなー、遺物とか残ってたりしないかなー？」

「ツー！リコ殿、お待ちくださいませ！そちらに行かれてはなりません！」

「えっ？……ウウっ、ナニコレえ。うんち？」

考え事に耽っていたために気づくのが遅れてしまいました。

まさかも違う場所——作品で言う所の”場面が変わる”というもの——に出  
ていたとは！

ンンン……不味いですねエコレ。まさかココは漫画版ではなくアニメ版だったとは。  
拙僧の記憶が正しければ、今リコ殿が踏まれたのは『マドカジャク』なる飛竜のフン。

そして、フンがあるということは……

「うわっ?!や、ヤバい！マドカジャクだ?!」

「リ、リコー！」

——当然、それを出した者も近くにいる訳です。

サア？隊長殿の尻拭いは、隊員たる拙僧の役目でありましょう。

拙僧の出番ですなア。

忘れもしませぬ。あれは拙僧がロツククライミングを嗜  
んでいたころ・・・15

「皆様方、早く穴までお逃げください！ここは拙僧が食い止めまする！」

「何言ってる!?キミも一緒に逃げるぞ！」

「ッああ、これを！」

袖から式神をいくつか取り出し、内二枚をレグ殿に持たせます。

これは皆様が普段FGOで見ているようなものとは形が少し違いますが、一応れつきとした式神。

所謂『ヒトガタ』———そうですねエ。何かしらの祝い事の際に飾られる、人の姿を象った白い紙……などと言えば良いでしょうかね？

この型の式神はどちらかといえば、かの阿倍晴明が使うモノに近いので、拙僧あまり作るのには得意ではないですが……

まあ？別に？拙僧作れないワケではありませぬので？

「これはいつたい？」

「拙僧が監視基地にてお二人を部屋に戻したものです！それを持っておればどれだけ離れていてもすぐに追いつけますので！さあ早く！」

「…分かった！気を付けてくれよ！」

……もう行かれましたね。

幾ら物語の主人公とも言えどもやはり子供。緊急事態だからとはいえ詰めが甘うございませぬ。

拙僧ならばこの程度の数すぐに塵殺できますのに。監視基地にて、かの“白笛”たるオーゼン殿を圧倒した事をもう忘れられたのでしょうか？

まあちようど良いタイミングで一人になることが出来ましたので、折角です。式神の

補充のついでに試したいこともありますので……ねえ？

『ギチ……………ギイイツ』

ンフフフフ！おやおやア？物言わぬ獣であれども怯えはするのですなア。ああいけませぬいけませぬ。知らず知らずのうちに殺気を振りまいておったようで、今にも逃げ出しそうな様相ではありませんか！

いやはや何とも、野生の勘とはスバラシイものでありますな！何の役に立たぬのは考え物ですが。

さアて、コレからはいくつ作れるのでしょねエ？

いつもと変わらない日常、いつもと変わらない景色。あれほどまでに見たいと願って



いた奈落の風景も、ずっと住み続けていけばだんだん新鮮さが薄れていくもんだ。

このデケエ湯の貯まった植物も初めて見る分には面白いけど。オイラはそのはじめてが散々なモンだったから、結局今まで驚けずにいた。こんなもん慣れちまつたら歩きづらいだけなんだよなあ…

歩くたびに足回りの毛が濡れそぼって、思わずタオルみたいに絞りたくなるんだよ。まあできねえけどさ！

…もしも。もしももう一度。記憶を消してからこの景色、アイツと一緒に見れたらなあ…

「……んなあ。ま、いいや。サツサと飯集めてもどろーっと」

「…なんだ、これ」

タケグマを何匹かめて、メたついでに香り付け用のトコシエコウも摘んだ。そう、いつもこなしている日課だ。

だが、アジトへの帰り道にあつたあまりにおかしいブツがあつたもんだから、少しばかり寄り道をしてみた。

それは、白い紙だった。

あのクソ野郎ポンドルドが持つてたような紙や、オイラの持つてる本の紙なんかよりもつと白く、滑らかな紙。光沢をもつてるようで、表面はざらざらしてる？よくわかんねーが、そういう遺物があるって言われたら信じちまいそんな代物だ。

驚くべき点は二つあつた。一つは、それが宙に浮いてるってことだ。

独特な形に切られているそれは、風で舞い上がつてる様子はない。空中で微動だにせず、静止している。百歩譲つて風のせいだったとしても紙つて垂直に浮くモンなのか？

そして二つ目は、

「力場が、風いでる？」

この奈落のもの周りには力場がある。奈落にモノがある限り、このルールからは逃れられない。それが浮いてるモノならなおさらだ。なのに、

「まったく、ない。つていうか……スッゲエ落ち着く……」

さつきから妙に気分が穏やかだ。何かいいことがあった後のような、トイレに行つた後のような……なんだかんだで奈落コにきてからずっと気分が張り詰めてたから、こんな気持ちになるのは久しぶりだ。

んなあ……なんかだんだん、ひきよせられる……触りたい、さわりたい……？

「……さわってみつかない」

まー、だいじょうぶだろー。むずかしいことは、さわったあとでかんがえりやーいかなー？

「んなんななあ?!なんだコレ!ぞわぞわするううう……」

オイラの手が紙に触れた瞬間、体が急にぞわぞわ……つてした。ドアの取っ手とかを触つたときにびりつてするヤツみたいのが全身にいい……？

んなあ？頭ン中に、声が聞こえる？

「ンンン……聞こえておりますかな、ナナチ殿？拙僧は蘆屋道満と申す者。今、貴方様の頭の中に直接語り掛けております」

忘れもしませぬ。あれは拙僧がロツククライミングを嗜んでいたころ・・・16

「な、なんだあ?!オマエだけだあ!!」

（ああ、声を荒げずに!どうか落ち着いてください!拙僧、あまり長く話すことができませんので、手短に済ませたいのです）

「なんでオイラの頭のなかから声が聞こえるんだよ?!」

（ンンン、そういう遺物なのです!それよりも、少しばかり貴方様の記憶をのぞかせていただきます。ナナチ殿?）

「んなつ?!何しやがるこの変態!」

（ンンンン?!あ、ああ、もう時間がありません!（これならばもつと魔力を込めておけば

よかった！）よいですか!? 拙僧は貴方のお友達を治すことができる可能性があります  
！あと、貴方様の目から何か恐ろしい気配を感じますれば！何者かが貴方様の視界から  
モノを見ておられるような気がいたしますぞ！それが何者かまではわかりませぬが、  
どうかお気を付けください!!)

「はあツ?!お、オイ!どーいうこと——」

(拙僧らは三日以内に四層に到着いたしますぞ！子供が二人に、体の大きいのが一人で  
すぞ！見かけたならどうか我らの前に姿を現してくださいませ！詳しくはその後に!!)  
(おおよそ探掘家とは思えぬ3人組を見かけたなら！どうか声——)

やかましい声が聞こえたのは、そこまでだった。

声が聞こえなくなると同時にオイラの持っていた紙がボロボロになった。なんかも  
う、いろいろありすぎてワケわかんねー…

んううう……？あれ？これ、灰になってる。燃えてないのに。

「ンツ!?ンンン、もう使えなくなっちゃいましたか……」

ああ。ナナチ殿が何処におられるかわからぬからと、ざつと300ほど四層全域にばら撒いたのが間違いでした。数を絞り質をもっと高めて、それらしき者を追跡する型にしておくべきでしたか……

まあ伝えるべき内容はすべて話すことができましたし、ナナチ殿へ魔力も付けることができました。ああ、上手く背中につけられたでしょうか？あとは拙僧の運次第ですなあ……ンンン。たしか拙僧、『幸運：B』でしたかな？

おっと早くいかねば。リコ殿とレグ殿に、拙僧が死んだなどと思われておるかもしれませぬしねエ？

「急々如律令!!ンンンンン!ただいま戻りました!」

「あ、ドーマン!!無事だったんだ!」

「おお、無事だったのか!よかったあー!!何かあったらどうしようかと……」

ンンン、絆を上げておいたおかげか泣いて喜ばれましたねエ。

この様子だと絆Lv5にはもうなっていそですが……まあ、一応礼装はそのまま着けておきましょうか。



微量ですが力も体力も増えますしね。

「ところで拙僧。恥ずかしながら、安心したらお腹が空いてしまいました。少し早いですができれば昼餉にしとうございまする」

「うん！そーだね！もうごはん作つといたからパパッと食べちやおー！」

「ンンン、やはりリコ殿は強かですねエ…」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・17

「なんだか辺りがトゲトゲしてきたな……これ、リコが言うには卵らしいが。美味しく食べられるのだろうか？」

「ンンン？コレ食べられますので？何か度し難い生物が入ってそうですが……いやあ。拙僧は遠慮しておきまするぞ」

「あー、それ火を通したら食べられるよー」

「……………みたいだが、ドーマンはどうする。僕が一個取ってみようか？」

「どどどどどうなつても知りませぬぞ♡」

悔しいですが、中々に美味でありました……………

何というか、卵の中身はイクラの卵黄の様な味のもので満たされており、火を通してそのまま味噌汁にしていたできました。仄かに塩味が聞いている海鮮風味の味噌汁となつて、大変美味しゅうございました。

ンンン、何故か少しばかり負けたような気がいたしますが…美味でしたのでよしとしましょう。

おお、などと言っておりますと。いつの間にか到着していたようですね！

深界四層『巨人の盃』に！

「ついたー！あはははは！すごい、声がのわあーんって響くー！」

「ああ……湿気がすさまじいから声が響くんだ。この湯を受けてる植物のせいなんだろうが……」

「ンフフフフ、はしやがれるのも良いですが気をつけなされ！あちらに溜まっているものはどうやら酸のようですので、入ったら立ち所に溶けてしまいますぞ！」

「わかつてるー!!あははははははは!!」

「ンフフフ！面白き光景に目を奪われ無邪気にはしやぐ様は、なんとも微笑ましいモノですネエ。」

「……ですが。どうやらお客様が来られたようですよ？」

「んなあく。オマエさあ、ちよつとはしやぎすぎなんじゃねえか？」

「——うわわわわあ?!あ、あれ?今の、誰の声だった?」

「ンフフフフ！おやおや?この声は……ようやく来ていただけただけなようすな？」

「ンンンンン！ご安心召されよ。声の主から敵意は感じられませぬゆえ！」

「さあ、どなたかは存じ上げませぬが、どうか姿を表してはくれませぬかな!!」

「…んなあー、そんなデケエ声出さなくても聞こえてるよ………よつと」

ドチャンっつ!

そう音を立ててこの水の中に飛び込んできたのは

「オイラはナナチだ。ふわふわの、ぬいぐるみだよ…」

帽子を深くかぶって薄布で顔を覆い顔を見せないようにした、人の子供位の大きさのぬいぐるみでした。獣人、とでもいいでしょうかねエ?

漫画『メイドインアビス』のマスコットのキャラクター、ナナチ殿。ふわっふわの毛に覆われた体に、ウサギのような長い耳！

ンンンン！実に愛らしいですねエ!!拙僧がもしも幼ければ、視界に入った瞬間に抱きつきに行つたことでしょうか………残念なことに今の拙僧は身長2 m程の大男。それが獣人とはいえ、子供に抱きついている姿を想像してみなされ！

あゝ、これでは拙僧が変態のようではありませんか！ンンン、度し難い！拙僧今だけはリコ殿とレグ殿が羨ましゅうございますぞ！

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・18

「んなあゝ…そうだなあー。探窟家なんて久しぶりに見たからなあー、どうだ？オイラのアジトに来ねえか？歓迎するぜ？」

ナナチ殿がそうおっしゃると、リコ殿は目を輝かせて抱きつきます。

「ええ?!キミ、ここに住んでるの!?!行く行く!見てみたーい!」

「んうつ、んなあー!だ、き、つ、く、な!離れろー!まったく、調子狂うぜ…」

「ソソソソ、申し訳ありません、ナナチ殿。リコ殿も悪気があるわけではありませんせぬゆえ……」

「んぬぬぬぬぬ…はあ。ほら、ついてきなよ。早くしないとタマちゃんとかが来ちまうぜ?。」

「『タマチャン』? ドーマン、タマチャンとは何だろうか」

「ンン? おそらくタマウガチの事ではないでしょうか…ああ、しかしナナチ殿はすごいですなあ。レグ殿?」

「? どういう事だ」

「タマウガチとは、原生生物の中でも特に危険な部類のモノであります。全身に毒の針を持つ巨大な白き獣、しかもその巨体に似合わぬ俊敏性まで持ち合わせているのだとか。今までに殺された探窟家は数知れず…そのような恐ろしき獣に愛称を付けておられるのですから、ねエ?」

「つ、つまり。ムキムキなのか…?」



「——ンンンンンンン  
?????」

「ほら、着いたぜ。ココがオイラのアジトだよ」

「すつごい。深界四層なのにこんな立派な家があるなんて!!どーやって建てたの?」

「ん、んなあゝ……向こうの方に生えてた草とか木を編んだんだよ。どうだ、カツコイイ  
だろ?」

「ンンンン!!草を編んで、コレを?!」

「そうだよー?…んなあー。オマエ、ど、どうしたんだよ?」

「そんな………拙僧が、負けた?」

いや。拙僧ならばもつとスゴイのを建てられる筈…じ、『陣地作成・B』殿が敗北するなぞ有り得ぬのですから！

ンンン、これで勝ったなどと思わぬ事ですな。ナナチ殿！

「そーいえば、お前らどうして四層に来たんだ？」

「んーとねえ、わたしの——」

さて、リコ殿とナナチ殿が話の花を咲かせておられる間、拙僧らはハブられておるわけ。

暇を持て余した拙僧は奥の方、ナナチ殿の寝室へ行きます。

「ん。ドーマン、どうしたんだ？」

「ンン、少しばかり探索をと思ひまして。ナナチ殿、構いませぬかな？」

「んなあー……ああ、いいぜ」

「ンンンンン！では遠慮なく！」

寢室を仕切っているカーテンをくぐると、

ええ、まあ、おりますよねエ。成れ果てとなられたミーティ殿が。

「ドーマン？何かあった……こ、これはっ」

「ンンンンン？目で見る限りでは人には見えませぬが、これは確かに人でありますな  
……ナナチ殿？どうか、説明していただけますでしょうか」

「……………んなあー、いいぜ。どうせ話そうと思ってたしなあ」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・19

ナナチ殿の口から語られたのは、拙僧にしてみれば一度聞き、そしてナナチ殿の記憶の中で視たもの。ですがそれは無垢なる幼子二人には些か衝撃的だったようであります。

「そんな、そんなことが…」

「ね、ねえドーマン！ミーティのこと、オンミョージュツでどうにかできないの!？」

「ンンン……出来ないと言えば、ウソになりまする」

「できるのか?!で、でもどうやって?成れ果てた人間をもとに戻すなんて、あのポンドルドでもできっこないぜ?」

「…説明するには、少しばかり時間がかかりますが。よろしいですか？」

「おう、頼むツ!!」

ナナチ殿がミーティ殿を抱える腕に力を込めるのを見ながら、拙僧は己の術について話し始めます。

「拙僧の扱おうとしておりますものは、一般に外法などと呼ばれるものにございます。人体の錬成、その一端——まあ変質ですので、厳密には違いますが」

「もしもミーティ殿の魂までもが変質していれば、またややこしいことになっていたのですがねエ？ミーティ殿の魂は肉体という檻に囚われたまま、成れ果てた後にむしろ純化されておりますれば、その必要も無いでしょう」

「極端な話、魂は癒やさずとも良いとして。問題は体ですが……やはり変質させるしかないでしょうなア」

「んんう？ どういう、ことだ？」

「つまりはですねエ、さらに成れ果てさせるのです。もちろん、簡単に言えばですが」

絶句する皆様を置いて、拙僧は続けます。

「ああ、別に酷いことをする訳ではありません。ミーティ殿の肉体を変質させて、さらに良く成れ果てておられるナナチ殿の肉体により近い形に組み替えるのですよ」

「肉体さえ持つて来られたなら、記憶も肉体に引つ張つてこられますので。まあそれ故に、肉体を変質させるのが難しいワケですが」

「問題は不死の肉体をどのようにして変質させるか、でありますぞ。ンンンン、実に悩ましい。どうしたものか……」

「……………ほんとうに、本当に、治せるんだな？ ミーティを」

「ンンン！ええ、ええ。治せますとも！心配せずとも拙僧がどうかいたしましたしょう！」

拙僧がそう言うと、ナナチ殿は感極まってついには泣き出してしまいました。

ンンンン！いやあ、しかし！今日ほどこの拙僧のよく回る口に感謝したい日はありませぬ！ナナチ殿からミーティ殿を癒やす、実質的な許可をいただいたのですから！

ああ、ああ！これでまた目的に一步近づいたワケです！もうすぐ叶うのです、拙僧の悲願が!!もう、すぐそこでありませぬ!!

拙僧の、受肉が!!



忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・20

霊体のままであれども、この身に不便はありはせぬ。

だが、叶うならば肉体が欲しい。生きた肉体が、己の血が。身体の有無は陰陽術を使う上で非常に重要な要素の一つ。その己の体となるのに最適なものが目の前に転がっておるのだ。

元が女であるのが少々気に食わぬが、性別なぞ儂の前では飴細工よ、如何様にもしてくれようぞ。

今こそ我が肉体を取り戻すとき。受肉を、果たすのだ！

「ンンン。まあ取り敢えず何をするにしても準備が必要でありますれば。リコ殿、レグ殿、ナナチ殿」

「んなあー！何でも言ってくれ！何だ!?!なにが必要なんだ!?!」

「まあまあ、落ち着いてください。実のところ術の行使に必要なものは既に揃っております」

「……ドーマン、それは一体?」

「清酒に岩塩に肉、それとナナチ殿の血と髪の毛であります。ああ、できれば新鮮なものが好ましいかと」

「——一体、どれぐらい必要なんだ?」

「血液は平皿を満たすほど、髪の毛は一房ですが……これらは新鮮さが重要でありますので、儀式を執り行う直前に頂くのがよろしいかと」

「そ、そのう……オイラの肉とか血はまだどうにかなるがよお、酒とか岩塩つてどこで集めりゃいいんだ……？」

「……ンンン！ご安心召されよ、先程も言いましたが、全て揃っております。このような事もあるうかと酒と塩は大量に持ち歩いておりますゆえ！これを分けて差し上げましょう。ええ、ですが」

「条件がありまする」

拙僧がそう言うと、リコ殿とレグ殿が驚いた顔をして言いました。

「ど、ドーマン?!何言つて——」

「少し、静かにして下され。リコ殿」

「えっ……」

「ナナチ殿、拙僧の条件とは至極単純なものであります。どうか、ヒトに戻られたミーティ殿と共にリコ殿の探窟隊に加わり、我らの旅に同行してはいただけませぬか？」

「……………少し、考えさせてくれねえか？」

「少し、考えさせてくれねえか？」

目の前の大男から語られた条件は、オイラにとつてとても魅力的だった。オイラにデメリットがほとんどないようなこの条件は、もしかするとオイラのことを気遣ってつけられたものなんじゃねえかって、思わず考えちまうほどだった。

オイラだって元々は奈落にあこがれてここまで来て成れ果てこんなになつたんだ。

本当の冒険。実験動物としてじゃなく、一緒に苦難を乗り越えて仲間と一緒に笑いあえるような、そんな冒険をコイツらと一緒に……

たぶんここに来る前の自分だったら、二つ返事で了承しただろう。

……けど、けどよう？もしミーティがちゃんと人に戻れて、一緒に冒険できるようになったとしてな？

オイラは、冒険の途中でミーティが傷つくのを見たくねえんだよ……

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・21

結局、ナナチ殿はその場でお決めになりました。

ナナチ殿が夕餉を創るのをなんとか阻止しつつ、リコ殿と共に普通の夕餉を作りそのあまりの美味しさにナナチ殿を泣かせた後。リコ殿とレグ殿は我らよりも一足先に眠られました。

「……………んなあ…それで。話って何だ？さつき飯を食ってる時に頭ん中で言ってたけどよ」

「ンンンン、いえ。どうやら先のことについて悩まれているご様子でしたので。差し出がましいようですが相談にでものつてみようかと思いましたがなア」

「ヒトに戻そうとしておる拙僧がするものでも無いかもしれませぬが、まあ。しないよ

りかは気も紛れるでしょう？ さき、お話しください」

拙僧がそう言うと、ナナチ殿はぼつりぼつりと話し始めます。

「……んなあー、そうだよなあ…なあ、ドーマンよお。しつこいように悪いんだけどさ、ミーティは本当に人に戻れるんだよな？」

「そうですねあ…人とまではいきませぬが、ヒトまでは戻せましょうや。拙僧の力では、そこが限界です」

「さつきも言つてたけどよ、それってどう違うんだ？」

「簡単なことです。ナナチ殿と同じような成れ果てた姿でしか復活させることができな  
いということですよ。分かり辛かったですかな？ 要するに、ナナチ殿のようにフワフワ  
になられるということですよ」

「まあ今回の場合は恐らく、そちらの方が何かと都合がよいでしょうからねエ？」

「んなあ？…どういうことだ？」

「ええ。拙僧らが『奈落の果て』までたどり着いた後上層へと戻るときに、少しでも生き残れる確率が上がった方が良いでしょう？」

「…オマエ、何言ってるんだ？奈落の底まで行くならもう戻ってこれねえ。七層の負荷、知らねえわけじゃねえんだろ？『完全な死』だ、もう戻れねえんだよ！地上には！お、オイラは、おいらは……ミーティを死なせたくねえんだよ……」

「ンンン……なるほど、なるほど。それは……ええ、貴方様の艱苦ももつともです。であればそうですねエ…今ここで明かすつもりもなかったのですが一足先にお教えしましょう」

「拙僧は奈落の上昇負荷を無効化する術を持っております」

「……そいつはオイラも知ってるぜ、『カートリッジ』だろ？」



「ンンンンン！ああ、いえいえ！あのようなおぞましき欠陥品と拙僧の術を同じものであると、どうかおっしやらないでいただきたい！ええ、ええ。断言いたしましょう。拙僧が生きておる限りあなた方は上昇負荷を受けることは無い、と」

「理論も術も出来上がっております。あと重要なものが一つだけ足りませぬが、それも近々手に入る予定ですしねエ」

「んなあ……にわかには信じられねえな。ボンドルドはクズ野郎だが腕だけは一級品だ。そのボンドルドですら子供を使いつぶさなきや克服できなかつた上昇負荷を、ホントにどうにかできるもんかねえ？」

「ンフフフフ！まあ、術の内容はいずれ使う時にでも！ああ、ナナチ殿。これでも心配ですか？」

『疾くこの者を惑はせ給へ。急々如律令』

「……そうだなあ、そうだよなあ……それだつたらきつと、だいじょうぶかなあ？」

「ンンン。どうやら、解決されたようですねエ」

「……………んんう、正直なところ今もよくわかってねえ。どうすりやいいのかとか、そんなことはよ。でもよ？ミーティが今の姿のまま苦しみ続けてるのはきつと間違いないんだ、それだけはわかる。その状況がどんな形であれ変わるってんなら、元に戻せるってんなら……………オイラ、やるよ。やってみせる。難しいこととかそーいうのは、とりあえずミーティを治してからだ！」

「フフフフフ！それはよかった。ああ、そういえば。本人の体を素材にしているとはいえ、人の形に戻った後とは肉体的にも精神的にも非常に不安定なもの。どうかミーティ殿の支えとなつてくだされ、ナナチ殿？」

「んなあ、わかつてるよ……………そういやさドーマン」

「ンンン、まだ何かおありですか？」

「オイラの記憶を見たオメエなら分かるかもしれないねえけどよ。今のミーティはさ、不死身なんだよ。何をやっても死なねえんだ。でもよう……ミーティが人に戻った後もミーティは不死のままなのか？」

「…………ンンン、きつとその不死性は失われることでしょう。ですがその名残は、傷の治りが早くなる程度になりますが残ったままかと。失った腕が生えてくるなどということは無いでしょうな」

「ああ、そうです。完全に不死性を取り除けなかった代わりといつては何ですが、ミーティ殿を治すとき彼女の左目も元通りにいたしましたよ」

「んなつ?! あ、アレが治るのか?! 『枢機<sup>ス</sup>へ還<sup>ラ</sup>す光<sup>モス</sup>』で焼かれちゃったのに!」

「ええ、ええ、治せますとも。ですからどうかご安心召されよ。貴方様の不安は全て拙僧が解決いたしましたよ、悩みも試練も全てですぞ。ああ、ナナチ殿。よくぞここまで御一人で耐えられましたなア？」

「ささ、後のことは拙僧にお任せなされ、お任せなされ……………」

もはや夜も遅く、帳もすっかり下りてしまいました。幼子はそろそろ眠る時間でしょう。

よく眠れる呪いまじなでも、一つかけてしましましょう。

「んなあく…：なんか、安心したら眠くなっちゃった…：すまねえな、ドーマン。オイラ、先に寝るよ」

「ええ、そうされるのがよろしいかと。明日にはミーティ殿を人に戻さねばなりませんからねエ？」

「んうなあああー…：おやすみい……………」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・22

さて、夜も明けたことです。いよいよ拙僧の受肉を（そのついでにミーティ殿を人に戻したりしますが）執り行うと致しましょう！

「ところでさドーマン、どうやってミーティを人に戻すつもりなの？」

「ンンン、まあ見ていてくだされりコ殿？ああそうでした、ナナチ殿はどうか目をつぶっててください。そうれ!!」

拙僧はそう言うと、目の前におられたミーティ殿を皆様の目の前で

体内に取り込みました。

「ええっ?!ド、ドーマンの体が波打ってる!なんか水みたいってどうか、パンの生地みたいな…………?」

「ンンン、リコ殿。そのように驚かれなくとも結構ですぞ?これも拙僧の陰陽術の一つなれば!他人の体を他人の体のままどうこうするのは手間ですから一度拙僧に取り込んで、拙僧の内側にて作業をするのです」

「慣れると、すごくる便利なのですよ?」

「ドーマン、君の体は一体どうなっているというんだ……」

「…………ンンン、拙僧のカラダについて知りたいのですかな♡レグ殿♡拙僧の秘密を隅々まで、赤裸々に知りたいというので♡」

「なあっ?!け、けけっ、結構だ!!」

「ンンンンン!! まあまあ、そうおっしやらずとも! これが終わったら共に、人体の構造について語り合いきましょうぞ♡」

「……んなあー。そろそろ目え開けてもいいか?」

「ああいえいえ、もうしばらく閉じていてください! それでは隊長殿。拙僧、少しばかり眠らせていただきます。ええ、軽く3日ほどです。3日ほど経ちましたら勝手に目覚めまするゆえ、どうか拙僧と、拙僧の周りにある如何なるモノにも触れてくださるな! では、これにてエ!!」

するとたちまち拙僧の周囲を無数の式神が覆い、拙僧を中心として丸い球体のようなものを作り上げました。

これは謂わば卵のようなもの。拙僧を包む殻であります。ここから出るのはミーティ殿がヒトの形となった後かつ、拙僧が受肉した後。そう!

拙僧が不死の肉体を手に入れた後なれば!!

「……ドーマンはすごいな、こんなことができるなんて。僕には到底できそうもないぞ」

「ん、んにいー。リコー、レグー。どっちでもいいから引つ張って、オイラを家の中まで連れてつてくれー。オイラ今ちよつと目が開けらんねえんだよー」

「ああ、別にいいが。どうしたんだ？目にゴミでも入ったか？」

「……んなあ、そんなカンジだ」

「ほらほらこつちだよー、私水汲んでくるから！ちよつと待っててねー」



忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・23

ドーマンがあの球の中に入ってから一日が経った。

「ドーマン遅いねー。一体あの中で何やってるのかなー？」

「うーむ。ボクは医学にはあまり詳しくないから、よくわからないな」

「…まあ、ドーマンだしきつと大丈夫でしょ！」

「……ああ、そうだな」

うーん、こいつらは今までドーマンといっしょに深界四層ここまで降りてきたみたいだけど。

「こいつらの中でドーマンっていうのはどんな存在なんだ？」

「んなあく…：そーういやよう。オマエらから見たドーマンってどんな奴なんだ？」

「え？うーん…：どんな人、つて一言でパシッて決められないっつか。うーん  
……………」

「…やはり、『度し難いヤツ』ではないか？」

「んな？どーいうことだ、レグ？」

「…：恐らくだが、ドーマンの心の中を完璧に理解できる人間なんて、この世界には存在しない、と思う」

「ドーマンは確かに優しい人間だよ。僕たちの冒険を助けてくれるし、今までもドーマンがいなければ危機に陥っていたような時は何度もあった…：…：思い返せばその度に、

ドーマンが助けてくれたな。僕の『火葬砲』の時も……」

「あつ！『イシネレター火葬砲』!!あの時はスゴかったねー！」

「んなあー、その機械の腕のことか？ただ伸びるだけじゃねーんだな」

「うんつ!!そりゃあモチロン！レグはすごいんだよー、私がナキカバネに襲われた時も、ドーマンより早く助けてくれたしーそのときにねー、すっごい太い光線を出したんだよー！地形が変わっちゃうぐらいの！」

「……へえーそーなのか。やるじゃねえか、レグ」

「む。むう、照れるな……」

ああ、そうだったのか。

こいつらの話し方や表情を見れば分かる。例えドーマンがいなくてもこいつらは奈落に挑み、なんやかんやありながらもオイラの前に現れるんだろう。

もしも、ドーマンがいなかったら…

オイラはレグにミーティを殺してもらってたんだろうなあ。

(ああ、しかし。これは何とも扱づらい…)

『殻』の中に閉じこもって既に一日が経っているというのに、拙僧は未だ英霊のままでありました。

(不死の肉体とは、これほどまでに複雑なものですか！唯人と比べて明らかに人間離れ

している。ンンン、どうしましうかねエ？)

拙僧のこの肉体のもといた世界ではどうかは分かりませんが。この世界における不  
死とは、祝福にございまする。

祝福とはそれを受けた本人にしか扱うことのできぬモノだと、そのように聞いており  
ました。

ですので拙僧は、その本人に成り代わる事でその祝福を奪い取ろうとしたのですが  
……どうやらそう上手くはいかないようなのです。

『魂の紋』……ンンンンン。非常に興味深い……

どうにかしてこれを欺かなければならぬ。何か、冴えたやり方は無いものか。

喉元までは出かかっておるのです、必要なのは只一つの閃きのみ……

………嗚呼、ああ！なるほど！斯様なものでありましたか、魂というものは！

ふふふふふ、あの暗殺者が魂を飴細工であると揶揄した理由が分かりました！ああ、  
なんともはや。これは……ンンン、

実に、実に度し難い。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・24

「あつ！来てナナチ！ドーマン玉の様子が変わってるよ！」

「んなっ!? 本当か! ……ツん、んなあゝ。すまねえリコゝ、目え閉じるから連れてつてくれー……」

ドーマンがあの手で閉じこもってから、今日でキツカリ三日が経った。

「わわっ、すつごい震えてる……え、なんで震えてるの?」

「いや、オイラに言われもよくわかんねーけどさ……多分、生まれようとしてるんじゃないのか?」

「…………ふむ、たしかに。言い得て妙だな」

この空中に浮いている玉がどうして震えるのか気になりながらもそんなふうには私達が話していると、遂にこの玉に亀裂が生じ始めた。

紙でできた玉なのに、なんで割れるんだろう？

「うわあ!!なにこれ!」

「は、離れるぞ皆! ナナチ、すまない! 掴むぞ!」

「ん、んなんなななああ?!」

玉のヒビ割れはどんどん大きくなり、そこからドロドロしたナニカが溢れ始めた。



しつかりとした粘性を持ちながらも光を通さないその液体っぽいものは、色が透明であればきつと卵の白身によく似ているのだと思う。

未だ粘液を吐き出し続ける玉の中から、黒い人が落ちてきた。

その腕の中には例の黒い粘液で覆われた子供サイズの物体があった。

「ンンン！ただいま戻りました！リコ殿、レグ殿。そして、ナナチ殿？」

「…うん。おかえり、ドーマン」

「ンンンンン？どうされましたかな？」

「そ、その。ドーマン？ちよつと水浴びしてこない？すつごいドロドロだよ……それに、なんかクサイ…」

「……………ンンン、これは失礼。少しばかり体を清めてきまする」

「ああ、ですがその前に。こちらを」

そう言うと、ドーマンは抱えていた子供を私に手渡した。

「うええ、ヌメヌメするう…この子がミーティなの？なんかチクチクしてるけど」

「ええ、ミーティ殿はナナチ殿と同じ姿に成られたのですよ。チクチクするのは濡れているからでしょうな」

「そっか…よかった…ナナチの友だちが、人に戻れて」

「ンンンン、本当ですなあ！」

視界の端でレグがナナチをもふもふしてるのを眺めながら、私も川の方へと向かった。

もちろん、ミーティをキレイにするためにね！

予め用意しておいたお湯にミーティを浸ける。べつとりと黒い液体で濡れた体はナナチによく似てふわふわで、その毛の一本一本に粘液が絡みついていたから、レグに三回も替えの湯を汲んできてもらおうハメになった。

「凄い粘液……監視基地のマルルクちゃんの部屋にあつたやつよりもベトベトしてる……」

「……ンンン?!リ、リコ殿?いつの間にそんな事を……」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・25

さてさて。紆余曲折ありながらも拙僧、無事受肉することができたワケですが。

目下の予定はミーティ殿のリハビリですなあ：

ナナチ殿の為にも、完璧に動く事ができるようにしなければなりませんねエ？

ミーティ殿はまだお生まれになったばかり、これは骨が折れますぞ…。

ミーティが戻ってきた時なんて声をかけてやればいいのか、オイラには分からなかった。二度と手に入らないと思っていたモノがこんなにもアッサリと戻ってきた衝撃で、オイラの頭ん中がまっしろになちまったからだ。

「う……ああ………みーてい…」

「お”が”え”り” ……お”がえ”り”、み”ーでい” …!! やつと………やつと開放され  
たんだなあ……!」

目の前の『大切なもの』に、オイラは抱きついて泣きわめく。

「うう……、あ” ……い”。ま”。ナ”ア”ヂ？」

「…ツ、そうだよお！おいら、ナナチだよ！」

「ああ………だ…、たあ。い、ま” ……!」

「う”っ。うううう”っ、ミ”ーテ”イ”いいいい!!」

「……ンンン、ミーティ殿の様子はどうですか？ナナチ殿」

「あ”あ”、どーま”ん”う”う”う!!あ”り”がどお”な”あ”、あ”り”がどお”な”あ!!”あ”」

「ンンンンン！そのようにお泣きなさるな。嬉しいのはよくわかります。ですがそのように泣かれておりますとミーティ殿も悲しまれますぞ？」

「ううう…ズズツ！うん、ぞうだなあ」

「フフフフ。そのように喜ばれると、拙僧としても鼻が高いですなア！」

「見たところ精神もちゃんと『戻つてこれ』いるようですし、あとは体の動かし方を練習するだけでよろしいかと」

「…まあ、今日ぐらいいはミーティ殿とゆつくりお過ごしになられてもバチは当たらぬで

しよう。では拙僧これにて失礼いたしまするぞー」

そう言うと、ドーマンは部屋から出てった。

残されたオイラは、ミーティをずっと抱きしめていた。

ンンンンン、これでナナチ殿もミーティ殿も救われたワケです。

ンンン。勝利の美酒、という訳にはいきませぬが、風呂に入ることぐらいは許される  
でしょう。

どうせ時間を潰すものもありません。深界四層の秘湯、拙僧が見極めて差し上げる  
……！

「ふんふふーん、おつふろ、おつふろ！」

「いつにも増してうかれてるな、リコ……」

「そりやあもちろん！お風呂は乙女の洗濯場なのよ！もう何回でも入れるよー！それに  
ココ、めちやくちや広いしー？オースのどんなお風呂よりも広いよきつと！」

「それは確かにそうだが……ツリコ、待て！お湯になにか浮いてるー！」

「ええ?!あちゃー。原生生物が入りに来ちゃったのかなあ……」

「……あ”つ。い、いや、あれは……」

「えっ?うーん、なんか浮いてる……白黒の……ロウオウシダかな?」



「いやあ……あれは、多分……」

ザッパアアアアアンツ

「ンンンンン!! 実に良き湯ですねエ! 特にこの湯の深い所! 体の淀みが落ちてゆく気さ  
えいたしますぞ!!」

「……ンンンンン!!<sup>???</sup>な、ナゼ、ココに?」

「う、うわあー……」

「あわわわわわ、お、大きい……! 僕の腕ぐらいある……!」

「ン、ンンンンン………そのようにジロジロと見られますと、拙僧興奮してしまいます



忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・26

ンンン。不慮の事故とはいえ、拙僧の【御禁制】を見られてしまうとは…

拙僧は恥ずかしゆうて、穴があつたら入ってしまいとうございますぞ…

「さあさあ、皆様！ミーティ殿のリハビリを始めますぞ!!」

「分かった…」

「りよ、了解した！（さ、逆らったら殺される…ツ、ドーマン棒に!）」

「ンンンンン？どうかされましたかな、レグ殿？」

「何でもない！本当だぞ?!」

ンンン、何故ここまで他人行儀なのでしょうねー…

…………ンンフフフフ、ええ、ええ。昨日のアレは拙僧の不手際ですものねエ？

はあ、冷静に考えてみると何やってるのでしょいか。馬鹿馬鹿しい。

「ンンン…………昨日のことはなるべく早く忘れていただけると拙僧としては嬉しいのですが。もしも忘れられぬというのなら、拙僧が呪いまじなでもって記憶を消して差し上げましょうか?」

「い、いや。大丈夫だ…僕は気にしてないぞ…」

「うーん……………なんというか、つ、強そうだったね?」

「ンンンンン!! 純粹無垢であるが故の!! ンンンンン!!」

ぬうううう!! おのれおのれオノレエ!! いっその事この首を掻き切って死んでしまえ  
たならばどんなに楽か!

…………ンンン、取り乱しました。せつかく不死になったのです、そんなに簡単に死んで  
なるものですか!

「んなあー、ミーティ……………なんか動けるようになるの早くねえか?」

「あ、ううん。あい…があと」

「ンンン。僭越ながら、ミーティ殿の体を治すとき身体能力も上げさせていただきます

た。ご安心召されよ、これも追加サービスというヤツですぞ♡」

「…オマエさあ、ホントーに何でもできるんだなあ…」

「ンンンンン！お褒め頂き恐悦至極！！ああ、もし貴方様が望むのであればナナチ殿にも同じものをかけて差し上げましょうか？」

「へー、そのマジナイってオイラにもかけられるのか……………じゃありコやレグにももうかけてんのか？」

「？ええ、もちろんですとも。まあどうやら、お二人ともお気づきになられてないようですが。別に害のあるものでもありませんぞ？リコ殿の方には身体能力の向上、奈落の呪いの無効化。レグ殿の方には俊敏さの上昇の効果のある呪いまじなをかけさせていただきます！」

「そうですねエ、もしナナチ殿にかけるとしたら……………身体能力向上は勿論として、視力あつぷ。あとは聴力向上でしょうか？」

「ふーん…まあ、また必要になったらオイラにもかけてくれよ」

「ええ。承知いたしました」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が老いたる獣の秘湯を発見していたころ・・・27

ミーティが復活して三日が経った。もうミーティはナナチヤリコの支えがなくても歩けるし、何なら元気に外を走り回っている。

唯一元通りになっていないのはのど、声だけだろうか。発声練習はしているのだが、やはりそう簡単にはいかないらしい。

ここばかりはドーマンの術でもどうにもならないらしいから、（実際にはできるらしいが、あまり使いすぎるのも体によくはないということ）自力で治すしかない。

「いくぜーミーティ。今度はマ行だぞー。ここが言えたら自分の名前も言えるからなー！」



「ううん！むあ、ま。むい、むー。みい……」

「レグ、すごいねー。もふもふだねー……」

「ああ、素晴らしい光景だな……」

「ンンンン……アッツッ!!」

「あ、ドーマン?!もー！一体どうやったら針で革が破れるのよー!?!」

「ソソソ、申し訳ありません……もう一度、もう一度だけチャンスを頂けぬでしょうか？  
今度こそ完璧なる背囊を作って見せまするので！」

「そういつてこれでもう三つダメにしてるじゃん！わたしが作った方が絶対早いよー  
？」

「ンンンンン!!どうかもう一度！もう一度だけお慈悲を!!!」

「うあー!!ドーマンー!もうっ!ダメだっ!ほんと!」

「はあ…ちよつと貸してくれ、ドーマン」

「ンン?どうかされましたか、レグ殿」

「いいからいいから…はあッ!」

ドーマンからバッグになる予定だった革を受け取ると、それを十秒ぐらいでパパッと縫い上げた。

これをあといくつか作ってしまえば、新型のバッグが出来上がるわけだ。

「なっ?!そ、そのようなことが…」

「ふふふふ、どーだドーマン。僕も本気を出せばだな…」

「おおー。レグ早いねー！上手上手ー」

「ん、ンンンンンンンンン!!!（堪えきれない怒り）」

うおっ?!ドーマンがスゴイ顔でこつちを見てる……なんか目から黒い涙を出してるんだが…

「す、すまない…というか、それ。一体どうやって出してるんだ…?」

「ンンンンン!拙僧にも時間が、時間さえあれば…ッ!」

「その分だと上達に一年はかかりそうだねー」

「ナナチ！どう？アタシ、うまく喋れてるかなあ？」

「うん…うん！ちゃんと喋れてるぜ！ミーティ、ほんとよく頑張ったなあ！」

この隠れ家に拙僧らが訪れてから2週間がたつ頃、ミーティ殿もほとんど言い淀むことなくしゃべることができるようになりました。

新型のバッグもリコ殿とレグ殿の尽力で完成しましたし、保存食なども十分な量を用意いたしました。もはやこの場に留まる理由もないでしょう。

そろそろ、出発する頃合いですなあ！

・忘れもさせぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカート  
リτζを作っていたころ・・・28

「よし、それじゃあみんな！行くよ！」

ンンン、最早原作通りとは言えないような所まで来てしまいましたか…

何はともあれ拙僧はアニメ版第一期までの内容を取り切ることができたのです！

これより先は劇場版。かの黎明卿との戦闘がありますれば、十分な対策を施しておか  
ねばなりませんぞ…

「そういえばね、ナナチ」

「んなあ？どうしたんだ」

「お礼を、言っておかなきゃって。私があんなに成つてた時にナナチが私を助けようとしてくれてさ。いやあアレ大変だったでしょ？」

「んなあ!?!お、覚えてたのか…」

「あーっ、『なんでオイラの言葉に反応を返してくれなかったんだ』。って顔してる！ふふふ！アタシも出来るんだったら返してたんだけどねー」

「んん?」

「んーつとね、なんて言えばいいかな…ほら。アタシって『アタシ自身』と『ナナチ』の、二人分の負荷を受けてたじゃん？あの負荷のせいで体が檻みたいなものになってたんだよ。よーするに、アタシの意志じゃ動かせない状態だったんだ。だから檻の中で見るだけしか出来なかつたんだよねえ…」

「へえー…そうだったのか…」

「…あれ？もしかしてこれってメチャクチャスゴい情報なのでは？一度成れ果てた人がまた人に戻るなんて事、今まで無かったわけだし…」

「り、リコ。今は控えてやってくれ…」

道中その様な話に花を咲かせながら進んでいたわけですが。少しばかり脇道に逸れて進んでいたところ、リコ殿の母君が好きだったという花『トコシエソウ』の群生地に入り着きました。

「わあ…！すつごい、一面『不屈の花』だらけだー！」

「ンンン！たしかに、これは絶景ですなあ！」

「あつ、おーい。丘の上には上るなよ！ 負荷がかかるぞー」

ンン、ですが。拙僧の記憶が正しければ…

「あれ？ ……何か聞こえる！ 他の探窟家か？」

「んんう…？ んなつ?! あ、アレは！」

「ンンン、お待ち下されレグ殿。今は貴方が出るべき時ではないでしょう。遠目に見るのみに留めておくべきかと」

「ちよつと待っていてくれ、今確認するから… ……んんん、丘のふもとに誰がいる…体が大きいな。アレは一体何をしてるんだ？」



「恐らくは、駆除かと」

『『『『駆除?』』』』』

「ンンンン！綺麗にハモりましたなア！ンンフフフ、どれどれ……ああ、ソコをご覧になって下され」

そう言うと、皆様方は拙僧の指差した方向にあるトコシエコウを見つめます。

「あれ？ドーマン。これ、葉っぱの部分が虫になってる……」

「以前リコ殿の封書を拝見した時、その内の一つにコレが記されておりました。曰く――」

『クオンガタリ（!!）（なるものだとか）』

「そーだよ、思い出した！お母さんの封書…えつと………あつた、これだ！」

「『クオンガタリ』六層の花畑に気をつける。葉を見てコレが紛れていたならば、既に奴らの巢になっている。この虫は不屈の花に擬態し、近くに來た生物を襲い幼体を植え付ける。幼体は頭の中に入り込み、宿主を都合の良い生餌に仕立て上げる……』うええ、エゲツない事するなあ……」

「恐らくあの者は、花園ごところの害虫を駆除する心積もりなのでしょう……まあ、しようがないですがねエ？」

「……、燃やしちゃうの？」

「ええ、恐らくですが……納得いかぬという顔をしておられますな、リコ殿？ンンンン、そうですねエ……拙僧の推測でよければ、理由なぞ話してみましようか。ささ、何はともあれもう立ち去ってしまいましよう」

「……うん」

・忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・29

『不屈の花園』を離れた後、拙僧らは深界五層『なきがらの海』に向けて歩いておりました。

「ンンン、ところでリコ殿。トコシエコウとは主にどこに生えておりますかな？」

「えっ？うーん…どこどこに生えてる！ってわけじゃないかなあ。基本どこにでも生えてるし…」

「そこですよ、リコ殿。トコシエコウとはこの奈落のいたるところに生えている植物。それに化ける深層の虫どもが地上に出てきたなら、瞬く間に地上は山積みの生餌死体であふれかえることとなりましょうや」

「トコシエコウはオースの町に住まうものにとつて無くてはならない必需品、それに化

けられてしまつては一たまりもないでしょう。まさしく『久遠を騙る虫』……ンンン！クオンガタリにふさわしき狡猾さですなエ！」

地上に住む自分の家族や、親しい友人が虫どもの苗床となつた様を想像してしまつたのか、リコ殿とレグ殿は顔を青ざめさせてしまわれました。

「考えてみればそうだな……そもそも遥か下。六層の原生生物が層を二つもまたいだところで発見されている時点で大分危険な状態なのだろうな……」

「うええ……ヤバいい。ナットやハボさんたちが『お祈りガイコツ』みたいになつてるのを想像しちやつた……」

「だ、大丈夫か、リコ！」

「ンンンン、少々気味の悪い話でしたかな。これは失礼！ささ、もうこの話は終わりに

してしましましょう。次の野营地となる場所まで早く行かねばなりませんゆえ」

もう五日は経ったでしょうか。あたりの景色も緑溢れる森林から、雪の積もる白銀の世界へといつの間にか様変わりしております。

大断層を思い出させるような長い洞窟を抜けた先は、白く覆われた崖の上でした。この場所から、五層の景色を一望できるのです。

「…わあー！」

さあ、ようやく着きましたぞ！深界五層『なきがらの海』へ！

目の前には四層のダイヤラカズラを彷彿とさせるような形をした氷の受け皿、『支え水』

が連なっております。

「…なあ、ドーマン！ドーマン！つてずっとその格好してるけど、寒くないの？」

「ンンン……実を言うと少しばかり肌寒いですが。まあ耐えられぬほどではありませぬ！」

そう言うと、拙僧は背中の部分に張っていた式神を一つ取り出し、ミーティ殿に手渡します。

「えっ!? ナニコレ、あつたかい！」

「寒冷地仕様の式神にごございます。触れた部分を温かくしてくれるのですよ。ここに来る前に拙僧、8つほどこれを装備しておりますれば、心配ご無用ですぞ！ ささ、ミー

「ティ殿もおひとつどうぞ……」

「わああ、ありがとう！」

「あー！ミーツィズるーい！ドーマンー私にも一個ちょうだい！」

「す、すまないが僕も一個もらえるとありがたい……」

「ンンンンンン！大人気ですなあ、拙僧特製の式神カイロ。まだまだ在庫はありまするゆえ、ご安心召されよ！」



・忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカート  
リτζを作っていたころ・・・30

「オイラが来たのは深界五層最下部、ヤツらが『前線基地』イドフロントと呼んでる場所だ。人が人の  
まま戻れる最終地点、ボンドルドの箱庭：その中に白笛が『絶界行』ラストダイブに使う、六層唯一  
の侵入口がある……まあ、あのボンドルドがオイラ達をみすみす通してくれるとは思え  
ねえ……遭遇は避けられないぜ？」

拙僧らが今後の方針について話しておる時、ナナチ殿はそうおっしゃりました。

「ンンン、恐らく拙僧であれば撃破も容易でしょう。何も気にすることなどありません  
ぞっ。」

「んうう、オマエな……オメーはボンと会ったことがねえからそんなデケエ口が——

んなあつ?!」

ナナチ殿が拙僧に小言を言おうとしたとき、突如外で轟音が鳴り響きました。

「んなあ…支え水が崩壊したんだ。びつくりしたあ…おいオマエら、道ができたぜー。休憩はここまでにして、先に進むぞ」

「うおつとつと…これ、崩れたりしないのかなあ…」

「ま、崩れたとはいえ元は支え水の一部だったんだ。オイラ達が飛び跳ねたぐらいじゃあびくともしねえ…あ。一人、例外がいたようだけどな」

「ンンンンンンンンンン」

「ナゼだアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

「ド、ドーマンー!!!」

「んなあゝ…まったく、何やってんだか」

「ど、ドーマン?これホントに食えるのか?」

「うん…見た目はアレだけど、味は美味しいらしい、よ?」

支え水から落ちた後、拙僧式神を使って戻ってきたわけですが。その際タダでは転んでやらぬとその辺りを泳いでいた巨大な魚を何匹かつかまえてきたのです。

ンンン、この強烈な見た目。忘れたくとも忘れられませぬ…『ハマシラマ』という魚です。牛のような「鳴き声」（?!）を上げる、尾に複乳のような触手を何本も携えたこの魚は、見た目こそ醜悪ですが食べると大変美味なのだとか…

「ふっ…ふっ…！体積の倍はヌメリが出てるぞ、コレ…！」

「あつ、レグ。ヌメリ取りはそれぐらいでいいよー。あんまりやりすぎると固くなっちゃうらしいから…生が一番おいしいんだって！」

そう言うと、リコ殿は緑色の粘液が絡みついた生の切り身を口に運びます。ンンンン!?こ、これを食べるといいますか!?初見で?!見れば見るほど毒にしか見えぬのですか?!!

「……………んんんツツ!!甘い!レグ、これおいしいよ!アゴのところにギュツとくる味!」

「え、ええー…本当なのか？」

何故です…？奈落の珍味は須らく醜悪な見た目をしていなければならぬという法でもあるのでしょうか？

ええ。そのまま食べても美味でしたが、拙僧の携帯していた醤油とワサビ。それに少々変わり種ですが青じそ（に似た葉っぱ）を横に添えると、皆様目の色を変えて3匹ともペロリと食してしまいました。

「ふー…美味かった…度し難い見た目だったが、味は見かけで判断できないものだな…」

「あつ！もう一匹余ってるから、こっちはお鍋にしようか！」

「んなあ?! そ、そんなのもあるのか…」

「……ねえねえ、ナナチナナチ…」

「ん。どーしたんだミーテイ?」

「この魚、すつつつつごく美味しいね!」

「……ああ、そうだな!」

「みろリコ、ドーマン。あの素晴らしい光景を…」

「ふふふ、モフモフだねー…」

「ソソソソソソ…」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカート  
リτζを作っていたころ・・・31

ハマシラマの寄せ鍋を食した後、拙僧らは『前線基地』を一望できる丘の上に立つて  
おりました。

しかし絶景ですなア！この世界の技術ではどうやっても再現できないでしょうに。  
よくもここまで整備できたものです。

かの黎明卿の周辺だけ技術レベルがオカシイと思うのですよ。

「あの建物ゆっくり回ってる……どうなってるの？」

「どうやって回ってるかはオイラにもわかんねえ。ま、入口ならわかるけどよー。ほら、  
あそこに回ってない部分があるだろ？出入口は基本あそこしか無いんだよ」

「ナナチ…アタシたち大丈夫かなあ？またアイツに捕まって実験動物にされたりしないかな？」

「んなあ…オマエら、一塊になって絶対に離れるんじゃねえぞ。離れたら最後、バラバラに『祈手』に連れ去られてみんな仲良くモルモットだ」

まあ警戒してもしすぎることは無いでしょう。お二人にとっては何かと感慨深い場所でしょうからねエ。

なにせお二人が成れ果てられた場所なのですから。

…何か良からぬ事が起こってもすぐに対処できるよう、式神の調整をしておかねばなりませんまい。



基地の入り口に近づくと、緑色の探窟用装備を着けた女子が出迎えてくれました。

「アンタらがパパの客？ずいぶんとちっこいじゃない！……まあ、一人は超でつかいけど」

「ツ……なあナナチ、知り合いか？」

「いや、違う。オイラの後に来たみたいだ」

「しっかしアンタらよくここまで来れたわねー。どーやって来たんだ？」

「……支え水の、結晶を……」

「ウツソオ!? 支え水の結晶を渡ってきたの？ あんなのいつ崩れるかわ分かんないじゃないー！」

（んなあー！おいレグ、あまり相手に情報を渡すんじゃないねー！『情報は力』だぞ！）

（そ、そうだった！すまない！）

「嘘ついたってわかるんだからね！アタシ見たことあるし…ねえホントはどうやって来たのさー！」

「ねーえー！こーたーえーてーよ！！」

「なーあー、なんか喋ってよ…ウソって言ったの怒ってるのか？そうだ！アタシの帽子さわってみる？」

（なんなんだこのユルさ…ど、どうしたらいいんだ！四人とも見てないで助けてくれ！）

「は、話してえ…つらいい…あつ！」

「名前だ！アタシ、プルシユカ！アンタらは？」

「レ、レグだ」

「私はリコ！」

「わあっ……！こつちの二人は？うーん、ふかふかしててかわいいわね……ねえ、その耳ホ  
ンモノ？喋れるの?!」

「ん、んなあー……」

ンンン、拙僧だけスルーされておりますが……なぜです？やはり幼子には拙僧は恐ろし  
く感じるのでしょうか……

いえ、おかしいですね……彼女は『さおはぶ』卿にも物怖じせずコミュニケーションを  
とつていけるほどメンタルが強いお方ですから、単純に興味がなかっただけなのでしょう  
うな……

ソソソ、拙僧は悲しい……

「あつ、パパ！」

レグ殿らがプルシユカ殿と戯れていると、奥から複数の足跡が聞こえてくるのが分かりました。

目をやれば、そこには表面に青く光る不思議な文様が描かれたヘルメットを被った者たちがおりました。

中でも、その集団のリーダー格であろう人物のヘルメットは紫色の光を放っておりま

ああ、ああ！ついに見えることとなりましたか！

かの白笛が一人、黎明卿『新しきボンドルド』！そしてその隷下の探窟隊『アンブラハンズ祈り手』！

まるで死体に群がる小蠅のようですなア？ いったいどれほどの数がいるのでしょうかねエ…彼奴らはここで完全に滅ぼしておかねばならぬゆえ、あまり多すぎでは困るのですが。

「やあ皆さん。よく来てくれました。ナナチ、元気そうで何よりです。その帽子、よく似合っていますよ」

「それに…おやおや、あなたはミーティですか？ 先日あなたの『肉電球』が消えていたので、てつきりナナチがついに成し遂げたのかと思っただけですが…」

「おめでとう、ナナチ。ミーティ。これでまた仲良く二人で過ごせますね」

「こ、コイツ……」

「レグ、抑えろ！」

「ああ、見たところ貴方がリーダーでしょうか？……おやおや！ 貴方は笛を持っておられないのですか？」

「いえいえお気になさらず。実は、原生生物に襲われた際に奪われてしまいました……ですがご安心召されよ、すぐに新しい笛を見繕いまするゆえ」

「おやおやおやおや、ですが皆さんは『絶界行』をされるのでしょうか？……ここに来る方は皆、そのために来るのですから。それともその前に一度地上へ戻られるのですか？」

「ふふふ！ まさか、ご冗談を！ せつかくここまで来たのです。再び地上に上がることなぞ我らの誰も、考えておりませぬとも！」

「おや、それは勇敢ですなえ……とここでお名前をお伺いしてもよろしいですか？」

「…人の名を聞く前に、先ず自分が名乗られては如何ですか？」

「ああ、そういうばまだ名乗っていませんでしたね」

「私はボンドルド、奈落の探窟家です。黎明卿と人は呼びます」

「シンン、そうですねエ…では拙僧も名乗らせていただきますよ」

「拙僧はキャスター・リンボと申す法師陰陽師にて。今は探窟家の真似事なぞやっております」

「どうか、以後お見知りおきを。黎明卿殿？」

「皆さん、今日はお疲れでしょう。立ち話もなんですから休まれてはいかがですか？部屋を用意しておきました。私が案内しますよ」

「プルシユカ、ついてきてくれますか？どうかあなたに部屋の説明をお願いしたいので

す」

「うん！まつかせてー！じゃあ行くよ！」

そう言つて走つていくプルシユカ殿の後を、拙僧らはボンドルド殿と一緒に追いかけていきました。

後ろではただ立ち尽くすのみの『祈手』が拙僧らを見つめるばかりでした。

当初の計画よりも大幅なズレができてしまいました。

ナナチたちと共にこの基地へ来た彼らこそが。プルシユカを『完成』させてくれるのだと考えておりましたが……



一人見慣れない人物がおられました。

途中からナナチが視界をふさぐような目隠しをしていたせいで、視界の覗き見が困難だったうえ、今ではもう覗き見という行為自体が不可能になっています。その時に彼らの隊のメンバーとなったのでしようが…

恐らくミーティを復活させたのも彼の仕業なのでしょう。ああ。実に、実に興味深い。

私の知らない法師、陰陽師という職業、私の知らない技術…そして何より、私の知らない知識……

ああ。ぜひ、欲しい。

「こちらが部屋になります。」

「掃除したのはアタシなんだよー！」

ほおう？中々良い部屋ですねエ…地上では安宿となるのでしようが、深界五層では五ツ星ホテルのように思えてくるのはとても面白い事ですなあ。

まあ、唯一気に食わぬことがあるとするならば。

拙僧とそれ以外の隊員とで部屋が分けられている事ぐらいでしょうか？

…いえ、普通に考えれば当たり前前なのですがね？…まあ良いでしょう。どうせ拙僧にとつては大きな障害とはなりえませぬゆえ。

「じゃあドーマン！また明日ね！」

「ええ、よい夢を。リコ殿」

「ううん……トイレえ……」

ここに来るまでに予想以上に疲れていたのか、ベッドに横になった瞬間意識が落ちてしまった。

夜中に起きることもなくぐっすり眠れるかと思ってたけど、さすがに尿意には抗えずスベスベなシーツの呪縛から逃れようと身をよじらせる。この年になってまでお漏らしなんてしてたら、ドーマンやリーダーになんて言われるか……

「『枢機へ還す光』」

「『枢機へ還す光』」  
「『枢機へ還す光』」

「ふふふふふふ、邪魔ですぞ？死ねエイ！」

「おわわわわわわわわ!!!おろしてくれドーマンううううう!!!」

「んなんななあッ!!」

「わばばばばばば?!」

………何の音？部屋の外で「ピシユウウン」って音が何回も聞こえる。それと一緒にドーマン達の声が……

「ツええ?!ドーマン?!ちよつとー!!」

私は探掘用の装備をつけることも忘れて、急いでドアを開けると――

「増援」

「新たな増援」

「増援」

「増援」

『『『枢機へ還す光』』』

「……………えっ?」

三人の『祈手』たちの仮面から放たれた青色の光線が、私の方へ向かってきて――

「急々如律令!!」

私たちは部屋に置いてあつた荷物と一緒に〈前線基地〉の外にいた。  
ドーマンだけが、ここにいない。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリツジを作っていたころ・・・32

「オイ！みんないるか!？」

「あ、ああ。見たところオイラたちは全員無事だが、ドーマンは…」

「そんな……なんで？なんでドーマンは私たちだけ逃がしたんだろう…」

この奈落に挑む、共に命を掛けあつた仲間だと思つていたのに。

…ドーマンは仲間だと思つてくれてないのかな？

ドーマン仲に助けられたという嬉しさと、何も言わずに逃がしたドーマン仲へのモヤモヤとで頭の中がグチャグチャになって、私は地べたにへたり込んで俯いてしまう。

「…たぶん、オイラたちを巻き込まないようにするための」

「…え？」

「あつちを見てみる…つて、あー。そうだったな。力場はオイラとミーティにしか見えないよなあ…」

「あのね？『前線基地』の方の力場がね、お椀みたいになってるの。よく目を凝らさないと中が見えないぐらい厚い力場で覆われてる…それも基地全体が、ぐるーつて！」

「恐らくだが中にいるヤツらを逃がさねえためだ。十中八九ドーマンの仕業だろう。あれだけ力場が厚けりゃオイラ達じゃ近寄ることすらできねえ、んなあ……あ、基地の近くの水面を見てみる！力場に沿って水が凹んでるぜ！」

「——本当だ、スゴい。私たちでもこんなにハッキリ、上昇負荷以外で力場の存在が感



じられるなんて…あれ、レグ?どうしたの?」

「決まってるだろう。ドーマンを助けに行くんだ!」

「ツおい、オイラの話聞いてたか?!バカ言ってるじゃねえ!助けに行く行かないの問題じゃねえ!そもそもあそこに近づけねえんだ!助けられねえんだよ!!」

「そう言ってる君も、ミーティを助けるのを半ば諦めていたじゃないか!ミーティを助けてくれたのはいったい誰だ!!」

「うつ、うつ……でもよう…」

「…あれ?レグ、マントになんか付いてる——ああっ!これ、ドーマンの『シキガミ』だ!」

「『本当か?!』」

「うーん、ちょっとレグ、じっとしててね…うぬぬぬう、えいっ！」

レグのマントに隙間なくぴったりとくつついていたから剥がすのに手間取ったけど、勢いよく引つ張つたらちゃんと取れた。

『シキガミ』を取った途端。急に宙に浮いて、紫色の光を放ち始めた。上を向いた目の模様が描かれた白いソレは、どこか不気味さを感じさせる物だったけれど。ドーマンのモノだから多分大丈夫だよね！

浮いてからしばらくした後。紫色の光が一際強く光って、ドーマンの声が頭の中に響いてきた。

『申し訳ありません皆様。これは書置きのようなものでありますれば、拙僧のこの声に何を語り掛けてもいかなる反応も返しません。どうかご了承くださいませ』

「ツ！ドーマン!!」

「レグ！静かにして！」

『この声の流れているということは、何かしらの非常事態が発生したということでありましょう。ですがご安心召されよ！声が止んだ後、各々バッグの中を確認してください。その中に拙僧の作りし獣避けと、姿隠しの呪具が入っておりますぞ。ああ。説明書も同封しておきましたので、どうかご確認ください。それでは拙僧これにてえッ！』

その言葉を最後に、目の前で浮いていた『シキガミ』は火を上げて燃えてしまった。

「……………はっ、バッグの中！みんな！確認して！」

「分かってる！えーつと…」

レグとナナチと一緒にバッグの中身をひっくり返して探している。

…ミーティは？

あ、前線基地の方を向いて微動だにしてない…

「ねえミーティ。どうかしたの？」

「う、うん。リコ。あれ見て…？」

「え？」

ミーティに言われるままに私は双眼鏡を使って前線基地を見る。

「…い、前線基地が、どんどん壊れてってる！」

「ンンン、これだけ居ると些か鬱陶しいですねエー！そうれー！」

隊のメンバーを前線基地の外へと転移させた後。拙僧は基地を巡り、目に着いたものを片端から破壊しながらとある場所を目指しております。

その場所にこそ拙僧の最重要目標を達成するために必要なモノがあるのです！

「ええええい！そこを退けエい！！急々如律令！！」

「『<sup>ギャング</sup>明星へ』——うぶウッッ」

いったい何方にあるというのですか！手術室は！

「礼装換装、『ヘブンズ・ファイル』!!」

ああ。長らく装備していた概念礼装『カルデア・テイクタイム』を遂に変更する時が来ましたなア！

今しがた拙僧が換装したこの礼装『ヘブンズ・ファイル』の効果は、己の<sup>必殺技</sup>宝具の威力を50%上昇させるというもの。

その効果から拙僧が死ぬ前、F G O 界限では劣化版『黒の聖杯』などと呼ばれていましたが……ことこの場においてはこちらの方が良い！『黒の聖杯』は後ほど使うのです！

「ツ、この通路、たしか原作にもあつたはず……こちらか！」

さあどンドン近づいてきましたぞ！あの奈落文字が彫られた扉が！

石造りの巨大扉を勢いよく破壊し、中へと入ります。

「フウ、ようやつと着きましたか！」

「……ええ。お早い到着、何よりです」

ンンンン、拙僧が一番乗りかと思つたのですが……既に先客がおりましたか！

「ンンンンン、これはこれは！どうやら待たせてしまっていたようで。申し訳ありません、黎明卿殿？」

「いえいえ、結構ですよ。こちらもいろいろと準備する必要がありましたからね」

「——おやおや！ここに来るまでに何人か『祈手』たちを倒してこられたようで。如何でしたか？」

「ええ！全員、骨の無い腰抜共でありましたとも！食べ応えの無い者ばかりでしたぞ。いやはやなんとも、『祈手』というのはあんな穀潰しでも務まるというのですか？ンンン、実にウラヤマシイことですねア！！」

「——おやおやおやおやおやおやおや、私の隊員達はお気に召しませんでしたか？それでは、私ならばいかがでしょうか。きっと退屈はさせませんよ——」

『ギャングウェイ  
『明星へ登る』』



「急々如律令！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・33

「『ギャングウエイ  
明星へ登る』」

「急々如律令！」

ボンドルド殿が仮面の上で光っている線を指で沿って撫でると、紫の光が一か所に収束し、そして放たれました。

あらゆる方向へと反射しながら自分に向かってくる紫の光線を、防御用の式神によって掻き消します。

「おやおや、弾きもせず<sup>駆機へ避す光</sup>に霧散しましたか」

「?!ヌウウ!小癩な!」

アニメであればセリフが終わるまでキャラクターは動かないものですが、これはれつきとした現実。当然普通に攻撃してきますとも!

拙僧は追いかけてくる卿の攻撃を、式神をバラ撒きながら避けてゆきます。

「うツ、しかしながら!なんと素早いことですか!ツ来たれエい!」

「お褒め頂月に触れるき呪ありがいとう針ございます。ですが、あなたのその高速移動も大変興味明星へ登る深い」

「なアツ?!ぐううツ、急々如律令!!」

なんとオ?!ギャングウエイ明星へ登るとは連射が利くものでしたか!…いえ、よく見ると光が細い…?  
?!、!威力を落として連射速度を上げてえエエエ!?

「枢機へ還す光ほらほら、月に触れるどうされましたか？残念ですが、逃げて残念ですが、逃げて明星へ登るいるだけでは私は倒せませんよ。さ  
あ、明星へ登るどうかあなたの輝きを私に見せて呪い針ください」

「ぐつ、ぐうお、おおッ?!。それほど。までに、見たいと、いうならばア!どうぞご照覧  
あれ!礼装換装!!」

『天の晚餐!!』

さて皆様、突然ですが。

『ヘブンス・フィール』や『黒の聖杯』といった礼装を使用したことはありませんか？

ああ。あるのであればよいのですが…さて、これらの二つの礼装はどちらも『装備したサーヴァントの宝具威力を向上させる』ものです。

疑問に思いませぬか？ 一体どのような仕組みで宝具の威力が上昇するのか。どのような絡繰りなのか…拙僧は気になったのです。ええ、です。で。岸壁街にて暇を持て余していた時に幾つか実験をしてみました。

その結果、どうやらこれらの礼装は『魔力の質を高めることによつて宝具威力を底上げしている』らしいのです。

さて、今拙僧は既に『ヘブンス・フィール』によつて魔力の純度が高められた状態にあります。それを急に換装すると、一体全体どうなるのでしょうか？

鉄の如き純度の我が魔力、それが突然スポンジのように隙間だらけになったならば、

その隙間に元々あった魔力は、一体どこへ行  
ったのでしょうか？

答えは――

「ツ?!月に触れるこれは…!? 枢機の、月に触れる光…ツ!!」

『いけません皆さん。すぐに退避を――』

拙僧が礼装換装を行った直後、拙僧の体は発光を始めました。

皆々様! 大変お待たせいたしましたシタア!! そう、椅爆角発一です陣  
♡

「魔術王をも凌ぐ我が魔力…ッ！どうかどうか、ご賞味あれエッツッ！！」

『偽・犄角一陣』!!!

——底なしの大穴の、その遥か底にて。新たに星が一つ生まれました。

星というにはあまりに小さい、直ぐに燃え尽きる運命の超新星なれど、それでも。たしかにここにあったのですよ。

ひと際鋭く輝く、一等星が——

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・34

監視基地が壊れていく様を呆然とみんな眺めていたら、いきなり基地の一角で紫色の閃光が煌めいた。

「うわぁー！前線基地が吹っ飛んだぁーッ!!」

「ド、ドーマンー!!?」

「——いや。きつとドーマンなら大丈夫!」

「何故だ、リコ!」

「だってあの光、紫色だったから!」



拙僧の『偽・掎角一陣』の後、前線基地には巨大な大孔が空きました。

…ンンン！ここまではギリギリ原作通りです！セーフです！セーフですぞ！！

サア、六層の『箱庭』へと落ちていったボンドルド殿を迎えに行くのでしょうか？

そうして拙僧が飛び降りようとした正にその時、瓦礫と化した後ろの壁から四本腕の  
祈手が飛び出してきました。

「ゴ同伴願います、どうぞこちらへ」

「ンンフフフ！お先にどうぞ？」

「彼」の突進の勢いをそのままに、拙僧は少しばかり横に寄って足を払い、奈落へ落  
とします。

「こちらへ。      こちらへ。      こちらへ。      こちらへ……」

「……ンソソ、これはまた随分と仕事熱心ですなあ……」

だんだんと点になっていく彼の巨体を眺めながら、拙僧は下に降りるための式神を用  
意します。

……ああ、そうそう。危うく忘れるところでした！

「礼装換装、『黒の聖杯』！」

「つと、到着いたしましたか……おお、中身が出ている……？どうやったらここからはみ出るのでしょうか？」

四本腕の死体をまじまじと見つめていると、ペタペタという音が近づいてきます。

「……嗚呼、遂に来ましたか。成れ果て共よ」

「……シャツコ……、イータン……、スミコ……、プウウエル……。皆、一人一人に名前があるんですよ。『キャスター』……リンボ殿？」

成れ果てた子どもをその腕に乗せて、黎明卿がやってきます。

「フフフフフフ！そう為るように調節したとはいえ、あの攻撃を喰らって無傷とは！ええ！先程の言は撤回いたしましょう！どうやらアナタは期待外れでないようだ！」

「…ああ、なるほど。そのような…リンボ殿。あなたは今、その目で私を捉えているよ。うで。その実まったく見ておられないのですね？」

「貴方のその目…我々探掘家の持つ『奈落への探求心』が無いように思えます。リンボ殿。貴方はいったい、何を成そうとこのような場所まで来たのでしょうか？——ああ、ああ。未知が、増えていきます」

「俄然貴方に興味が湧いてきました…それに、」

「貴方のその力、その光は。いささか危険すぎます」

黎明卿  
“彼”が飛び上がり、その尻尾で以って拙僧に襲い掛かります。

さあ、第二ラウンド。というヤツですぞ？

「さあッ、ここでもなら貴方の技も私の傑作もッ。存分に試せます。もつと見せてください。もつと委ねてください——私の『未知』を、埋めてください」

「ンンンンンツツ!! 残念ですがッ! こちらにも目的というものがあるのですよ! さあ、我が下に集え! 醜悪なりし成れ果てどもよ! 詠唱棄却! 急々如律令!!」

掛け声と共に予め散りばめておいた式神——部屋に撒いていたモノが、基地の崩壊と共に落ちてきたのです——が、紫電を放ち一斉に共鳴を始めます。

周囲に存在している色とりどりの成れ果てどもは宙へと浮き上がります。

「我が、体は、流動、なれば…ツ！来たれエい！」

「ツ！なんですかコレは…!？」

浮遊する成れ果ては勢いよく我が下へと飛来して――

我が躰の中へと取り込まれます。

「ぐうツ、すごい風ですね…吸収、取り込む…？。！ここにいる成れ果てたちを取り込んでいるのですか！ツ、シヤツコ!!」

「ンンンン!!然りイツツツ!!ぐううううううつつ…！さあつ！もうすぐ終わりますぞ…ツ!!」

最後の一匹は、名残惜しくも彼の腕にしがみついていた個体でした。

ああ……ようやく成ることができました。我が第二目標は、今ここに完遂されたのです！

「ああ……全くもって、すばらしい！」

「之が、之こそが”全能感”なのですか！」

——概念礼装『カレイドスコープ』に頼らないNPを100%チャージする手段の獲得、完了。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・35

最後まで私といってくれたシャツコも、もはや彼の内側に取り込まれてしまいました。

思わず伸ばしてしまった手が空しく宙を切った時、私の心は今までも何度か襲われたことのある「虚脱感」というものに襲われました。

「……………ほう、吸収しきったというのですか。素晴らしい。一般的な成人男性の体よりも大きいとはいえ、その体のどこにあれだけの量の物質を取り込んだというのでしょうか…」

「ふふふ、そのような無駄口を叩く暇が果たしてお有りですかな？」

「……………ツ!!」  
月に触れる



「さあ、もうこのような場所に用なぞありません。サツサと上に戻りましょう？ ココは些か、窮屈が過ぎまするゆえ」

そう言うのと彼の周りに、先程私の攻撃を避け続けていた際にばら撒いていたものが集まってきて、じきに彼の体が浮かび上がります。

なんと…ッ!!熱気球や推進力もなしに宙を浮くことができるというのですか!?!あれはなんとという遺物なのでしょうか？

「ッおやおや、もしや上昇負荷をお忘れですか？」

「ンンンン!!シアて、どうでしょうねエ?!鬼神招来！」

彼が手を三度叩くと影が形をとり始め、たちまち体格の良い重装騎士らしきものへと姿を変えました。その手にはグレイブが握られています。

一対多の戦闘はこちらの不利となりますので、少しじつとしていただきましょうか。

『枢機へ還す』——くツ。貴方もとてもお早いのですねツ!! 『月へ触れる』…閉じろ』  
「…捕らえました」

枢機へ還す光で一度回避行動をとらせた後に月へ触れるを使用することによって、驚くほどあつけなく彼——チエルノボーグ殿を捕縛することができました。

…なにか様子がおかしいですね…私の枢機へ還す光を避けた際の俊敏さを、月へ触れるでは発揮していないように思えます。何故でしょうか…

私が少しばかり考えていると、チエルノボーグ殿はその体を一度影へと戻し、そして今度は月へ触れるの外側で再び形を成し始めます。

「…おやおやおやおや、それは少々困りましたね……どうやら貴方の言う通り、上に上がるしか無さそうです」

戦場は箱庭から崖へと移ります。残念ながら機動力ではこちらが劣ります。それに加えて戦況は先程と変わらず二対一。チエルノボグ殿は私の周りを飛行しながら近接戦闘を仕掛け、隙あらば私の背中にある『カートリッジ』を破壊しようとしています。リンボ殿は遠距離からの私の妨害に徹しておられます。

——ああ、始めましたね。

「ンンンンン、それが祝福ですか？ああ、なんと貧弱そうな見た目であろうか！拙僧の物とは大違いでありますなア！」

「ええ。貴方の力には、私も驚いています。あれだけの量の成れ果てを取り込んだなら、私ただ一人にかかる祝福なんて霞んで見えるほどの『祝福』を得られるのでしよう」

「ですが、私はこちらの方が気に入っています。何せ私の愛する子供たちが、私に授け

てくれた『祝福』なのでですから——おや、」

五つ装備していたカートリッジの、一番上の物が排出されます。

「レシーマが終わってしまいましたか。心優しい傑作の一つでした……将来の夢は、お姫様だったんですよ？可愛いですねえ」

「ンンツ!!笑止イッツ!!!今はそのような肉袋のことなぞどうでも良い!唯儂だけを見よ!……ここだッ!貴様の斃すべき敵は今、ここにおるのだぞ!!」

「おやおや、貴方のことも見ていますよ。そのように拗ねないでください」

「ンンンンンン!!!急々如律令!!!」

互いの持つ全ての技を使いながら、私たちは上へと昇っていきます。

「ツ、いよいよ砦水が崩壊したか！」

煌めく氷と、水飛沫と、紫色の閃光、彼の遺物、私の祝福。

——そして、私のこれまでの全<sup>知識</sup>て。

あらゆるものが、削られて。研ぎ澄まされて。洗練されて。純化されます。

素晴らしい、素晴らしい、素晴らしい。

溢れんばかりの未知が、私の前に広がっています。この深淵<sup>未知</sup>に、最初にあこがれを抱いた時のように。私の躰を焼き尽くさんばかりに、燦爛と輝いています。

ああ、願わくば。

この一瞬が、ずっと続きますように――

「――ああ。これが、『祝福』なのですな」

背部に格納されていたカートリッジが、全て排出されます。

「ターキリ、トーレイテア…、ノペロ…、ボルデン……。お疲れ様でした…素晴らしい、冒険でしたな」

「ンンンフフフフ！そのまま感傷に浸っていなされ。その幸福の絶頂の中で拙僧が殺して差し上げる！」

リンボ殿はそのまま上昇を続けます。砦水をものともせず、今や私のはるか上空におられます。

「さあ、機は熟しました。名残惜しいですがこれにて終幕といたしましょう！」

「機は熟しました。名残惜しいですがこれにて終幕といたしましょう！」

拙僧の装備している礼装『黒の聖杯』は、拙僧の知るあらゆる礼装の中で唯一装備者にスリップダメージを与えます。

これほどまでに体力が減ったならば、よろしい！最早この礼装は必要ない！

サツサと換装してしましましょう！

「礼装換装！『レコードホルダー』!!」

ンンン、驚かれましたかな？『なぜ「恋のお呪い」を使わぬのか』と。あちらでも良かったのですが、あれはオーバーチャージ二段階引き上げとNP50%チャージなど、成れ果て共を潰せばどうとでもなる能力しか持っておりませぬのでこちらにしたのです。

さ、早く宝具の準備を整えなければ……！

「青龍・白虎・朱雀・玄武・勾陳・帝台・文王・三台・玉女……」



彼が両手を組み合わせ何かをつぶやき始めると、彼の後ろに巨大な黒い球体が現れま  
した。

「——太陽、ですか？」

何故でしょう。なぜ私は、あの黒い球体を見て太陽を感じたのでしょうか。

正気の者なら、アレを太陽であるとは言わないでしょう。ですが、これは紛れもなく  
太陽——

あれが、太陽。あれが、夜明け？

「夜明け、夜明けですか。あれこそ、私たちの目指す……」

ああ——

『「欲しい」』

「なんだ」

「なんだ」

「黒い」

「丸い」

「あれが見たい」

「触りたい」

「触りたい」

「不思議だ」

「どうなっている?」

「構造を知りたい」

「不思議だ」

「あれを知りたい」





てご覧に入れよう！ですから、ですから…ッ！

「不俱ッ、金剛ッ、蛇蝎ッ、戴天ッ、頂経ッ、王顕ッッ！」

疾く、完成せよッッ!!!

「来たれ、暗黒の帳」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・36

「来たれ、暗黒の帳」

「太陽は此処に生まれ変わる」

「疑似神格並列接続。暗黒太陽、臨界！」

「さあ見るがいい！之こそが貴様を灼き尽くす、暗黒の太陽なるぞ！」

『狂瀾怒濤、悪霊左府』

やった！最早この術式は我が手中に無い！なれば拙僧に対する妨害も意味を成さな

いのです！

ンンふふふ、拙僧の勝利です。残念でしたア——

残っていた他の祈手達の明星へ登るは全て妨害され、彼に届きませんでした。ですが  
唯一、私のものだけが彼に届き

彼の体を2つに裂きました。

彼が苦しみ、悶えながら落ちていきます。

ですが日は昇ったまま。むしろ先程よりも大きくなっています。

もはや打つ手はありませんでした。黒い太陽は煌めき、その外周をぐるりと囲む目は、全て限界まで見開かれ私を見つめています。





「ン」ン」ッ。ふフフ、我ながら何と恐ろしい呪術であろうか……」

拙僧の誇る最強宝具（他にサーヴァントがおりませんので、逆説的に拙僧が最強なのです）。『狂瀾怒濤、悪霊左府』は、ぎっくりと言つてしまえば『対象となった生物を成れ果てさせて、そのモノ達で蠱毒（呪術の一種）を行わせる』もの。

この対象はズバリ、都全体。都市の総ては我が悪霊左府の内側なれば！あらゆる民草、権力者を都諸共殺し尽くすのです。

ああ、もつと多く話していただきたいのですが……そろそろ拙僧地面に激突してしまいそうです。受け身を取らねばなりませんゆえ、このあたりと致しましょう。



もう、考えることも億劫になってきました。他の祈手たちも私と同じ状況なのでしょう。『精神隷属器』<sup>ソアホリック</sup>で入れ替わることもできません。

層を跨いで同期することはできない。地上の祈手との定期連絡も絶えて久しい。

詰み、ですか。

ああ、私がここで終わってしまうなら……せめて彼と相討ちにならなければ良かったのに。

彼の太陽がこの深淵をどこまで照らしてゆくのか、あの暗黒の太陽は、一体どこまで沈んでいくのか。

知りタカった。

「ンン…まだ、意識を。保っておられるならば…どうか、お聞きくださいませ」

…何でしょウカ？

「この戦いが終わった後、拙僧達と、共に…」

冒険を、しませぬか？

(…ああ。私の何もかもが、ここで終わるならば)

(それもまた、よいのかもしれないね)

ワタしももう、意識が…。オソラク彼も、そろそろ限界、い……………

「黒き力、限りなく…ッ!!」

『第二スキル：黒き命、発動』

（——ああ、なんと素晴らしい）

ここが、私の意識の限界でした。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・37

「おーい！リコー、レグー、ミーティー！ちよつとこつち来てくれー！」

「…つえ、ああ。どうしたんだ？」

「んなあー！いいから早く来いよ！」

「何があつたんだらうね？」

「さあ…」

「ほら、見ろよこれ。なんかスゲエ事になつてゐるぜ？」

「——はつ。ぷ、プルシユカが地面に刺さつてゐる…早く抜くぞ！」

「ぷはあ！あー、酷い目に遭つたわ！お部屋で寝てたら急に雪の中に刺さつてゐるし、服もいつの間にか着替えてゐるし…どーいうことなのよ？」

「いや、僕たちに聞かれても…」

「まあそうよねー…アンタたちにこんなことできる訳ないだろうし」

((たぶんドーマンのせいだな))(( ))

「ふう。雪から抜けれたし、アタシもそろそろ帰る…って!?イ、前線基地が!!」

「あつ、そうだった。多分それもうちのドーマンが…」

「ドーマン…あのでつかいの!?もー!なんってことしてくれてんのよー!アタシのお家メチャクチャじゃないの!」

「本当にすまない…!どうかして埋め合わせするから!」

「…はあ、いいわよ。どうせ何言つてもしようがないんだし。それよりパパ、大丈夫かなあ…」

『フオロロロロロロロ…』

ンンンン！拙僧、完全復活ツ！！

！ いやあ、何分拙僧強すぎるがゆえ。今までろくに死んだことなどありませんからなあ

… ちようどいい機会と思ひ第二スキルの使用感を確かめるついでに死んでみましたが



厳密にはこれ死んでないですな。死ぬ直前に健常なる肉体に置換されておるだけ  
あります。

…ということは、拙僧のこのスキルはヘラクレスの『十二の試練』のようなものでし  
うか。

例えば拙僧が超極巨大レーザー砲にてこの身を焼かれ続けた場合、第二スキルの  
ガッツを一度に全て消費してしまう、とか？

…ンンン、この件はまた後で考えましょう。今はそれよりも大事なことがあるので  
す。

『ギャン?!』

「ンンンンン、なんとすばしっこい…片足をもいでもその機動力とは。本当に知恵を  
失っておるのでしょうか？」

ここより先に進むために、拙僧はなんとしてでもあの白笛を手に入れなければならぬのです！

では、サツサと死んでくださいますかな？

「来たれ、チエルノボーグ」

「ふうん、そんなことが…なんかごめんね、ウチの祈手がヘンなことしちやつて…」  
「…あれ？つてことは、これつてパパの仕業…？」

「——みんな、誰か来るぞ！」

『『『!』』』』

「あれは…黒、ツボンドルドだ!」

「はあ?!マジでドーマンでも無理だったのかよ!」

「みんな、散開しろ!来るぞ!」

「おやおやおやおや、皆さんここにおられたのですか。さあ、プルシユカ。戻りましょう? 皆さんもどうでしょうか。少し散らかってしまいましたが、まだ無事な部屋はあるはずですよ」

「…」

「…」

「…なあ、ボンドルド」

「おや、ナナチ。どうされましたか？」

「なんかお前、デカくね？」

「…ああ、そうでした。皆さんにはまだお伝えしていませんでしたね。祈手はすべて私なのです。ですが今は少々不都合がありまして、グエイラの体を使用しているのですよ」

「…」

「…」

「…パ、いや、アンタさ。グエイラはもうちよと身長高いんだぞ？アンタ誰よ！なんでパのヘルメット被ってるの?!」

「もー…もういいでしょ？ドーマン」

「——ンンンフフフフ!!これは手厳しい！よくぞ見破りましたなアリコ殿！」

「あははー…まあそりゃあ、ほら。隊長ですし？」

(胡散臭い雰囲気だったからなんて口が裂けても言えないや…)

「つて、そうしたら…今ドーマンがここにいるつてことは…」

「ええ、まあ。はい。倒してきましたとも。彼は、黎明卿殿はもはやこの世におりませぬ。ただ残っているのはこの白笛のみなれば！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・38

啞然とした様子でプルシユカ殿が仰ります。

「ちよ、ちよつと待つて…じゃあ、パパは？アンタがここにゐるつてことは、パパは何処に…」

「ンン？何を仰るので？勿論おられますとも。ほうらココに——」

「違う…：違う違う違うツ!!そんな白笛なんかじゃないの!そーいうのはもうイヤからさ、はやくパパを出してよ!ねえ、生きてるんでしょ?だって、だって…」

「パパが…負けるはずないもん…」

…ふふつ、娘としては父の勝利を願いたいものである。そう理解はしておりますとも、ええ?ですが…

少うしばかり、気に食わないですなア♡

「…ンンンン？アアなるほど！生きているパパとやらが欲しかったのですか！フフ、フフフフハハハハ!! 残念ながら彼の肉体、その器となる者ども。そのどちらも最早この世におりませぬ！ンンンンン♡ご愁傷サマア！…んん？」

拙僧がプルシユカ殿を弄っておりましたら、レグ殿が拙僧の肩を掴まれます。  
ンンン、少し熱中しすぎましたか…

「ドーマン。もう、そこまでにしてやってくれ。僕たちにとってボンドルドは敵かもしれないが、プルシユカにとってはたった一人の親なんだ…それに！」

「…よくもそんな風に、『他人の死』で笑うことができるな……はつきり言つて度し難いぞ。ドーマン」

「——おやおやあ？これは手厳しい。ですがレグ殿、こうする以外に拙僧らが六層に降りる方法は無いのですよ？」

「えっ……？そ、それってどういうこと？」

「そのままの意味であります、隊長殿。確実に六層に降りる方法を、我らはココ以外に知り得ぬのです。そうでしょう？……ええ、ええ。言わんとする事は分かりますとも。かの『神秘卿』はここを通らずに絶界行を行ったのだから、やり方さえ分かれば自分たちにもできる筈だ……そうでしょう？」

「そ、そうだよ！何も殺さなくたって……」

「ほおう？それで、そのやり方というのはどの様にして見つけるので？」

「……あ」

「ええ、絶界行を行う方法は他にも有るのでしよう。ではそれをどう見つけるのですか？それはどのようなモノのですか？……ソッフ、ほうら。何もワカラナイ、そうでしょう？」





「…アンタ何言ってるの？さっき自分でこの世にいないって言ってたじゃない！」

「ンン…それは、その…言葉の綾と言いますか…ですが事実、ボンドルド殿はこの笛の中に生きておられまするので…」

「…そうですねア…：時に皆様、白笛の素材とは何でありましょう？」

「そりゃあ人間じゃないの？今までのドーマンの話の流れからしてさ」

「ンンン…ご明察！ですのでリコ殿のその白笛の中にも、その素材となつた者の魂が宿っておられるのですよ」

「では、ボンドルド殿の白笛の素材とは何でありましょうか？ああプルシユカ殿。貴女は、何だと思われませんか？」

「そんなの…そんなの知らないわよ…」

「…ねえドーマン、今のプルシユカはそつとしてあげたほうが…」

「いえ、これはプルシユカ殿に答えてもらわねばならぬ問題なのです。ボンドルド殿の家族であつたならば、きつと分かるでしょうからねエ？」

「…もしかして、」

「今駄目だと申し上げたばかりではありませぬか?! 暫しお待ちくださいせよ!」

「…大体分かるわよ、アンタらのやり取りを見てたら。パパ自身、なんでしょ?」

「……………ンンンン!! 大当たりイ! 然り! えエ、そうですとも! このボンドルド殿の白笛は、彼の『一番初め』の肉体より創り出されたものでありますれば! ああ。皆様もご存じの通り、ボンドルド殿は特級遺物『精神隷属機』によつてその肉体を増やしておられましたので」

「…もうお分かりでしょう。彼が己の一番初めの肉体を贄として笛を作り出したまさにその時、この中には彼の魂が宿つたのです! 故にこの笛は生きておるのです。硬く、冷たく、鼓動も無く。ですが確かに生きておるのですよ!」

「——そして、拙僧はこの白笛を使用することが出来ます」

『『『………』』』

エ  
エ  
ー  
ー  
ー  
ツ  
ツ  
ツ  
!!???

「ンンンン、何故でしょうねー？ですが先ほど何気なしに擦ってみましたら、なんと音が……」

「ウソ!?だって白笛って本人じゃなきや鳴らせないって……」

「ですが、ホラ」

拙僧が白笛の“手の甲”の部分を擦り上げると、何とも言えぬ気持ちの悪い音が鳴り響きます。

『ウ“エ“エ“…』』

「ヒドイ…不協和音…」

「ど、どーまん？これやっぱおかしいって、絶対使い方違うって…笛つてもつとこう、綺麗な音が鳴るもんじゃないの？」

「……それを言ってしまったえばそもそも、笛を鳴らす際に『擦る』というのも訳が分からぬではありませぬか…」

「——ですが、どうやら機能面に問題はない様子ですよ？」

拙僧がレグ殿を指差すと、レグ殿のヘルメットが白色になっております。

というのも、これは所謂覚醒というヤツでありまして…

この白笛の真の機能というは、その遺物の「本来の役割」を引き出すということにあります。

拙僧の白笛によつて、『奈落の至宝』であるレグ殿はその能力を最大限に引き出すことができるようになるのです！

「す、すごい…確かに力が湧いてくるような…でも、」

「…ンン？」

「…さっきの音のせいで気分が悪いから…トントンだと思う…」

「」

「あつちやあ…レグは不協和音が弱点だったか…」

「どうやらそのようだ、すまない…」

「

：

……

な、あ……

なんと……そんな……ええー……

忘れもしませぬ。あれは拙僧が黎明卿と一緒にカートリッジを作っていたころ・・・39

拙僧は只今、レグ殿の強化アイテムが入ったと思ったたらそれが役立たずであったという、何とも言えぬやるせなさに打ちひしがれております。

ああー…しばらく動けませぬぞこれは…

「なんと…なんという…」

「そ、そんなに気を落とさなくてもいいんじゃない…?」

「ああ…多分。いや、絶対慣れてみせるから!これも船酔いとかと同じヤツだと思っから、だからドーマン、ドーマン?...オーイ!」

「んなあ…オマエらさー、なんでこんな面白いコトになつてんの?」



「あ、ナナチ！」

「実は…」

「ほーん、レグの強化ねー…でそれが大コケしたと！そりやケツサクだな！まあそれはそれとして飯にしようぜ？ミーティが腹減ったらしいからよ」

「ナナチ…君はよくそんなに食べれるな…」

「なははー言うなよ…それにさ、腹いっぱい飯食つときや気が滅入る事も忘れちまうもんだぜ？」

ナナチ殿はそう笑い、うなだれている拙僧の頭にポンと手を置かれます。  
くツ、やわらかいですね。そのまま撫でて下され…ンン、フカフカですなあ…

「ほら、そんなにいじけてないでこつち来いよドーマン。リコが火い起こしてくれただぜ？この前雪に埋めてたハマシラマがまだ残ってるから、アレで寄せ鍋にしようぜー？」

「……………ええ、そうしましょうか……」

「タメたな~~~~！」

拙僧が立ち上がると、ナナチ殿はそのまま拙僧の手を引いて行きます。

このような幼子に氣を使われるほどに拙僧はみつともない姿を晒していたのでしようか？そう考えると今更になって氣恥ずかしくなってしまう。ふふ、拙僧らしくもない……

ですが不思議と嫌な気持ちはしないのです。不死身になり圧倒的な力も手に入れたというのに。

(ンンン……ひとまず今後の最重要課題は、向こうで泣きながら鍋を食っておられるプルシユカ殿の懐柔、ですかねエ……)

なんともメンドクサイ…ンンン！失礼、やりがいのある仕事でありましょうか！いざとなれば洗脳してしまえばよろしいので気楽にやりましょうか。

少なくともミーティ殿を人型に戻した時よりかは難易度が低いのですから。

「うー、グズツ…ぱぱあ…ぱぱあ…」

…ンンン、拙僧泣いておる子供のあやし方なぞ知りませぬぞ？一体どうしたのか…ですが悲しみながらも、リコ殿の作るハマシラマの鍋を食すだけの元気はあるのですなあ。ンフフ！元気なのは良いことです！

——ん？この感覚は…

「うわあ!?ど、ドーマン!!そいつは…っ!!」

「…えーつと…あーっ!!監視基地シーカーキャンで私たちを追いかけてきた黒いお化け!」

「おやめなされ!こう見えて顕光殿は繊細なる心の持ち主、そのような心無き言葉を掛けられると——」

『『掛けられると…?』』

「二日は寝込まれまする」

「あ、寝込むんだ…」

「呪わないんだね！」

「……………顕光殿も元は人間ですから、そこまで常識の無いことはせぬでしょう」

「タメたな…」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・40

腹が膨れれば眠くなる。これはどのような世界であれど共通する永久不変の真理で  
ございます。

意識が無ければ記憶など拙僧の思うがまま。皆様方が寝静まっておられる間にプル  
シユカ殿の記憶を。パパッと弄りまして……これでよろしいですな。

「んんう……あれ？ドーマン、どうしたの？」

「——ああいえ、何でもありませんとも。さありコ殿、もうひと眠りいたしましょう？  
拙僧が子守歌でも歌って差し上げましょう……」

毛布に包まったりコ殿の頭を撫でてやりますと、それが擦ったかっただけでしょう。少

しばかり顔をゆがめますが、じきにその不快よりも人肌のもたらす快が上回ったように、今は拙僧のされるがまま。

このように撫でる技術だけが向上しているのは拙僧の沽券に関わるような気も致しますが…

そのような何もせぬ時間が続き、二人して揺らめくランタンの灯を眺めていると、不意にリコ殿が口を開かれます。

「……ねえ。ドーマン」

「如何なさいましたかな？」

「いろいろ、ありがとね」

「…ん、寝ぼけておられるので？」

「いや。こういう機会でもなければなかなか言えないからさ…」

「オースの街でも、眠れない夜はこうやってランタンを引つ張り出してきてさ。奈落アベリスの底の事を考えてたんだ」

「〃奈落の底はどんな景色なんだろう〃……なんて考えながら」

「…」

「それでね？レグやドーマン、ナナチやプルシユカと一緒に探検してきてさ。その時のことを思い出しちゃったの」

「〃わたし、まだあの頃のままだ〃って」

「……」

「あのオースの街で奈落を夢見る子供だった頃から何も変わってない、いつつも私が隊長だ、って威張ってるだけの——」

「それは違いますがとも。リコ殿」

「…」

「リコ殿。ここ奈落ではいかなる存在にも『価値』が存在するのです。食材をよく見つけられるだとか、原生生物と戦うことができるだとか…」

「ですがそのような『価値』あるモノたちも、磨かれなければ光らぬのです」

「それらを磨きあげて十全に力を発揮させる。光無きものすら輝かせる、価値あるものに意味すら持たせる…それは貴方様にしかできぬことなのです。我らが隊長殿？」

「……そつか。わたし、隊長やれてるんだ…」

「ええ。それはもう完璧に……さあ、もうひと眠りなさいませ。じきに出立ですから」

「うん…」

冒険と冒険の間。何の意味も無い空白の、その一幕。  
ただゆらゆらと揺れ動く火のみが我々を照らすだけ。



(……暗黒の太陽、ですか。斯様なモノでも、案外照らせるものですか)

寝息を立て始めたリコ殿を起こさぬよう、音を立てぬようにと浮きながら洞穴の外へと出ます。

轟々と吹雪く雪嵐の中を一人で進みます。

眼前にある半ば崩壊しかかっている前線基地を目指して。

「みんな！準備はいい!?忘れ物は無い、よね!?!」

「待ちなされリコ殿。廁…トイレは大丈夫ですか?あの球の中にあるうはずもございませんから、ここを出しきっておいた方が宜しいのでは?」

「うっ…よく分かったね…」

「ドーマン…お前そりやねえぜ…」

皆様からの刺すような視線を受けながらも、拙僧はなんとかあの祭壇の中での一幕を阻止したのであります。

拙僧は殿を務め一番最後に水の如き膜の内へと入りますと、皆一様に明るい雰囲気があります。

両の手を損なうことなく動かせるリコ殿、レグ殿。

黎明卿の支配から完全に脱したナナチ殿とミーティ殿、そしてプルシユカ殿。

“原作”などという物は既に形骸化しておりました。ここにあるのはただ美しき、夢と希望のみに満ち溢れた物語。

首にぶら下げていた白笛を擦り、そして術を一つ発動させます。

ガコンツ、という音が鳴り祭壇が起動しました。水面が徐々に渦巻いて割れてゆき、空いた隙間に潜り込むようにして沈み始めます。

そして球が完全に水の中に沈んだ時、天を裂くような轟音が響き渡り、水面がざわざわと揺れ動きました。

「な!?!おいドーマン! オメエまた何かやったのか!？」

「ンンン!?! そんな失敬な! 何でもかんでも拙僧のせいにするのはやめていただきたい  
!」

「そ、そうかよ…すまねえな」

まあ今の爆発は拙僧が起こしたものでありますが。

「やっぱそうなんじゃねーかよ!?!」

「おっと、口に出ておりましたか? どうかお気になさらず♡」

「次に絶界行ラストダイブに来る探掘家たちのことも考えてよね…」

「ソフフ！ですがこの遺物は無事ですので？何も問題はありませぬとも！」

なにやらまた拙僧の株が一つ下がった気も致しますが……さして気に留めることではないでしょう。

懐に忍ばせておいた“行動食4号”を齧りながらこの『なきがらの海』を眺めるのでした。

多種多様な生物の死骸が重なり山を為すこのなきがらの海。骨の山脈に少しずつ前線基地の“なきがら”が積もっていきます。

……あれ、痛い。何故だか皆様の視線が痛いですぞ。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・41

度々現れる原生物どもが悠然と泳いでいる姿を眺めつつ、会話に花を咲かせてお  
りますと、時間が過ぎるのはあっという間なものでございます。沈降を初めてから半刻も  
経てばもう底が見えて参りました。

ああ。白骨化した亡骸の層を抜けると……いよいよ見えてまいりましたね！

深界六層、『還らずの都』が!!

球から出ると、岩石と建造物とが混ざりあつた珍妙不可思議なる光景が目に入りました。

た。

これこそが古代の黄金都市……嘗て『ガンジャ』なる探検隊が目指した理想郷であり  
ますか！……ンンン。しかしまあ黄金などどこにも見当たりはしませんが。

黄金よりも価値のある代物がこの地にあるとはいえ、やはり黄金の美しき煌めきには  
心が惹かれてしまうものでしょう。嘗ての王侯貴族が唯の一つも例外無くそうであつ  
たように！

周囲に式神を撒きつつ安全確認をしておりますと、リコ殿が我先にと駆け出し、この  
珍妙なる景色を眺められます。どうやらお気に召されたようで……先程からぽかんと  
口を開けたままでございます。

「ほああ〜……すごい！すごい！すごいよみんな！……ここが深界六層なんだあ、ああああ!？」

「おつと……リコ、あまり一人で行動するのは良くないぞ。足元には気をつけてくれよ  
……？」

「ううー。分かってるよー……ぐすん」

ンフフ！愉快愉快！面白いものですねえ…

彼女らの絡みをいつまでも見たいものですが、式神が何やら生命反応を探知したようですので、そろそろ出立しましょうか。

「さあさあ皆様方！いつ何時原生生物どもが襲ってくるか分かりませぬゆえ、そろそろ出発いたしましょう！」

「うん！それじゃありコさん隊、しゅっぱあ〜っ！」

おー……などと、恥ずかしくて拙僧は言えませぬが…

深界六層といえども未だ陽光は差しており、辺りは寧ろ蒸し暑いほどでございます。ですが子供の睡眠欲求というのは恐ろしいものですなア、快適とは程遠いような気温の中で汗一つかかずに眠れるのですから！

……まあ、今彼らが眠れておるのは拙僧のおかげ。式神で辺りの気温を下げているだ

けなのですが。

そのような術も行使しつつ寝ずの番を勤めておりますと、何やら警戒網に反応が一つ。ナナチ殿やミーティ殿に程近い気配の生物がこちらに向かっているようでした。

これはこれは！この反応はおそらく成れ果ての姫のモノでしょう。でしたら彼の御方が容易に近づけるよう式神を少し除けておきましょうか。

——アアそうそう！拙僧も一応寝たフリをしておくとしたしましょう！

一人でも起きていれば、姫君が近づき難いと思われるかも知れませんかねえ？  
ンンン。では皆様、おやすみなさいませ！

今日の分の食料を集め終わったからひなたぼっこでもしよう。そう思つてガブールの上に作つたお気に入りの場所に陣取り目を閉じていると、いろんなカタチの住処がある場所を横切つた時に不思議な感覚を覚えた。

「…？おいガブールン。これなんすすか？」



『——私の感覚器にも反応がある。獣が嫌がる音だ。それに微小ではあるが力場も発している……調べにいくか?』

「サンシイカ……とてもキモチわるいけど、『石の者』が嘆いているのがきこえるぞす……そこまで連れてくぞす」

『承知した』

キモチのわるいニオイにキモチのわるい空気。力場の動き方があまりにゆがんで……  
ずっと頭が痛い。

『ファプタよ。ここであろうか』

「ん……ここからは自分でいけるぞす……そこにいれ」



というかうるさい。ファプタが近づいたあたりからこのへんなのが出す音がデカくなつたぞす。

レグの“守り”に触れぬよう慎重に近づき肩をゆすつてみる。ゆっさゆっさと音を立てて髪の毛が揺れるけれど、コイツは一向に話さそうとせんぞす。ほつぺたをぐいーんとしても固い腹に爪を立てても何も言わなぞす。

「…おいオマエ。オイ」

「……………ンンンンンンン…」

「千切ぞすぞ?」

「———そ、それはどうか止めていただきたく…」

「なんだ。やはり起きていたぞすか」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・42

原作通りに髪の毛を奪われて、それで以て獣避けを作っていただけ接点を得ようとしたのですが。ああ、姫君のなんと聡いことか！ここに拙僧の完璧なる「寝たフリ」は見破られてしまったのです……でしたらこの鼻提灯はもはや必要でないでしょうから？ ばん、と弾けさせておきますね。

……ところで拙僧疑問なのですが、いったい何を千切られる予定だったのでしようか？  
ンン、いけませんいけません。このような幼子相手に脅かされるなどと……脳裏に浮かんだ嫌な予想に慄いておりますと姫君に話しかけられました。

「それで、お前はレグの何そですか？ どうしてレグがファプタと同じ姿の者を連れてる……しかも二人。ファプタだけじゃダメなんですか……？」

「ソ、ソソ。彼女らは拙僧らの隊の一員でありますれば。貴方様の考えておられる様なことは一切！ええ、一切起こっておりませんとも」

「そすか…」

ソソソソソ。拙僧はなぜ痴情のもつれに首を突つ込んでおるのです？

正直勘弁していただきたいのですが。自分のことであればともかく、他人の色恋など至極どうでも良いことでありましょうに…

「…さて。それでファプタ殿はいつたい何をしにこちらへ？」

「あ、そうそす。その『石の者』が何やら嘆いておったそす。お前そいつに何したそすか？」

「ボンドルド殿が？ふウむ……。心当たりはありませぬなあ」

「そうか……。ファプタはそれだけそす。今までごくろうであつたそすな」

「——何をすのおつもりで？」

「ん？決まってるそす。レグを連れて帰るが？」

——なッ、急に何を言い出すのですこの雌狐は!?! 斯様な展開は原作には無かつたハズ：全く予測しておりませんでしたぞ。

ファプタ殿は罫を展開したままのレグ殿を無理やり引き剥がし、慌てて暴れ出すレグ殿をもつとせせず、侵入してきた窓より逃走されました。

ですが拙僧も運が良い！いくら予想外の出来事が起ころうともその汎用性の高さからいくらでもリカバリーが利くのは、陰陽術の長所の一つなのですよ。

さ、大人しくお縄についてもらいましょかねえ。

勢いよく元の位置に戻ろうとするレグの腕のシルシルという音を聞きながらブルーノの所へと急いでいた。

「ううっ、うおわあッ!?ちよっ、君はいつたい何なんだ?!

「っ…やっぱり覚えてないそすか…いつたい何をされた?」

「なっっ。なにもされてゝえっッ?!——っ!イタタタタ…」

レグがところどころ岩にぶつかっている様だけでも、勢いを止めることはできな  
す。後ろからすごい速度で追手が来てるから。

微小な、けれどもキモチワルイ力場を放ちながらファプタを追いかけてくるあの  
薄いモノヒトガタ。あれとはこれだけ離れているのに、一向に頭痛が収まらないそす。

…でも、どーにかすることはできるそす。キモチワルイ方に行かなければ撒ききれる  
!

あそのこの岩を曲がればガブルンのいる場所に着く。希望の光が見えたファプタは、  
レグを掴む手にいつそう力を込めて走りだし——

「ンん♡おかえりなさいませ♡」

角を曲がった先に、さっきのでっかいヤツを見た。



忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・43

「シャッーーツッ!!なんすすかこれ!なんすすかこれ!?!」

「ソソソ……なんせすぐに逃げようとされるのですから、こうでもしなければ拘束することなど適いませぬ」

「いくらなんでもこんなネバネバにすることは無いと思うぞ…」

現在姫君とその従者は、拙僧の操りし式神によって拘束されております!

前世におけるゴキブリホイホイやらトリモチなんぞを参考にして作らせていただき  
ましたこれらの式神は、姫君をその従者を拘束するための特別仕様!少量の水気があれ  
ば、それに反応して大量の黒い粘液を発生させるのです!

……しかし。この状態の姫君を観察しておりますと、何やら不思議な感覚がこう、ムクムクと……白い体毛に黒い粘液。これはこれは……もしやこの感情こそが、いとえもしぬというヤツなんでしょうか？

「ああ！口に入れちゃダメだ！ほらペツて！」

「フーツ、フーツ……」

「ああーフーツ!?ドーマン！キミからも何か言ってくれよ！」

「拙僧、決してレグ殿のみを責め立てる訳ではございませぬが……この件に関してはレグ殿にも責がありますかと」

「う、っ……ボクの知らないボクがいったい何をしたというのだ……」

項垂れるレグ殿を、リコ殿を始めとした隊の女性陣が慰めておられます。拙僧レグ殿の斯様な所が此度の騒動の原因だと思うのですよ。これはいつか再びやらかすので

しようなア：

これだけ呪いを施してもなお暴れる姫君とその従者を何とか宥め、その口から無理やりその出生について語らせた後（口を割らせる方法などいくらでもあるのですよ♡）。拙僧らは従者殿の後に案内していただき、村……「イルぶる」へと歩を進めておりました。不貞腐れて従者殿の上にて丸くなっておられる姫君とそれを護る従者殿ーンンン、何と甘露なる光景でありましょうか！

ここにナナチ殿とミーティ殿を加えるといったいどうなるのでしょうか……ああ、いえいえ。別に実行はしませぬとも！

拙僧に加え従者殿もおられるのです。危険なことなど起きるはずも無く、拙僧らは無事に村イルぶるへとたどり着くことができました。

……く、臭い。何です？この臭い。この異臭は村が発するものなのでしょうか……横目に皆様方を見ても、特に顔をしかめるようなそぶりなど見せられませぬから、拙僧が気にし過ぎなだけでしょいかねエ……

…アア！よくよく思い返してみれば、拙僧は前世においても犬猫の類の発するあの

……そう。動物園のカオリというものが大変苦手でありまして。それ故に少しばかり受け入れ難いと感じてしまったのでしような。

ええ、ええ。なぜそのような臭いが“村”と呼ばれる場所から発せられているのか疑問に思われた方もおられることでしょう！実はこの村、生きているのです。そのおかげで村の住民を喰らおうと侵入を試みる原生生物どもを撃退できておるのですがね？

さあ。説明なぞこの程度で十分でしょう？拙僧は疾く村の中へと入りたいのですよ。

「……………やつと行ったぞすか……」

あのデツカイヤツがレグたちと一緒に村へと入っていくのを、ファプタは見つめることしかできないぞす。ファプタも母に入れたらついて行くのに……っ！

でも、あの“守り”さえ破ってしまえば中に入れる。レグが中から壁を壊してくれれば……

「グギユウウウウ……あの不可解なる者は我が記憶領域にもあらざれり。どうやら干

涉機でもない存在。価値はあれど、欲しいとは思わぬ」

「ハッハア！何を仰るのです？すでに持つておられるというのに！」

ファプタが悪態をついたのを聞いて、ガブールンが話しかけてきた。

……いやいやいやいや。なんかおかしいぞ。ここにいてはならぬ者の声がしたぞ。  
す。

ガブールンの後ろを見てみると、につこりといい笑顔を浮かべたデカ男がいた。思わずビツクリして距離を取り威嚇する。

「オ、オマエどうやって?!レグたちとともに母の中へ入っていったというのに！」

「まあまあ落ち着きなされ。そのようなつまらぬ事などどうでもよいではありませんか  
！」

「そう。大事なのは拙僧がなせ此処にいるのか…そうでしょうか？」

——少々お付き合いしていただければと。

そう言つてデカ男はニンマリと笑つた。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・44

六層突入の際に使用したあの球状の遺物に似た〈守り〉を越え、拙僧らは村へと進入イルふるしました。周りが畜生——ンン、失礼。成れ果てどもで溢れていますので、外で嗅いだよりも更に濃い獣臭さが辺りに充満しております。

ですが、そこから生じる不快感を覆い尽くすほどの好奇が拙僧を満たしましたので、蒙昧愚劣なる此奴等を一切塵殺するのは最後にしよう、もう一度気を引き締めることができました。

ハッハア！しかしまあ、この村は何と摩訶不思議な地なのでしょうねエ！いやはや、生物の内部ですと上昇負荷が掛からぬとは…こればかりは拙僧も盲点でしたよ。

さて、村に入った拙僧らは熱烈なる歓待を受けることとなりました。なんとこの村の村長殿に出迎えられたのです！

「やあやあ、よく来たねえキミたち！」  
イルふる 村 “へようこそ。歓迎するよ〜”

「ンンン！これはこれは。本来であればこちらから菓子折りの一つでも持参して訪ねるべき所を、まさかそちらから迎えてくださるとは！どうか、この身の非礼をお許しください」

「ど、ドーマン？この人たちは悪い人じゃ無さそうだけど…」

「おおっと自己紹介がまだだったね。僕はワズキヤン。この村で〈三賢〉とかやらせてもらってるよ。んでこっちのニヨロニヨロしてるのがベラフ、こっちも〈三賢〉さ」

「やあ」

「三賢……そ、村長さんでしたか!?!わたしリコって言います！そうと知らず色々言ってますみませんでしたーっ！」

「あははは！全然イイ……さ、君らここ初めてでしょ？僕たちが案内してあげるからっ



いってきなよ」

「ええ!? そんな、大丈夫ですよ。わぎわぎ村長さんに案内してもらうなんて恐れ多いこと……」

「いいのいいの。三賢だなんてカッコつけてるけどやっぱヒマだからさ? ほら。僕らを助けると思ってたさ!」

「……な、ならお願いしてもいいですか?」

「もちろん!」

……さて、先程から黙って見ておりましたが…斯様な展開は原作に無かったと思うのです。拙僧の記憶が変質しておらぬのであれば〈三賢〉の面々が出てくるのはもつと後のハズ。村に入った途端に出迎えられるなどという場面はとんと見たことがありますぬ。

いよいよ原作知識が使い物にならなくなってきましたなア。とは言っても拙僧の有

する記録は村イルふる崩壊まで、どうせもうすぐ使い物にならなくなる知識でございます。リコ殿が村を出た後どのような冒険を行われるのかは拙僧の知るところではありませぬゆえ。

巨大なミノムシとヘビに案内されながら村を巡って行きます。薄暗い路地裏などを何本か通った先には、原作にてオオガスミなる巨大なナメクジの如き生物が暴れていた広場がありました。これには皆様方も驚かれたのか、わあっ、と感嘆の声を零しておられます。

記憶のなかにあるものと比べ幾分装飾が増えておるような気もいたしますが……この差異は何なのでしょうねエ？

巨大生物の腹の中だというのに噴水がありますし、中々に凝った造形の彫刻も置かれています。

道の色はそのままですが、かのローマ街道を思わせるような石畳の紋様が刻まれており、しっかりと「道」として認識できるほどになっておりました。

道沿いには等間隔に街灯が建てられていますのできつと夜でも明るいのでしょうか……

——ンンンンン!? なんですかコレは! 明らかにオースの町と同等程度の設備が整っておりませぬ?! こ奴らは数百年前の探「検」隊の成れの果て。そんな者たちがいつたい何処でこれほどまでに進んだ技術を獲得したというのです!?

「ん、どうだい？この村は面白いかな？」

「つはい！いろんなカタチの建物とかさつきさつきの市場にあつた、大昔の探掘家の装備とか……あ、でも住民の方々があまり見当たらないのがアレですけど……」

「あ……まあ村に来る人間なんて久しぶりだからね。皆腹の中では気になつても手は出せないのさ」

「さくて。だいぶいろいろ案内したけど……そうだ！折角だしウチに泊まつてかないかい？」

「——ええ！？い、いやそんな……っ！」

「そうは言つてもさありコちゃん、君きみこのお金持おんねつてないでしょ？それならウチに泊まつていった方がいいんじゃない？」

「いえいえ、それには及びませぬともワズキヤン殿！実は拙僧、先ほどこの村の通貨とや

らを幾らか手に入れまして。ですので、まあ、はい。拙僧らはそこらの宿屋を適当に見繕いまするゆえ！それでよろしいですか隊長殿？」

「うええ!?!いやでも、せつかく泊めてくれるって言ってるんだし…」

「よろしいですか？」

「……………ウン」

「というわけでありますので！拙僧らはこのあたりで暇を頂きたく…」

「……………なあんだ、そりや残念…分かったよ。それじゃまた明日ねー」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・45

あの愉快な子どもたちと……いや。あの男の率いる隊と別れた後、僕はベラフと今後の予定について話していた。今は見張り役の住民を三名ほどつけている。それに加え明日からは、ウチの住民の中でも愛嬌のある者を当てる。なんとか彼らを懐柔できれば僕らの「救い」になると思うんだけどねえ…

『確かにあの男……我々の滅びとなりそうだ』

「でしょー？でもさあ、あのイカした見た目！アレいいよねー！ここに来る前は何かしら演劇でもやってたのかな？」

『……やはりお前は変わらないな。 “神がかりの預言者” は未だ健在ということか』

「……………まあねえ……」

そう言つて茶を一口啜る。少しぬるくなつたそれが僕の喉を潤した。飲水の心配をしなくてもいいつてのは幸せな事だよねー…

ベラフも僕に続いて口に含むけど、能面のような顔が面白いように歪んで少し震えている。心無しか表面の鱗の光沢が鈍くなっているような気もするね！

「あれえ。苦かつたかな」

『——ツ！アゝアゝツ……口が二つある私のためにわざわざ二杯用意してくれたのはありがたいがこれは流石に…』

「そっかー」

慣れるとクセになるんだけどねえ、この苦さ。

ワズキャン殿らと別れてしばらく。程なくして皆様の腹の虫がぐうぐうと激しく自己主張を始められましたので、宿を探すより先に腹ごしらえをすることとなりました。

原作でリコ殿が食された「鞆丸焼き」なる料理……いったいどのような味なのでしょう！今から楽しみですなあ。

「女将さ〜ん！なんかこう、甘くて美味しいのください！」

「ハデイまえ……」

「……………あれえ？おつかしいな……」

「リコ殿、どうやらここの住民は独自の言語を持っているようで……ですがご安心召されよ！先程市場にて〈タンゴチョウ〉なる物を購入いたしました！ここは拙僧にお任せあれ！」

「いつ買ったんだ!?まったく、行動が恐ろしく早いな……」

まあこの単語帳、拙僧がここに来てから作成した物なのですけれど。他人の記憶を覗けば言語の修得など赤子の手をひねるようなものなれば！

……とは言つても、会話の際にはさすがに単語帳を見なければなりませんね。

『御主人！辛くて食欲をそそるような料理はありますか？』

『あるにやああるがね、アンタらお金あるんか？』

『……物々交換ではダメでしょうか？今ならば少し奮発しまして、ここの清掃代行も付きますが……』

『——あははは！おつもしれーなー！うん、いいぜ。今回はまけといてやるよ。でも早いところ〈価値〉を取つときな？やっぱ金がなきや不便だしよ』

『ソソソソ……ご忠告痛み入ります。ではそれを人数分……』

『アイヨ！』



率丸焼き……名前のインパクトも然ることながら、味も大変美味しゅうございました。あの刺激的な味わいは地上では久しく味わっておりませなんだ…

地上で辛味といえれば辛子饅頭などがありますが、あれも拙僧の舌を満足させるには力不足。只々管に辛いだけというのは芸がない。

……そういえば、ここに来てから暫くたつた頃に食した麻婆豆腐。あれは実に美味でしたなア…

ああいえ、実際には麻婆豆腐とは似て非なるものでありまして、言うなればそう。〃豆腐を抜いた代わりに野菜を多く入れた麻婆〃の様なモノ。

あの店主殿、今頃元気にしておられるのでしょうかねえ？巻き込まれて死んで無ければ良いのですが。まあきつと大丈夫でしょう。滅多なことでは死なぬであろう顔をしておられましたから！ハハハハハ！

「ドーマン？頼んだのと違うやつが出てきたんだけど…」

「  
ン  
ン  
〜  
?はて、  
何のことやら!」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・46

「お加減はいかがです？ポンドルド殿」

「ええ、問題ありません。快適ですよ……しかし驚きました。貴方の行使するその『魔法』とでも言うべき力は、この空間すら変質させてしまうのですね」

「ンンン！人の精神なぞ飴細工の様なモノ！然れば卿の精神空間を温泉郷に作り変える事など、児戯に等しきことなれば！あ、こちら差し入れの行動食4号ですぞ」

「おやおやこれはこれは！ありがとうございます。ん？………おやおや。これは素晴らしい光景ですね。ドーマン殿、貴方もそろそろ目覚めた方が良いのではありませんか？」

「ンン？………確かにそのようですなア。それでは拙僧はこの辺りでお暇させていた

できまする、何か用があればまた潜つて来ますので、それまでどうぞごゆるりと…」

食事を終え清掃も済ませて、対価となりしものを全て払い終えたあと、拙僧らは宿に泊まり夜を明かしておりました。

ンン？どうやって貨幣を手に入れたのか、ですと？

それはもちろん！この住民らとの物々交換でございます。彼奴ら——いえ、住民たちも好き者なようで、拙僧の有するモノ式神に興味津々な様子。

そこで新たに数枚サラサラと書き上げ、欲しがっていた者共に渡してやれば、そこで「価値」による取引が発生したのでしょう。拙僧の手の内には既に幾枚かのコインがあつた……という訳です。

その一部を使い宿を取り（もちろん食事は注文せず！）一晩ぐつすり眠つたのですが……今回は拙僧も仮眠を取らせていただきました。

何やら地上の方でかけていた呪術の一つが無惨にも破壊されてしまったようでした、その影響にございます。ソソソ。悲しいですなあ…

「んん……ななちい……」

「んなあ……」

……ナナチ殿とミーティ殿は流石に暑いのか、布団は被っておられませぬ。代わりに互いに抱き合って眠られておりますので……んん、眼福ですな！

さアて。体力の回復も済んだことですし、イルぶる村の外に置いておいた式神の調子でも……

「む、起きたかドーマン」

「……おお。おはようございます、レグ殿。今日はお早いのですね？」

「ああ……しかしキミも眠ったりするんだな。いつも見張りをしているイメージがあったんだが安心したよ」

「んふふ！もちろん拙僧も眠っておりますとも！」

「本当か…？ 監視基地シーカーキャンブの頃から一睡もしてないような気がするんだが」

「——いえいえ。いえいえいえいえ。それは勘違いというものです。拙僧は皆様の見ておらぬ所でしっかりと睡眠を取っております、そうでしょう？」

『疾くこの者を惑はせ給へ。急々如律令』

「そうか？ だが——…いや、そうだな。すまない」

「ふふ！ 分かればよろしいのです。さ、皆様を起こして朝餉といたしましょう？」

「ああ」

宿にて出される食事は死んでも食わぬと心に決めておりましたので。少しばかり醜態を晒しつつも、なんとか食堂へ行くことができました。

普段であれば住民どもでござった返しているであろう食堂も、何やらガランと静まりかえっております。その原因はやはり〈三賢〉の内の二人が集結しているからでありま

しよう。

食堂中に広がる言葉にできない緊張感に、皆様方の体も強張っております。

「……この村の長というのは幼子を精神的に追い詰めるのが趣味なので？」

「——うええッ!? そりゃああんまりじゃないかい？」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・47

「シンシンン!! 旨い! ああ旨い! 何たる美味か!」

「でしよ? コレ僕のお気に入りなんだよねえ。こつてりしてて美味しいでしょ?」

「ほう。ちなみに名は何とのです?」

「ん。これは確か……村人の誰かの脳ミソとかじゃなかったっけ? 結構レア物なんだよ? ほら! 限定商品ってヤツ?」

「」

「ドーマン、顔すいよっ」



「頼まなくて良かった…」

注文したモノがようやく届きましたので、拙僧らは三賢の皆様やリコさん隊の皆様と共に朝餉を共にしておる所でございます。……拙僧はどここの誰とも知らぬ者の脳髓を喰ろうていますが。ああ！他の皆様はちゃんとした物を食しておられますぞ？

少うしばかり横からつまみ食いをさせていただいておりますが♡

「も、もうちよつと取つてもいいよ？」

「いえいえ、いえいえいえいえ。どうかお気遣いなく…」

「ん〜…美味しいと思うんだけどねえ」

『……それを好き好んで食べる者はこの村でも少数派である、とだけ言っておこうか』

「え〜」

朝食を食べ終わった後、お腹が苦しくて（すつごく美味しくて急いで食べたからかな？）休憩していると、ワズキヤンさんが話しかけてきた。

「ふう。食べた食べた！美味しかったねえ〜！」

「は、はい！……そういえば、ワズキヤンさんはいつもここでご飯を食べるんですか？」

「ん？そうだね！他にも食事を価値にしている住民はいるけど、ここの食事は別格なのさ」

「へー！あ、だったらだったら！ああいう付け合わせみたいなのも毎回出てるんですか？」

「……ん。いや？あれは僕の持ち込んだヤツだね。どうだい？美味しかったですよ！」

「いやあ……なんかドーマンに全部食べられちゃって……で、でもでも！ワズキャンさんってすごい人なんですわね！」

「あの匂い、堪えきれない麻痺毒持ちクオンガタリの幼虫を焼いたみたいな感じでしたし！」

「まさかあれを毒抜きできるなんて……あつ！もしかしてワズキャンさんも料理好きなんですか？」

「———そうだね！うん。僕もよく料理をするよ！あ、よかつたらウチに来るかい？いろいろ御馳走しようか？」

「あー…つと、いやあ。気持ちは嬉しいんですけど、もう宿を取っちゃったから…」

「へエー！宿が取れたのかい？そりゃ驚いたなあ。てつきり野宿したのかと思っていたけど……おつと。そういえば僕、これから仕事があるんだった。いやあ忘れてた忘れてた！それじゃあ僕はここでお暇させてもらうよー」

「あ、はい！お仕事頑張ってください！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・48

「フアプタ殿！もう少しペースを落としてください！ここは些か素晴らしき遺物が多すぎるといえる！どうかもう少しゆとりを持って・・・」

「オマエほんツとワガママそすな・・・」

『……：汝は如何なる方法であれだけの遺物を収納しているのだ？小山三つ分はあるというのに……：それに先程の虚空に開いた暗き穴は何なのだ？あの穴はどこに繋がっている？』

「ふふふ♡ソソソソソソ・・・」

おやおや。これは実に興味深い…

…おや、これはこれはご無沙汰しております。皆様とお会いするのはこれで二度目になるのでしょうか。

改めまして、私はボンドルド。人々に黎明卿と呼ばれていたのも過去の話、今は白笛そのものとして、そして「ただの」ボンドルドとして。彼を模した「シキガミ」という遺物の首にぶら下げられています。

そんな私ですが、今は彼の操る「シキガミ」にファアプタ殿、ガブールン殿と加えた三名で、深界六層のマップ<sup>地</sup>ピング<sup>埋</sup>をしています。どうやら、あくまでも主目的は『まだ見ぬ遺物の搜索』らしいのですが。

どうやらこのシキガミ、私の「精神隷属器<sup>ソアホリック</sup>」と非常に似通った代物のようで、このシキガミでも「私」が使用できるようなのです。「精神隷属器<sup>ソアホリック</sup>」以外でも白笛が使用できるようになるとは……本当、彼への興味は尽きません。

彼——ドーマン殿は、私を使用して、ここ深界六層に眠る様々な遺物を「覚醒」させ、目ぼしい遺物を選別したいらしいのです。なるほど、確かに素晴らしい案だと思います。

ですが本来、白笛には再使用までの待機時間が存在していますので、そう何度も鳴らす事はできません…

そこでドーマン殿は、「私」の待機時間を無くすため、大量の生命力を「私」に注ぎ込んでおられるのです。「私」もこう見えてしっかりと自我を確立していますので、生命力さえあれば疲労も無くなりますので。

いささか力技すぎる気もしますが、それでも問題は解決されたのですから、実に素晴らしい発想力ですよ。

………おやおや、これは…？

どうやら、ドーマン殿の本体のいる場所で何やら騒ぎが起こっているようです。

実は、彼と私の〈命の紋〉は何の因果か非常に酷似していますので、何が起こっているのかという程度であればお互い共有することが出来るのです。





忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・49

朝餉も終わりましたので本日予定などを皆様方に尋ねますと、それぞれが全く別の行動を取ろうとしていたため、どうしたものかと頭を悩ませておりました。

リコ殿とレグ殿は村全体の探索、ナナチ殿とミーティ殿、プルシユカ殿は商店街巡りをご希望のようですからね。

ンンン、悩ましい。拙僧はいったい何方の班と行動すれば…

などと迷っておりますら、皆様は拙僧を置いてサツサと行ってしまうわれました。皆さま？酷いですぞ…

このように被害者ツラを被り嘆いておいて言うのも恥ずかしいことですが、実は拙僧、先程から何度も皆様に『早くしないと置いていくよ〜!?!』と告げられていたのですよ。ですので、皆様方が急に拙僧に対する慈悲をお捨てになったとか、そういう事ではありませぬのでご心配なく！

……さて。女将殿も食材の下ごしらえのために店の奥へと行ってしまわれたため、とうとう拙僧は一人ぼっちになってしまいました。

…ようやくと一人になれたわけです。ええ、では。分裂しますか。

「あつ、ドーマン！こつちに來たんだね」

「んなあ…オイラはてつきりリコたちの方に行くもんだとばかり思ってたぜ」

「いえいえ！もちろん拙僧も大分悩みましたとも！」

「へ〜！ドーマンもおみやげとかに興味があるのか？」

「ええ。まあそんな所です」

ふふふ……久しく会話をしておりませんでした。そうでした。そうでした。プルシユカ殿は非常に活動的な御方で……

このような関係の事を水魚の交わりなどというのでしたかな？よくミーティ殿と走り回っている姿などを見かけますが。

「あらあら……行っちゃまったよ」

「ソフソフソフ！元気があって良いではありませんか！ // 成れ果て // ておられた頃と比べても、ねエ？」

「……そうだな」

二本の足で立ち、元気に走り回っておられるミーティ殿を見て、ナナチ殿も感慨深そうにしておられます。

……？

「ナナチ殿？ナナチ殿!？」

「——ん なっ」

「ああ、良かった。何やら様子がおかしかったものですから、何事かと心配してしまいましたぞ?。」

「…うおお。そうだったか、すまねえなドーマン」

そう言ってナナチ殿は走り去ってしまわれました。……なんですかあれ。急に目の輝きが消え失せて、さながら一昔前前世のヤンデレきやらの様でしたぞ!？」

「またこれは……ミーティ殿も難儀なことですよ」

このまま放っておくのも面白そうですが、十中八九良い方向には転ばぬでしょうし、ここは拙僧が一肌脱いで、今晚にでも感情操作の術を掛けておきましょうかね。

……あの有様を見るに、焼け石に水な気もいたしますが。

「……——おおツと！これなるは殲滅卿直筆の手記でありますか!?危ない危ない、買  
いそびれるところでした……」

ンンン！リコ殿への土産が一つ増えましたな！

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・50

走って行ってしまわれたお二方に追いつくために少しばかりお姫様抱っこなるものをさせていただきましたが：なんとか無事合流することができ、ほっと胸を撫で下ろしました。

ですが今の数瞬の間に、どうやら住人の畜生共と交流されたようで、交友関係を結んだ者もいるようなのですよ。

ンン……これは盲点でした。お二人の人柄がこれ程までに明るかったとは！拙僧の目を以ってしても見抜けませなんだ：

プルシユカ殿がこの者に抱きつかれます。

「ねーねードーマン？この子ね、なんか怪我してるみたい。さつき転んじやったみたいで……どうにかできないかな？」

「……まあいいでしょう。拙僧が治してさしあげます、ホレ」

〈急々〉と唱えるまでもない、ごくごく普通の治癒の術式です。本来であれば斯様な擦り傷、この程度の術式でも十分治せるのですが。

「ど、ドーマン！もうちよいお願いできない!？」

「……ああ！なるほど！ええ、ええ、勿論ですとも！」

治りませんでした。これがあまりに不可解で、昨日〈オオガスミン〉を処方した時には通常通り機能したというのに……と、なにか思い当たる節がないか考えてみたのですが……

恐らくこの者は「村」との繋がりが強いのでしょうか。それ故、本来ならばこの者のみに掛かる筈の治癒術式が、この「村」そのものにも吸収されてしまった……なるほど。そう考えてみれば確かに、この者の外見は前世でも見たことがありますぞ！

何でしたっけ？女形で一つ目の……

……ま、まあ何はともあれ！治ったのですからもうよろしい！サツサと行きましょ

う。

「あつ！ドーマン！この子ついてくるぞ！なあ、コイツと一緒にまわってもいいだろ？  
ね〜え〜！」

『ふああああ!!?なに!!?そんな急に抱きついてくるの…』

「……ええ！勿論ですとも！」

「ホントか!?やったあ！」

『ええ…いいの?』

別に監視役なぞ、いてもいなくても変わらぬでしょうし。



「もー。ドーマン遅いよー？」

「急に固まったから心配していたんだが…」

「いえいえ、お気遣いなく！」

ンンン、ささてさて。あちらの方は式神に任せ、こちらは“村”の探索中。街道をあちらこちらと行ったり来たり。ふらつとそこらの路地裏に入ったかと思えば、また出てき、ポツンとある出店の中に入っていったりと。

ンん。お二人とも楽しんでおられる様ですので、拙僧としては別に良いのですが…しかしなんですこの店？そこら中に商品が所狭しと…いえ、散乱しており、これでマトモに商売ができるのかといった有様ですが、リコ殿はホコリまみれのその中をまるで気にせずズンズンと進んで行かれます。

これには流石のレグ殿も呆氣にとられたのか、少しばかり引き気味なご様子で！

「り、リコー？そつちはあまり良くないんじゃないか…」

「えく？そんなことないナイ！よく見たらちゃん倒れないように糸で固定されてるからさー！」

そうリコ殿がおっしゃると、奥の店主らしき者がうんうんと頷く様に首を振るのです。

——痛つ。え？痛いですと!?何ですこれ！

拙僧の足の裏に刺さった棘らしきモノを抜き取りて見てみれば、それは何やら白い菱形の画鋏？のような形をしています。その両端からは一本ずつ。それと菱形の中心からも、鋭い杭のような物が飛び出ており、どうやらこれが足裏に刺さったようでした。

「……………これは…」

『ツ。ウゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝアゝ!!』

「ぴゃあ!?!ど、どうしたの!?!」

何やら店主が騒いでいるようですが、そのようなことはどうでも良い！こちらの方が  
余程重要な事ですぞ…

こ、コレは…コレこそは！

「——リコ殿」

「うああああ…どうしたの？」

「鍼治療に、興味はお有りですか？」

一級遺物、〈千人楔〉…ッ！

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・51

「そ、それって…っ！」

「ええ！オーゼン殿の装備されておられた一級遺物、〈千人楔〉そのモノに御座いますれば！これは何としても購入せねばなりませんぞ！」

「…なんでそんな物が『村』にあるんだ？」

「拙僧もよく分かりませぬが…『店主殿！コレと全く同じ形をした物を、あるだけ全て買い取らせていただきたく！』」

拙僧がそう言い放ちますと、店主は驚いたのか、慌ててこの品物の山の中から〈千人

楔を探す作業に取り掛かります。

その行動があまりに激しいので、埃が散って敵いませぬ。手に持っていた楔を店主に預けて、拙僧らは店の外にて時間を潰すことにいたしました。

『では、また後ほど参りまするので！』

その声に甲高い雄叫びで以って返しなされた店主殿に、一瞬間を顰めました。いかんいかんと気を取り直して商店街へと抜けてゆくのでした。

「——ン？ああ。リコ殿？リコ殿！」

「はいはいどしたのドーマン？」

「いえ、大したことでは無いのですが。コレを」

「何これ?……つ、これってお母さんの手記じゃない!何処でみつけたの!」

「ええ。実は先ほど、ここではない別の商店に立ち寄った際に見かけまして。絵柄が美麗でしたので買わせていただきましたが……その様子ですと、何やらリコ殿にとつても大事な物であつたようで!いやア!買つておいてよかつたです!」

「……ンん、良ければ差し上げましょうか?」

「ほんと!?ありがとう!わあ……うん、やっぱりお母さんの字だ!」

「何と書かれているんだ?」

「うーん……ちよつと待つて……」

先ほどナナチ殿らに随伴させていた式神から、殲滅卿直筆の手記が送られてきましたので、リコ殿に渡してみたのですが……

……しかしまあ、歩きながら手記をご覧になるとは、随分と器用なことをなさるものです。現代<sup>前世</sup>の子の“あるきすまほ”なる行為に通ずる所がありますねエ……

リコ殿もレグ殿も、完全に自分の世界に潜ってしまったので、拙僧はただ図体の大きいだけの木偶の坊と化してしまいました：

拙僧も今晚の夜まで予定はありません、外の式神も上手くやっているようで、上層——四層より上——では到底見つけられぬような素晴らしい、正に〈至宝〉と呼ぶに相応しい品々を幾つか発見しております。

……ただ、予備のために持たせておいた残基前線基地にて手に入れた成れ果てを五体も消費しているのは受け入れがたい事ですなア。

いえ？ 仕方がない部分はあるのですよ？ 使い方の分からぬ遺物を解析するためには、どうしても生きた人間が必要でありますゆえ。ですが、死なぬようにする対策というのはいくらでも取れるワケであります。

残基を一つ消費して、通常のモノよりより人間らしい式神を用意し、それに使用させるとか：

…聞いてますか？ 貴方に言うておるのですよ、二号。

『勿論、重々承知しておりますとも！ ですがねエ、こちらの拙僧も拙僧でありますれば、分割すればするほど自我やら思考なんぞを統率するのは困難になるのです』

『…そも、この軀は既に別たれたものでしょう？ 既に切り分けた肉から、さらに得を獲よ

うとすれば、必ずどこかで破綻しますぞ?』

ンンンンン……悩ましい。悩ましいですなア…

確かに、貴方の言うことも一理あるのです。特に、『使用者の望むモノを写す眼球』なる遺物は、実際に自我を共有しておらねば、詳しい性能を知ることなどまず不可能。

そのような一級……いや、特級すら相応しき遺物に残基を使うのは別によいのですよ?

ですが………なんです、それ?

『ソソソ?』

その……ンン。言うのも憚られるような、悍ましき外観の…

『……—アア!ゴ』

それ以上は言わずとも結構!それは上に送るのです!



・忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・52

「ねえドーマン。さつきさ、『針治療に興味はないか』って言ってたけど……千人楔でマッサージするつもりなの？」

「ン？ええ、そうですとも」

「———そ、それはちよつと、何というか……」

「はて？名に『楔』とありますが、やっていることは針と変わらぬのです。人体の構造に精通している拙僧からしてみれば、オーゼン殿のように『腕だけを重点的に刺す』などというのは正に愚の骨頂！」

「体というのは、その部分のみで動いておるわけではないのですぞ？ただ物を投げると

いう動作一つとっても、関節やら筋肉の様々な部位が使われているのですから！足を踏み入れ、身体をひねる、肩を回し、腕をふるう……こうして考えれば、針やらの「ツボ」の通りに刺すというのは、あながち的を外れた方法では無いのではありませんか？」

「…あ、あれ？そう言われると確かに…」

「リコ!?リコ!?丸め込まれてるぞ！」

「ドーマン。やっぱオマエ口が達者だなあ……でも確かに無えとは言い切れないのが質悪いんだよ…」

横であたふたとしておられるレグ殿を見ると、心がすつと澄んでいくような気がして、精神衛生上大変よいのです。

まあそれはそれとして、です。今拙僧らは、

『ワズキャンさんがあんまりしつこく誘ってくるから、それならいつそのことこつちか

ら訪ねてみよう!』

という隊長殿からのありがた〜いお言葉の元、ワズキヤン殿のお宅を探して歩いてい  
る真つ最中でございます。

……ああ! 大分前にナナチ殿らとは合流しましたぞ? “拙僧が二人いる問題”は、合  
流する既の所で拙僧がお花摘みに云々:とうやむやにし、離席することで解決いたしま  
した!

ちやくんと見張りの式神も置いておりましたので、皆様方には方に一つも危害は加え  
られませぬとも!

しかしまあ、このような極彩色の街並みというのは、何とも目に悪い……階段の細部  
にいたるまでこの岩らしきもので構成されておりますので、ええ…

ハツハア! これも防衛本能というヤツですかナア?

「う〜ん……ここが終わつたら次はどこ行こうかなあ……」

「もう目ぼしい所は粗方回り終わったハズだが?」

「んあゝ…さつき小耳に挟んだんだけどよ、この村の奥の奥の方<sup>へ</sup>にさ、すつげえ深い豎穴があるらしいぜ？」

「えっ！ホント!?じゃあ次はそこにしよう！」

……んん？流し聞きしておりましたが、今さらつとトンデモナイ事を仰つておられた気が…

問題は、拙僧がそこまで行けるか分からぬということですね…

ガツデムファ——ソソソ、失礼しました。気の遠くなるほどに長い階段を上り切つた先には、色とりどりの花が満ち溢れた花園が…

その中心にぼつねんとして建っている小屋の、何と優美な事か！管理の大変そうな住居でありますなア！

家の外壁に咲く花へ、その背丈には到底合わぬ小さきじようろで以て水を与えておられるのは、村長たるワズキャン殿であらせられます。

「——おやあ！よく来たねえ〜！驚いたなあ。僕もまさか、ここまで来るなんて思っても無かったからさ〜？」

「あつはははー…面白そうだったんで、つい…」

「あんなに胡散臭かったのにかい？」

「…じ、自覚あつたんですね」

「つぷ！あはははは！まあね！つと。立ち話もなんだからね、入ってきなよ。お茶ぐらいなら出すよ〜？」

そう言つて、ワズキヤン殿は中に入ってしまったわけです。

…しかしまあ。これはこれは…

「ん？どしたのドーマン？」

「……いえ、何でもありませんとも」

「…ドーマン。一応、分かっていると思うけど」

「ええ！警戒は怠りませぬとも！」

「ならよし！」

この辺りに咲く花、どれもこれも毒花ではありませんか。全くイイ趣味をしておられ  
ますなア！

皆様方も（レグ殿とミーティ殿以外は）気付いておられるようですので、やはり皆様  
博識でいらつしやる！拙僧、感心！

・忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れ  
ていたころ・・・53

ワズキヤン殿の自宅の中はその外見に違わず、なんとも「めるへんちつく」な内装を  
しております。そう。

さながらかの「動く城」のように、視界の端にはこじんまりとした暖炉と、ソファと  
が。

そして壁には大小様々なフライパンやら鍋、包丁なども吊り下げられており、生活感  
を感じさせながらも決して不快にはならない：

……ン、実に良き家です。ええ。良き家なのですよ：

コポポポポ：

「…」

「…」

「…」

『『…』』』

「うゝん…」

「……どうだ？」

「マズイ!!」

「だろいな」

「…あ。キミらもいるかい？」



「遠慮しときマス…」

これさえ無ければ！

ワズキヤン殿特製のお茶モドキ（配合物不明）……なんだか排水溝にこびり付いたヨ  
ゴレの如き色でしたな…

ですが、それよりも不思議なことには、このお茶モドキ、その見た目に反して実に香  
り高く、ミントのような清涼感を感じさせる匂いをしているのです。

どちらにせよ、これを一息で飲んでしまわれるとは。全く末恐ろしい御方だ…

「いやあく失敗失敗！普段はもつと上手く淹れられるんだけど、人が多いから緊張し  
ちやつてね？」

「いつもとあまり変わらない気もするのだが…」

「そ、そうなのか？本当にこれを、毎日飲んでいるというのか…？」

「……分かってくれるか、レグ。この辛さが」

「うーん……おつ。慣れてきた慣れてきた。ふう」

「……度し難てエナー」

「だねー……」

その後に関われたワズキヤン殿によるお茶談義が一段落着いた所で、リコ殿が口を開かれます。

「それで、ワズキヤンさん……」

「ん？……ああー！そうだったねえ！すっかり忘れてたよ」

「君たちに色々ちよつかいを掛けていたのは他でもない。実は君たちに……というよりは。そのドーマン君に頼みたいことがあったからなんだ」

「——ほおう？拙僧に。いったい何です？」

「うーん。話すと長くなるんだけどねえ。ねーどうしようかベラフ。今、全部言うべきかなあ？」

「……どちらでも、いい」

「……うーんそうだねー。ま、手取り早く言っちゃうとね？僕ら今チヨー困っててさ！助けてほしいんだよ」

「……た、助ける？ワズキヤンさん、それってどういう……」

「どのような助けを求めておられるの？」

「ううえ!? ドーマン!? ちよつと——」

「ここから出たいんだ。それも安全に、ね?」

そこにいたのはワズキヤン殿ではありませぬ。神がかりの預言者が、真剣な眼差しで拙僧を見つめておりました。その身に纏う雰囲気から、流石のリコ殿も『あううう…』と閉口してしまわれます。

「いやさあ? ホントはこう、人質とかバンバンとつちやつてさ、『早くしないとコイツがどうなつてもく』みたいな感じで行こうと思つただけだ。君が僕らの用意した策を悉く台無しにするもんだから、もうこうして頼み込むしか無くなつちやつたんだよね!」

「はあ。そうですか」

「そーなの。まあ、ほら。そうは言ってもやるだけはやつとかないとね?」

「ソ、ソソソ……何とも厚かましいお方ですなア。あれだけ人に毒虫など、ゲテモノ食材

を色々食わせておいて、その上さらにそのような事をのたまうなどと！いったいどの面下げて頼み込んでおるといふので？」

「…ん？そりゃあモチロン、僕のこの面さ！」

——アアッ!?ソレは拙僧のセリフだというのに！これでは二番煎じになってしま  
うではありませんか！ンンン度し難し!!

・忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れていたころ・・・54

「で、どうかな？協力してくればちゃんと報酬も支払うよ？」

「——報酬？いったいどのような品です？」

「ベラフー？」

「分かっている」

ワズキャン殿に請われてベラフ殿が背中から降ろした籠の中には、今となつては懐かしき、成れ果てた姿のミーティ殿が収まっております。

「——あつ、昔のアタシだ！でも何でこんな所に…？」

「この『村』に頼んで創ってもらったのだ。完全な不死、とても濃い祝福だ……だからどうしても欲しかった」

「でもね？ 僕の方で話をつけたんだ。君たちが協力してくれたら譲ってあげたいと思つてさ、ベラフも了承してくれたし。あ、そつちにはもうあるからいらない？ それとも……」

「いえいえ！ いえいえいえいえ！ 良いですとも！ そこまでして拙僧の助力を乞うというのならば、微力ながらも拙僧がお手伝いしてさしあげます！」

……流石は『神がかり』、何とも恐ろしき事です。問者を使い覗き見をしていたとはいえ、たつた数度顔を合わせただけで拙僧の深部を見抜くとは。事前に警戒していたとはいえ何とも恐ろしい。

徐々に薄れゆく拙僧のメイドインアビス<sup>原</sup>、その中でもとりわけ詳細に記憶していたキャラクターは三種類。

一つは判明している限りでの『白笛の面々』。

一つは主人公たる「リコさん隊」。

そして、最後の一つは「神がかりの予言者」殿でした。

ワズキャン殿自体はただの料理上手な方というだけですが、問題なのはその「予言」のほう。

例を挙げるならば、あらゆる策だとか偽装等を事前情報無しで見破るような、超常の能力とでも言うべき「直感」、そしてそれに似た「予言」など…

そのような力、他者が行使するにはあまりに強力すぎる！

自分が行使する分には何の問題もありませんが、他人がソレを扱えると言うなら話は別ですぞ。

本当はこの「村」の住民を一切塵殺するつもりだったのですよ？なんとなく気に食わなかったのです。ですが、ええ、止めました。

ンンンンン!!ここで「おりちやー発動」というヤツです！

「……と、まあ。拙僧としては別に良いのですが、隊長殿は…」



横を向いてみれば、むすつとふくれた顔をして、不機嫌そうにしておられるリコ殿がおられました。

「……べつつにー」

「ソソソソソ！何故そのように可愛らしく膨れておられますのぞ？」

「…だって、この人たちドーマンに色々毒とか食べさせてたじゃん！確かにわたしも何度か試してみたいとは思ってたけどさ…？」

「——んん？」

「ドーマンってレグと同じで、いくら攻撃しても傷ひとつ付かなさそうだし、あのオーゼンさんやポンドルドにも勝つちゃうくらい強いから、打撃とかだけじゃなくって毒とか酸とかにも耐性あるのかなー、なんて気になってたのに…」

「それなのに！よりもよってわたし以外の人に毒を盛られるなんて！ヒドいよドーマン！！」

「

「や、止めてやってくれ、リコ……今回は流石にドーマンが可哀想だぞ……」

「え？あつ！ご、ごめんどーまん！ドーマン!?」

「わあお。まだ子供なのにすごい発想力だね……うん、イイね！」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・55

ガタガタと震えるドーマンを宥めるため、背中をぼんぼんしていた。

ワズキャンさんの方はもう落ち着いたのか、さつき注いだお茶モドキを飲みながら振動するドーマンを眺めているようだ。

……ドーマンをこうしちゃったのは私のせいだけど、きっかけはワズキャンさんに盛られた毒なんだから、もうちよい気にしてほしいな…

「ところでワズキャンさん、なんでこの家には毒のある花が多いんですか？」

「ん？んー、そうだねえ。僕の趣味っていうのもあるんだけど、一番の理由はやっぱり、  
そう。『抗体』を作るためさ」

「『抗体』?」

私が繰り返すと、ワズキヤンさんはしたり顔で説明してくれた。

「そうさ! 深層の獣には毒を持つモノも多いからね、予め体を害する物への耐性を付けておくっていうのは無駄なことじゃ無いよ? どう? 君も一杯」

「あ、それは遠慮しときます」

「そっかー」

……本当にこの人は、所々に違和感を感じさせるように喋るのが上手だと思うの。わざわざ毒の事を『体を害する物』、なんて回りくどい表現で言うかなあ? それか、わざと気を引くような喋り方をしてる…?

ドーマンもそうだけど、ワズキヤンさんも妙に勘が鋭い。もしかしたら似た者同士、何かシンパシーとか感じてるのかな?

あ! それともアレかな? 四層で見かけたあのタマウガチみたいに力場を讀んでるの

かも……へへ。なんちゃって……

「ワズキャンさん」

「んー？何だい？」

「ワズキャンさんって、何をそんなに怖がってるんですか？」

「……」

怖がっている、っていうのはちよつと言い過ぎな気もするけれど、これ以上にぴったりに当てはまる言葉は無いと思う。私たちと会うときに、いつも飄々とした喋り方をするのは、恐怖の裏返しなんじゃないかな？

「私達がこの村にお邪魔した時もわざわざ迎えに来てくれたし、その後も、私達の食事にいろいろ毒を混ぜたり……かといって外から来た人を疎ましく思ってるのか、つていつたらそういうワケでもない……」

「さつき私たちが入ったお店の店主さんは、元々外からやってきた探窟家の人らしいし、外から来る人を積極的に殺そうっていうことでも無いんですよね？なのに何で私達の時だけ毒を盛るんですか？」

「……驚いた。何にも考えてなさそうな顔してるのに、すごいねえ」

「それ褒めてるんですか……？」

「ん？うんうん。褒めてるとも！うーん……そっかー。もうそこまで分かっちゃうか

……

「なら早めにしておいた方がいいかな？ベラフ？ちよーつと仕事を任せたいんだけど  
！」

ワズキャンさんはなにやらぼそぼそと呟くと、ナナチやミーティたちと戯れていたベラフさんに声をかけた。

「また見回りか？」

「いいやーいいタイミングだしね。解放だよ」

「……そうか。そうか。永かったな」

「ワ、ワズキャンさん？ベラフさんも、いったい何の話をしてるんですか？」

「……そうだねえ。何て説明すればいいか……」

「この村の外れにちよつとした洞窟があるんだけど、そこに一人、昔からの知人が住んでるのさ。そんなに仲が良いわけじゃあないけど、やっぱり同郷のよしみっていうのかな？村を出るとき一緒に連れて行きたくってねえ」

「でしたら拙僧も同行いたしましょうか？あ、リコ殿。撫でるのはもう結構ですぞ」

「うーん……？ドーマン君も来ていいけど、奥まで来れるかは分からないよ？」

「いえいえ、大丈夫ですとも！拙僧であればその程度どうともなりますので！」

……まーたドーマンが悪い顔してる。今度はいったい何をするつもりなんだろ？



忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・56

あの家にてするべき全ての会話を終わらせ、拙僧らは「目の奥」<sup>ドクレーブ</sup>なる洞穴——ヴェロエルコ殿が囚われている場所——へと向かつておりました。事前に漫画などで見  
てはりましたが、しかし、これ程の高低差があるとは……力場があればどうなってい  
たことやら！まったく村様々ですなア。

さてさてどうやって降りたものかと、レグ殿と並んで穴を覗き見ておりますと、何や  
らワズキャン殿が言いづらそうにしておられます。

「いやあ。申し訳ないんだけどさドーマン君、ロープを持つてくるのを忘れちゃったか  
ら君がなんとかしてくれないかな？ゴメンゴメン、埋め合わせは後でするからさ！」

その口調があまりに白々しいので、拙僧も思わず呆れ果ててしまいました。

「……はあ。まあ宜しいでしょう、という事ですのでレグ殿？腕は伸ばさずとも結構で

「すよ？拙僧が浮かせて差し上げますので」

「え？嫌だが？また吹っ飛ばされたら困るし…」

「なんと心外な!!レグ殿!?!ここは空気を読んで拙僧にお任せなされよ!」

「えゝ…」

「ほ、ホラ、リコ殿！リコ殿からも何かおっしゃってくださいいな!」

「わたしも遠慮しとこうかな？ロープは自前であるし」

「ンンンンン!!」

「…へえ、君たちは仲がいいんだねえ!」

「ワズキャン殿? いったい何を見ておられたので?」

何やら微笑ましいモノを見るような目をしておりますが、それは結構。結局、飛行用の呪符は拙僧とナナチ殿、ミーティ殿、プルシユカ殿、そしてワズキャン殿の分、合わせて五枚となりまして、リコ殿はレグ殿と一緒に抱き合つて降りて行かれました。

ワズキャン殿は初めての浮遊体験に大いに興奮なされたようで……拙僧の式神、使つて楽しいオモチャなどでは断じて無いのですが……

さて。下に着きますと、数多の黒い物体……いえ、生まれることのなかつた子供らが拙僧らの足元にて蠢いておりました。なんとも不快な心地にさせてくる者共ですが、ここは耐え忍ぶ時です。ぐつと腹に力を込め、一步を踏み出しました。

拙僧以外の方々には一切近寄らぬのですが、やはり皆拙僧を警戒しておるのでしようか。これはまるで……そう。黒き洪水のようで！闇の中でもハツキリと分かります。拙僧の前に立ち塞がる無数の眼よ！ああ、ああ……これはなんとも……

「親から礼儀というものを学ばなかつたのですかな？皆様方、あまり良い心地はしませぬぞ」

疾く之を殺め給え、〈急〉

「おーつと！ドーマン君？僕としてはそれ以上はちよつと止してほしいんだけどなあ。ダメかい？」

「……………まあ良いでしょう。皆様には何の害も与えぬようですから、ねエ？」

「——はあ。まったく。何となくは分かってたけど、君つてホントとんでもないねえ」

これまでドーマンがする事には何かしらの理由があった。ミーティを人に戻したのもナナチを仲間にするためだし、ボンドルドを倒した……いや、違う。

殺した。殺したのも、後からプルシユカやナナチから聞いた事を元に考えてみれば、（六層に降りるためというのもあるけれど）プルシユカを助けるためだった。

……きつと、私たちと一緒に奈落へ潜るのにも何か理由があるんだろう。でなければ、あんな奇跡的なタイミングで私達に声をかけなかったハズだから。じゃあ、いったい何故こんな事をするのだろうか？

ドーマンが「オンミョージュツ」を使う時は、いつも『キューキューニヨリツリヨ』っていう謎の言葉を発していた。時々無言で『それっ！』みたいな風に使う事もあったけれど、大体はその言葉だけを使っていた。

なのに、今回は余計な言葉が付いていた。

なんで？なんでドーマンはそんな言葉を付けたんだろう？それも『殺めたまえ』なんてド直球な言葉まで使って…

ドーマンはボンドルドすら倒しちゃう力を持っている。だったらこんな黒い生き物、あの不思議な力で、何も言わずただ指を振るうだけで倒してしまうだろう。なのになんでわざわざ口に出す必要があったのかなあ…

なんだろう。もうちよつとで何か思いつきそうなんだけど…

「リコオ、どうしちまったんだ？急に立ち止まってよく。早くしねえと置いてくぜ」

？」

……まあいいや。また後で考えよつと。

皆には内緒で書いている日記の、ドーマンに関することが書かれたページ。そこに早く追記したいと思いつつ、皆のいる場所へ急いだ。

## 〈ドーマンの生態〉

イルふる  
村

“に来てから何度目かの夜。皆が寝静まったころ、リコはこっそりとベッドから抜け出し、宿屋の一階、さながらカフェのような造りになっている空間へやってきた。別に何かを頼むわけではない。不思議そうにこちらを見つめてくる宿屋の主人に愛想笑いを返しつつテーブルに座り、手帳を開いた。

……程なくして、主人がランタンを持ってきた。どうやらサービスらしい。優しい人だあ……

### 外見

うさんくさい。身長は私とレグを合わせても届かないぐらいある。オーゼンさんよりも大きかった。2 m 1 0 c m と言っていただけ絶対それより大きい。わたしは 1 m 3 2 c m ↓ 3 m ぐらい!? 大きい……まだ成長期だからこれからどんどん大きくなる、かも? こわい。

体重は自分でも分からないらしい。

毛は全く生えてない。うでとか足とか。ヒゲもわき毛も生えてなかった。

口ぐせは『ニンニン』、でもたまにソが混じる、ふざけてる時やはちやけてる時に多い。自分のことを『セツソウ』って言う。

背伸びをしたらすごく高い所に生えた木の実も取れる、すごい便利！

あとムキムキマツチョですつつつごく力持ち。荷物はドーマンがたくさん持つていてくれるから、食料が多く運べて助かってる。

毒も効かない。

## 性格

ドシガタ、って言うほどではない。時々ふざけたりはちやけたりするけれど、なんだかんだ言っても一緒にいると面白いし、戦闘とかでも頼りになる。

## 顔

怖い。近付いて見てもシミとかシワがまったく無い。でもそれはそれとして怖い顔。本人は『美しき肉食獣』って言った。肉食獣……どっちかといえば彫刻じゃない？

視力がすごくいい。百メートル先で私が立てた指の本数も分かる。立てた指の種類



まで分かるのはこわい。

## 髪

長い。ロウオウシダみたいに先のほうがくるくるしている。

右半分は白髪で、左半分は黒髪、ところどころ緑色が混じってる。髪の毛の先には鈴がくくり付けられていて、歩くとシヤラシヤラシヤラ〜と音が鳴る（鳴らすか鳴らさないかは気分を変えられるみたい）。先っぽをにぎってぶんぶん振り回すと楽しい。

時々髪の毛の量が減る。でも気付いた次の日には戻ってる。ふしぎ！

## 腕

太い。だいたい丸太ぐらい？孤児院で見た人体模型そっくりに筋肉が浮き出っていて、見てて面白い。肉というよりは金属みたい。力こぶを作ってもらったらもつと硬くなった。本気を出したらたぶんもつと硬くなる。

片手で固い木の実を割れる。石も割れる。岩も割れた！

小さくてあまり使いたがらなかつたけど、試しにブレイズリーブを振ってもらった。なんかミシツて音がした。たぶん力が強すぎてブレイズリーブの方が負けてるんだ！私が使うと大きいし、レグは火葬砲があるし、どうしよう？

うでだけでうで立てふせができる。指二本でもできる。逆立ちも片手でできる。指一本でもできる！気持ち悪いから逆立ちしたまま走らないでほしい。二度と。

### 胴体

私がピッタリ収まるぐらいの大きさ。レグだとちよつとはみ出る。右側だけお腹が出てるから、見ていると寒くなってくる。ちゃんとした服は着ないのかな？

ぜい肉が無い！金属で叩くといいい音が鳴る。

いい音……フライパンが一番良かった。フォークとナイフはあんまり。もちろんささらなかった。お鍋は大きすぎてダメだし、レグのうでもダメだった↓中身があるからかも？

あと●●●●は付いてた。だいたいレグのうでぐらい？たぶん遺物だと思う。レグが怖がつてたけどなんでだろう？↓自分のうでみたいに、カパツと取り外せて、自由に操れるんじゃないかと思ってたらしい。自分のうでといろいろ似てたからかな？ヤバい。ホントにそうだったらどうしよう???↓試しにドーマンに聞いてみたら爆笑された。たぶんレグの考えすぎだ！

### 足

長い。『もでる体形をめぎしておりますので!』と言ってたけど、もでるってなんだろう？

周りに誰もいない時とかに時々ドスンドスン（3回。ドスンドスン、ちよつと間を開けてまたドスン）っていう音が聞こえる。アレは自分のしわざだって本人が言ってた。一度やつてもらったけれど、スゴいのは音だけで、地面にはあまりあとが付かない。そういう儀式なんだって。

今度は儀式とか関係なく思いつきりふんでもらった……地面がヒビ割れた。見てた私達もちよつとだけ浮いた。すごいしよげきだった…

## 服

半分だけしか着ていない。ドーマンから見て右半分は、オースにいたサーカス団の制服に似てる。左側は、本人が言うには『キモノ』っていう異国の服を着くずしたもの、らしい。

そでの中やふところからシキガミを取り出せる。『キモノ』の中の肌には、直接はり付く感じで〈シキガミ〉がはってある。

手記に書いた、所々ふざけてるような文章を見て、その時の状況を思い出して笑って

しまう。

だが、今回書き加えるのはこっちじやない。リコは手記の表紙カバーを外し、内側に作ったポケットの中から紙を取り出す。

手記本体に書いたやつはいわば囿。あっちのは見られても関係ないような事しか書いてないのだ。

表紙カバーの裏に収めておけば、手記をよつぽど注意深く観察しない限りバレる事はない。それに……いや。これ以上は止めとこう。

オンミョージユツ

ドーマンが使うふしぎな力。使う時にむらさき色の光を発する。詳しい事は分からない、力場をあやつる？要けん証。力場もあやつれる。↓力場は見かけだけで、本当はもつと別のナニカをあやつってる？

できること

難しさを六段階でひようか。本人から聞いたことだから、もしかしたら本当は違うかも？

☆

☆ 火を起こす。がんばれば戦闘に使える。明かりをとまず。風を起こす。

☆☆

☆☆ 火を遠くに飛ばせる。☆よりも戦闘に使いそう。水を出せる。方角が分かる。光る

ボールを7色分生み出して、空中で回転させる。

☆☆☆

火炎放射器。空を飛ぶ。運(?)を上げる。弱いシキガミを使える。防音できる。

☆☆☆☆

火炎放射器の火力が強くなる。☆☆☆の上位ごかん。水を生み出せる。相手に空を飛ばせる(むりやり)。そこそこのいいシキガミを使える。雷を降らせる。

☆☆☆☆

相手を急に燃やせる。戦う時に役立つものはだいたいここ。瞬間移動。地面をふむやつ。相手にすごい速度で空を飛ばせる(むりやり)。強いシキガミを使える。

☆☆☆☆

水を燃やせる。この世のものとは思えないようなことができる。神秘?奇跡?ここからはもうひようかできない。すごく強いシキガミを使える??アキミツドノさんはここ??

ひようかできないオンミョージュツ?オンミョージュツじゃないものもあるかもしれない。

何も無い場所から物を取り出す。

黒い円形のうずから物を取り出せる。何かの遺物を取り出していた。

大断層。1、卵みたい、太陽玉じゃない。2、ランタン。

二回目、トイレに行こうとした時。1、大量の細い木の棒と木の板、棒には変なもよう（ベニクチナワ）のたうち回ったようなのがあった。2、白い小さなつぼ、お酒が入っている形。

アキミツドノ。さん。

黒い骨格標本みたいな人で顔には黒いシキガミがはつてある。『キモノ』みたいなそでがひらひらした黒い服を着ている。男みたいな骨格をしているからたぶん男の人。ふわふわ浮いていて、しゅん間移動もできる。オレンジが好き。果物が好き。

上昇負荷の軽減。無効。

二層の吐き気が起こらなかつた！そのてい度なんかじゃなかつた。五層の上昇負荷をもものもしない。どうやってるんだらう？似た効果の物に“カートリッジ”。

“成れ果て”を人に戻す。

ドーマン玉の中にミーティと入ってちりようする。三日で治つた。どうやって治したかは分からない。

力場でドームを作る。

今までで一番大きかつたのは前線基地のもの。ナナチやプルシユカが『中を見れないぐらい』あつい力場の壁を作り出す。本気で作つたらどうなるかは分からない。

外から見ると、中の景色がゆがんで見える。油をぬったガラスごしに中をのぞいてい  
 るような感じ。

水をゆがませるだけの力があるのに支え水は通してた↓上には作れない？壁はおわ  
 ん型だったから、多分作る必要が無かったから作ってないだけ。

### 大爆発

むらさき色の閃光が光った後、前線基地の一部がレグの火葬砲みたいに消し飛んだ。  
 力場を押し退けて爆発したらしいから、性質はレグのと同じ？

### 黒い太陽と目とアキミツさん

これが終わった後にドーマンが帰ってきたから、たぶん大技。

### 手順

支え水が壊れる。

←

水しぶきに逆らうようにドーマンが上に上がっていく。

← 黒い点がドーマンの上に行ける。

ドーマンの上に口の付いた大きな黒い太陽ができる。レグは玉だと思っただけ。  
 私やナナチたちは太陽だと思っただけ。

←



太陽の周りをシキガミの目が回り始める。速度はゆっくり。ドーマンと一緒にアキミツさんもいた↓赤い炎がふき出ていた。

←

目が止まると同時に赤黒い波みたいなのが出て、前線基地の設備をめちやくちやにしていった。ここで手順終わり。

占い

お酒と木の板、木の棒を使って占いをする。ふんいきがいつものドーマンじゃない。後ろを向いていたから顔が分からなかった。

私たちにやってくれた占いでは上に書いたものは使わない↓棒を使う方が難しい？もつとすごいことを占える？聞くのが怖くて聞けていない。

シキガミ

ドーマンが使う遺物みたいなもの。作れるらしい。作ってる所を見たことが無いから分からない。

材料は紙とインク。オンミョージユツを使いながら作る。

できること

ふよふよ浮く。しゅん間移動（予め目的地にひとつ置いておかなければならない）。

雷を降らせる。獣除け。五層で使った温かくなるやつ。

勢いよく飛ばして敵にさす↓三つに分れつして飛んでいく。さきった所で黒い爆発が起こる。ものすごい威力！

しゅん間移動↓もし上方方向に転移したら上昇負荷がかかるのかな？かからないって言ってた。どうやって???↓似た効果の物に“カートリッジ”。

まとめ

たぶんドーマンは人間じゃない。自分では人間だって言ってるけれど、人間よりもレグやボンドルドに近い。新種の人型原生生物？

最後まで読み返して、あと所々書き加えたりした後、私は全部を元通りに収めて、部屋に戻った。

もちろんランタンのお礼は言っておいたよ！

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・57

日の光の全く届かぬほど奥まで進んでまいりました。

暗闇にはとうの昔に慣れまして、闇の中であつても昼間のように……とは流石にいきませぬが、周囲には村の子らもおりますし、その目の輝きを辿つて行けば困る事など何一つありませんでした。

ただ一つ悩み事を挙げるとするならば、饑えたような吐瀉物の臭いでしょうか。名は分かりませぬが、紫色で、単眼、女型の成れ果てでございます。

……はア。吐くくらいなら上で待つておれば良かったのに。何故ついて来られたのでしょうかねエ？まあ事前にそう伝えたというのに無理やり付いて来たのですから己の責任でしょう……それでも嘔吐する際の苦しい表情と声には価値があります。

そのような事を続けること数分。ふと暗闇が和らいだかと思うと、少しばかり小高い丘の上に彼女がいるのが見えました。

他の方々もお気づきになられたのでしよう、皆様めいめい息を呑んだり、固まったりと、多種多様な反応をしております。

唯一何も感情も見せぬのはワズキャン殿ただ一人でございます。まアそれもそのハズ。ワズキャン殿は定期的にこの場を訪れていたようですし、特段驚くことなど無いのでしよう。

闇の中、ゆつくりと顔を上げられます。

切られる事なく伸び続けた髪の毛が房となり、はらりはらりと顔前を掠め、そしてその相貌が明らかになりました。そう！

この方こそ三賢の最後の一人、名を――

「ふへえ……あのうそんなにもつたいぶられると私としてもすぐくやりにくいっていうか、そのう……」

「……………」

「あうう……つ、続きをどうぞっ……」

「あ、いえ。なんかもう良いです。それではヴェロエルコ殿。とつとこの狭苦しい洞穴を出しましょうぞ」

「——あ…っ！ああ！せつかくかつこいい説明があつたのに！」

「ソソソソソ…」

「なにになに…？なんで二人とも落ち込んでるの？僕としてはそろそろここから出たいんだけど……ほら、子どもたちの目もあるし？」

「う……うっさい。ワズキヤンはちよつと黙ってて」

「——うええ？なんでさ？」

「結局みんな落ち込んでるじゃんか…」



問題は引つ張るヤツの力不足なのだ。

『ふっ。よっ……あわわわ落ちる落ちる落ちる！』

「ちよっパッコヤン!?危ない」

あ。ぶえロエルコはこの娘が背負ってくれているんだが…

「プルシユカー。オメーいつの間にソイツの名前を？」

「ん?どうにかして会話が出来ないか試してた時に、向こうから教えてくれたんだ!」

『ソソソ……なるほどなるほど。貴女がパッコヤン殿でしたか』

『え、ウソ。私何で認知されてるの!?!』

『ええまあ。結構な有名人ですの?』

「ドーマンん？喋れるんだったら、そろそろ、歩いて、ほしいんだけど!？」

「ソソソソソ♡もう少しだけこのままで…」

階段から突き落とした。



忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・58

ワズキャンの家に着くと、ちようどベラフが家から出ようとしている所だった。なんでも、あまりに帰ってくるのが遅いから、迎えに行こうか悩んでいたらしい。

中に入るとお茶が入れられていて（なんと花の蜜入りらしい！）、ベラフの女子力の高さにみんなが驚いているようだった。ふへへ、そうでしょうしょうでしょう。ベラフの家事は隊の中でも頭一つ抜けて高かったからね！

「んのおおお……甘い！甘い!?甘くないコレ？」

「これが普通なのだ」

っていう二人のやり取りを見て、思わず信じられない物を見るような目をしてしまっ

た。村から送られてくる信号でどういうやり取りをしているのかは知っていたけれど、いざ目の当たりにするとやっぱり信じられない。だって、

「あ、あのワズキヤンがんのおおつて！ふへえこれヤバい面白すぎる！」

「そりや僕だつて150年も生きていれば丸くもなるさ」

「でもその割には、昔みたいに見えるんでしょ？」

「——まあねえ……」

「ンンンッ。皆様？そろそろ本題を……」

私がワズキヤンをなじっていると、ドーマン君が急かしてくる。どうやら内輪で盛り上がりすぎたみたいだ。

「うん、大まかなことは君たちの“信号”を見ていたから分かるの。でもね？いったい

「どうやって私たちをここから出すつもりなの？」

「フフフフ！どのようになどと！それは勿論拙僧の呪いを使うてですね——」

「取り込むの？」

「——は？」

「たった五文字。でもその言葉はドーマン君に衝撃を与えるのに十分な力を持っていた。」

「ふへへ。やつぱり……私ね、ずっとドーマン君のことが恐ろしかったの。だからずっと“信号”を見てた……頭の中の深い所、魂の信号を」

「私は少なくとも、貴方がこの村に来てから今までに考えたことを全て知ってるよ。だからね？」

「取引、しない？」

何の色も浮かべないその顔に、最高の一撃を。

…ふへへへへ。〈三賢〉だけでどこまでやれるかなあ…

何たる屈辱！何たる醜態!!

儂が！平安の世を代表する英霊であり、三柱の神をも隸するこの儂が！このような小娘の口車に乗せられておるのですから！

穴の開いた記憶が恨めしい。なぜこれ程までに大事なことを忘れていたというのです？

ああ、いかぬ、いかぬ。平常を保たねば…

「私はね。ついさつきまであの子の、この村の一部だった」

「………今度は何です？」

「村の役割はいろいろあるけど、最も重要な役割は、その人の“願い”をつまびらかに明かすことなんだ。その人が一番欲しいものが分からないと、村はそれを作ることができないから」

「——ま、まさか」

「それで、ね？ 私たちがあなたにやってほしい事が二つあるんだ」

「…ほう？ 言うてみなされ」

「一つは、私たちが外に出ても死なないようにしてほしい。その為に必要な行為を惜しまないでほしい」

「それで終いで？」

「いいえ、今ので一つ。二つ目は」

「  
“<sup>イルぶる</sup>村”を……イルミューイを、殺してほしいんだ」

彼の顔に、喜色が浮かんだ。

忘れもしませぬ。あれは拙僧が成れ果ての姫君と戯れて  
いたころ・・・59

ヴェロエルコ殿から提案された村殺し。拙僧はそこに勝機を見出しました。この女  
はたった今、自らの手で墓穴を掘ったのです。

この茶に混ぜられた花の蜜ではありませぬが、まるで甘露の如き、逃れ得ぬ蠱惑的な  
言葉のみを紡いでみせましょう。

「……皆様の願いはよく分かりましたとも。ええ」

「ですがヴェロエルコ殿、貴女はそれで良いのですか？」

貴女は本当に、心の底から、この村を殺すことを望んでいるのですか？

「……うん。きつとそれが、あの子にとって一番いい事だから」

「——んッフフ！ンッフフフフハハハハ!!それには『実現可能な範囲で』という小書きが付くでしょう!?!?そうではないのです。ないのですよ」

「拙僧は忌憚無き望みをこそ叶えたい!ですから、貴女の心の奥底にある真なる願いをどうか拙僧にお教えいただきたく!」

『疾くこの者を隸し給え。急急如律令』

「わたしの、ねがい…」

「おおっ—とここからは僕が務めよう。どうやらヴェコは冷静さを欠いてるようだ……」



ほら。落ち着くまでお茶でも飲んでて？」

うーん困ったなあ、僕の呼びかけにも全く反応しない。完全に自分の世界に入っちゃってるよ。

ここまでは凡そ筋書き通りに進んでたんだけど、ドーマン君のあの言葉。アレがダメだった。あんな事言われちゃったら流石のヴェゴでもブレちゃうじゃないのさ！せっかく事前に協力してくれるよう頼み込んだのに…

でも、僕らが交渉を有利に進める為には君が必要なんだよ。ヴェゴ。君には何が何でもこつちについてもらわないと、僕らとしても困るんだよねー

一応、横で黙って聞いてくれてる子<sup>隊員</sup>ども達にも一手打っておくかな？

「……まあ彼女の願いはだいたい察しが着くけれど、問題は達成した後さ。そうでしょ？」

「ええ。そこはまあ拙僧にお任せあれとしか…」

「そこだよ」

「……………ん？はて…」

「ずっと疑問だったんだ。キミたちはあまりに上手く行き過ぎてる」

「みんなの着てる装備、どれもこれも統一感がないでしょ？これって隊に加わったタイミングがバラバラだからじゃないかな？だとすれば君たちは大穴に、徐々に数を増やしながら降りてきた事になる！うん！すごい事だと思うよ？本当さ！」

「普通隊員っていうのは減っていくものだ。普通はね？その理由はいくつかあるけれど、一番の問題はやっぱり食料だろう。それぞれの腹を満たすだけの食料はどうしたって必要になる。でも旅の途中で口の数が減っていくから、強行軍でもなんとか耐えられる…」

「なのに君たちの隊はどうだい？口数は逆に増えて、それなのに有り余る程の食料があるじゃないか！なんらかの工夫があったとしても出来すぎだ。やりようは無いわけじゃないが、子どもがするにはキツすぎる」

「ならそれを解決できるのは君しかない訳だよ。ドーマン」

「確かにそうですが……先程からつらつらと、何を言わんとしておるのです?」

「……ドーマン、君はいつたい何をしようとしているんだい?この大穴に、何を求めてやって来たんだい?」

「それはモチロン!少年少女らの織り成す冒険活劇を、一番の特等席から鑑賞したかったからですとも!」

「あははーウケるー冗談でしょー?君はそういう人種じゃ——」

「いや。ワズキャン」

「——ん?どうしたんだいヴエコー。急に横から」

「ドーマン君はホントにそれを望んでたよ」

「……えつ。ちよつ。ちよつとヴエコ?」

「ドーマン君の願い……私が見た中で一番強い願いじゃなかったけど、確かにドーマン君の願いには『鑑賞』があつたの」

「…へーそう。そりやスゴい」

「これは……うん。ヤバイね!!普通こんな土壇場で裏切るかいヴェコー!?

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズキヤン殿と腹の探り合いをしていたころ・・・60

ワズキヤン殿はよほど強いショックを受けたのでしよう。少しばかり硬直しておりましたが、何とか再起動為されたようで、またその口を動かし始めます。

「ふーん……そう。そうかー……いやあ。正直お手上げだよ。僕らが差し出せるものなんてそんなに無いし、何より君の最も深い所にある『願い』も、どうやら叶えることはできなさそうだ……少なくともこの村ではね」

「『村』が叶えることのできる願いは読み取ることのできる物のみだ。村と同化していたヴェロエルコが読めなかった時点で僕たちにはどうしようもない。だから、代わりにと言っては何だけれども」

「君の望む『鑑賞』、僕たちが手助けしてあげよう」

「その願望への助力。それを対価として、僕は君に先程の二つの願いを叶えてもらいた

「い」

「この数瞬でそこまで思考を巡らせるとは……やはり〈三賢〉、恐ろしき者共ですなア。

「ですがワズキャン殿？その程度の対価で拙僧らが動くと思われておるのでしたら、それは見当違いというモノですぞ？」

「おやあ。まだ望むことがあるのかい？まいったねえ……まあ言うだけ言ってみてよ。できる限りの事はしてみよう」

「ンン♡真ですか！では遠慮なく……」

「あ、あんまりトンデモない要求をするのは止めてくれると嬉しいんだけどー……？」

「ああ！いえいえ、いえいえいえ。どうかそう怯えなさるな！きつと皆様にとつてもそ

う悪くない。〃オネガイ〃にございますれば！」

「どうか！どうか全てが終わった後、拙僧らの探掘隊に加わっていただきたい！」

「ドーマン!?!ダメだよ！」

私だってまだ子供だけど、それでもこの隊を率いる隊長なのよ？だからこの場に隊のリーダーとして座って話を聞いてたの。それに、よっぽどの事が無い限りはドーマンに任せようと思ってた。

でもそれはダメでしょ!?

「ソフフフフフフ！リコ殿。いったい何がご不満なのですかア？」

「だ、だってこの人たち、ドーマンに毒を盛ったんだよ!? たまたまドーマンが大丈夫だったから良かったけれど、もしレグ……いやナナチとかプルシユカたちが毒を盛られたりしたら、きつとタダじゃ済まない!」

「ええ、そうですよねエ」

「それに、それに……だって……」

「みんなも大事な仲間だけど、ドーマンも一つと大事な仲間なのよ? それなのに仲間を傷つける人を隊に入れるなんて! ダメだめだめ!! ぜっったいダメなんだから!」

私が必死になってドーマンに言うのと、ドーマンは少し驚いた顔をしていた。さつきまで浮かべていた胡散臭い笑みも崩れて、少しぽかんとしているようだった。

でもその（ドーマンにしては）珍しい顔も少し経つと消えてしまい、後にはさつきよりも少し真面目な表情があった。

「——と、まア。我らが隊長殿はこのように仰っておりますので? 少しばかり要求を



吊り上げさせていただきましょうか……ワズキャン殿。何か異議があたりで？」

「……………いや。ないよ」

「大変宜しい！でしたらそうですナア……手始めに、そう。この交渉の後より、貴方方の率いるガンジャ隊を仮称ヘリコ隊の隷下どうやら「支配下に置く」を難しく言ってるみたいぞ！何で難しく言ってるんだらうね？に置かせていただきましょうか」

「——そんなことをしていったい何をするつもりなんだい？」

「ええ。先ず手始めに隊の皆様の身体強化をさせていただこうかと」

「は？」

「その後には目ぼしい遺物の蒐集、食料などの物資の徴収など——」

「ちよつと待つて!?ドーマン、キミは、きみは……」

「あとはそうですな。〈三賢〉制度を撤廃し、現三賢の御三方を拙僧の麾下に置かせていただく……まあ、この辺りが落とし所でしょうかねえ……」

私も今まで見たことがないぐらいよくしゃべるドーマンに圧倒されたのか、ワズキャンさんが固まってしまった。横でジッと聞いていたベラフさんもどうやら戸惑いを隠せない様子だ。

たぶんドーマンの言っていた内容がよっぽどショックだったんだろうなあ。

あ。でも。聞き取れたものの中には、遺物の収集とか身体強化とかいろんな事があつたけれど、そんなに驚くようなことだったかな……

「そ、そんなことを受け入れちゃったら、僕たちが僕たちじゃなくなっちゃうじゃないか!!」

「ハア? いったいその何処が問題なのですか? 拙僧とてわざわざ手間をかけて、外界の畜生共に上等な餌をくれてやれるほど広い度量は持ち合わせておらぬのですよ。でしたらそう。いつそのこと隸下とした方が手っ取り早い!」

「フフフフフフ……自らの尊厳だとか、自由意志だとか。そのようなこの大穴においてには糞の役にも立たぬような代物を焚べてやるだけで！この奈落を穿つ力を得られるならば！貴方方に如何様な問題がございましょうや？」

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズキャン殿と腹の探り  
合いをしていたころ・・・61

さらに激しく詰め寄った拙僧にいよいよ根を上げたのか、ワズキャン殿は遂に折れま  
して、此方の要求を快く受け入れて下さいました。

何やら項垂れるワズキャン殿を置いてそそくさと宿に戻った拙僧は、次の日、彼を引  
き連れて道具屋を訪ねました。

前回来た時も荒れ放題だった店内は更にごちゃごちゃとし、ホコリやら何やらが充満  
しておりまして、皆様方も思わず目が痒くなってしまうほどではありましたが、それだ  
け熱心に探してくれたおかげですか？他と比べても汚れの少ない布の上には、あの  
〈千人楔〉が四つも置かれておりました。

『ンンンン！まさかこれほど数があつたとは…』

『へへ、へへへへ……あのー旦那？旦那がもし欲しいってんなら他にもいい遺物を用  
意出来ますがねえ。ど、どうです？』

『ンン♡良いですなア！店主殿！それら全てを買い上げましょう！』

『へへアツ!?そ、そりや有り難い！どうかちよーつと待つててくたせえよ!』

「……ドーマン。キミ他人の財布を持つと気が大きくなつちやうタイプかい？」

「おおーよくご存じで」

「ああもう……はあ。まあいいさ。幸い手持ちには余裕があるしねー」

事実上金が出る蛇口と化したワズキヤン殿をふんだんに使わせていただき、様々な遺物を買って込んで。暫く村を回った後に宿へと戻り「施術」の準備を始めます。

皆様が久方ぶりの入浴——といっても村には湯船などは存在しませんので、温か

い湯で濡らした布を使い、身体を拭うだけですが——を済ませた頃。部屋の戸を叩く音が一つありました。

「どうぞお入りください！」

「お、おじやましまーす…」

何時ものハツラツとした様子は何処へやら。何とも控えめで可愛らしい挨拶と共に入室してきましたのは、何を隠そうリコ殿でございます。

リコ殿やナナチ殿には事前に、それとなく明かしてはおりましたが、そうは言ってもやはり緊張しておられるご様子。紅葉を散らしたかの様なご尊顔で！ンツフフフフ！何とも愛らしいことですねア！

んん。ですが…ここは一つ按摩でもしてから始めましょうかねエ。やらぬよりはマシでしょうし、多少は苦痛も紛れるでしょうから。

「それではリコ殿？そこに布を敷いておりますので、仰向けにおなり下さいな」

「——うええ!?!いくらなんでも早くない!?!」

「ンンン?はて?早いなどと…」

「(こつこつこつ)、こういうのはもつと段階を踏んでからとかちやんとした場所でいい景色を見ながらとか美味しい料理を食べながらとかさ!?!」

「……………り、リコ殿?拙僧、リコ殿が何か重大なる勘違いをしておられるような気がしてならぬのですが…」

「——え?」

按摩なんぞすつ飛ばしてとつと千人楔をぶつ刺させていただきましたとも。ええ。しかしまあこれが良い声を上げなさる!艶のある良き悲鳴でしたぞ、隊長殿?」

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズキャン殿と腹の探り  
合いをしていたころ・・・62

「うきやあ!?あたたたた……頭から突っ込んじやったよ……」

「ソソソソソ!ですが先程よりかは幾分マシになつておりますぞ?」

「うう……それならいいんだけど……」

“施術”の疲れから、まるで電源を切るように眠つてしまわれたので、治癒の呪いを掛けてました。翌朝、拙僧はすっかり調子を取り戻したりコ殿と共に身体を動かす訓練をしております。

何を今更と皆様は思われるかもしれませぬが……〈千人楔〉ですぞ? たった一刺しで無双の怪力を得られる遺物を四つも刺し、まだ使用してから半日も経っていない子供が、そのあまりの力に振り回されるのも至極当然の事でしょう?



「ふべえ！」

「んっふ…」

「っ、あー！今笑った！今私の事笑ったーっ！」

「い、いえいえ！そのようなことはありませんとも！そも、拙僧がリコ殿を噛った事が今まで一度でもありましたかな？」

「……うー」

「分かっていただけたならば良いのです。ソソソソソ…」

さて、その日の夜にはナナチ殿とミーティ殿に。

「にぎやーツ!!」

「あいたたたた…」

「んフフ！辛抱なされ！」

その次の日はプルシユカ殿に。

「うっぐ…コレ、結構ツライわね…」

「えーつとね、初めは痛いけど慣れるとそんなに感じなくなるよ！すっごいお腹が空くようになるけど…」

「——それってホントか？」

それぞれ施術を致しまして、後はこの遺物の齎す飢餓感に慣れていただければ良い、という所まで来しました。

しかし幼子の身体とは斯くも柔軟性の高いモノでありましたか！力の制御は既にこなしっておられる……まだ一週間も経っておらんですぞ？「上」の拙僧でさえ一月は掛かったというのに！これでは拙僧の面目が丸潰れではありませんか！

毎度の如く、倒れるようにして眠ってしまったプルシユカ殿の介抱をリコ殿に任せて、宿のバルコニーにて少し夜風に当たっております。

いかに奈落の底と言えども、日も差せば夜にもなります。

そして夜であれば周りの目の心配も……いえ。注意はしておりますが、日中ほど気張らなくとも良くなりますれば。

「外」に派遣している式神に念話を飛ばします。二号？二号？聞こえておりますか？

『ンン！感度良好ですぞ！何用ですか？』

「ええ、そろそろファプタ殿が必要になるやも知れませぬ。ゆめ傷付けぬよう。貴方とガブールン殿で守るのですよ」

『まったく、何を言うかと思えばそのような……言われずとも理解しております』

「よろしい。それで？」

『……何です？』

『勿論あらたな遺物の事ですとも！いやあ少々予想外な事が起こりましたな？  
想定していた以上の量の遺物を手に入れることが出来そうなのです』

『ほオ!!それは素晴らしい事ですなア!で、その遺物はいったいどの様な代物なので  
しょう?』

『ええ。先ず——』

後より拙僧に気付いて、聞き耳を立てておる間諜に、一寸たりとも情報を漏らさぬよう遮音の結界を張りつつ、夜は更けていくのでした。

忘れもしませぬ。あれは拙僧がワズキヤン殿と腹の探り合いをしていたころ・・・63

力の制御は簡単にこなしてみせた皆様方でしたが、どうやら空腹には耐えかねた様でございました、毎食のオカズを増やすだけでは飽き足らず、さらに大量の付け合せ（パンのようなモノ）まで食す有様でございます。

これではいくら食料の備蓄があつても足りませぬ…！何としてでもこの飢餓感に慣れて貰わねば我々お先真つ暗ですぞ!?

「——という事ですので。折角ですので皆様にも直接聞いてみようか、などと…」

と、まあ、そのような事を一生懸命おにぎりを頬張るナナチ殿に訊ねてみたワケですが…

「ムリじゃね？」

「ソソソ…」

即答ですか。そうですね。

「んなあ、そんな顔すんなよ……そうだなあ。といつてもなあ。へ千人楔の構造上、食事量の増加は避けられねえモンだろ？」

「……ハア」

「オメエさ……いいか？へ千人楔ってのは『使うとめちやくちや腹が減る』代わりに『スゲー力が手に入る』遺物なワケだ」

「でもリコ達の話を聞く限りじゃあ、オーゼンってヤツはコイツを百個も刺してる。オイラたちでも四本刺してこの有様なのにだぜ？多分そこまで刺せてんのは“慣れ”もあるんだろうが……」

「……とにかくだ。この状態を維持しようってんなら、消耗覚悟で大量に飯を用意するか無エと思うぜ。オイラとしてもこの空腹にはちよつと耐えづらいしなー」

「ですがナナチ殿。経路的な観点から見ても、今の刺し方が最も安定しておるのです……」  
「んあゝ……：毎度思うんだけどよドーマン。オメーが時々言ってる『ケイロ』とか『キコー』って何なんだよ？医学用語っぽい……：オイラボンドルドの所で色々手伝いとかしてたけど、そんな単語聞いた事無いぜ？」

「ソフフー！それは秘密というコトで……」

「なんだそりゃ」

式神二号が見つけた遺跡、何やら貴重な遺物が大量に保管されていたようでした。その一つが〈千人楔〉でした。

拙僧も式神越しに確認してみたのですが、遺跡……いえ。遺跡というよりかは農園の様な造りでしたなア。何だったのでしょうか、あれ。

残念ながら人間はいませんでしたが、ここの管理を任されていたであろう干渉機が、

何とも毒々しい見た目をした豆の如き植物を栽培しておりましたので、適当に斃しておきました。

しかしこの豆の何とも不思議なこと！そこらの獣に食わせてみたところ、何と口から火を吹くようになりまして……

模様の違う別の物を食わせてやれば、今度はみるみるうちに緑色の液体に変貌し、地面のシミとなつてしまいました。

さて。そんな物騒な豆が拙僧のポケットの中にぎつしり詰め込まれている訳ですが……

「——んんっ!? ドーマンドーマン! この緑色のタレすごい美味しい!」

「どれどれ……? む! 本当だ! 大自然の偉大さを感じさせるような風味……すごいなドーマン、キミが作ったのか?」

「ええ。ええ……まあ……」



「ん、どうしたんだ？」

先程の地面のシミとなりし憐れな原生生物、試しに舐めてみましたところ、あのオースの街で食した麻婆豆腐モドキに優るとも劣らぬ素晴らしい味が：

と、言うわけで。これなるは先程収穫せし豆を、六層を我が物顔で闊歩する獣共に、無差別に、手当たり次第！片端から捕らえた後！無理やり食わせた成れの果て！

斯様なものを皆様にお出しするのは、さすがの拙僧と言えど些か気が引けますが……  
まア美味ければ良いのですよ。美味ければ。

「んなあゝゝ…:…♡」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が〃村〃の守護神だったころ・・・64

緑色の液体を用いた料理で皆様方を餌付け……失礼。食事を振る舞っておりましたら、ふとりコ殿が口を開かれます。

「そういえばさドーマン、この緑色のやつを食べ始めてから、なんだか身体が軽いんだけど……あと、〈千人楔〉のすっごいお腹空くやつも楽になってるし……」

「——ほオ。ああ、なるほどなるほど。そういう効果でありましたかコレ」

「えっ、ドーマン？もしかしてこれって……遺物？」

「ンンン……恐らくは？」

「っ！ねえねえどんな遺物なの！？見せて見せて〜！」

「ンンンッ！ちよつ、暫しお待ち下され！此方にも準備というものが——」

「分かった!!」

「き、切り替えが早いご様子で…」

リコ殿が「どうしても」、と仰いますので、この村より出で、今となつては懐かしきあの村を見下ろすことの出来る断崖まで参りました。

どうやらこの辺りは何ぞの深界生物の棲家であるらしく、獣除けの術を使用しておらねば引つ切り無しに我々を攻撃しに来るのです。

この遺物を使用するには丁度いい場所かと♡

「うわあお……ドーマンの獣除け、やっぱりいつ見てもデタラメな効果してるねく……」

「ソフソフソフ！お褒めいただき恐悦至極！」

「キョーエツシゴク？」

「……『嬉しい』、という事ですよ。では嬉しい序でにこの遺物、使ってみましょうか」

獣除けを解除しますと、境界の外から睨め付けるような眼でこちらを見ていた原生生物が、一斉に飛び掛かってまいります。ですが……

何と緩慢な動作であろうか。

『『急々如律令』！』

瞬間、彼奴らは何か、目に見えぬ巨大な手に押しつけられたかのように地面にメリ込みました。

まあ拙僧の術のせいなのですが。飛ぶ為の翼を持ちながら、宛ら地にうちあげられた

魚のようにビクンビクンと跳ねておる様は、何とも浅ましく滑稽でございます。

拙僧の背にて感嘆の声を上げておられるリコ殿に、僅かに微笑ましさを覚えつつ、だらりと開いた口の中に豆を一粒放り込みました。

すると直ちに変化が始まります。身体のいたる所から薄緑色の水滴が滲み出て来たとと思えば、徐々に数を増やしていき、終いには身体全体を覆い尽くしてしまいました。

身体の形すら保てなくなり、少しずつ少しずつ 輪郭が無くなつてゆくのです。

……そして、ものの数秒程で、この翼竜は粘液の集合体と成り果ててしまいました。

「わあ……！」

「ンフフフフ！如何でしたかな？」

「なんて言うか……スゴかったね！」

「ええ、ええ。スゴかったですなア。では、この粘液を採取して終いといたしましたよう。そろそろ皆様が心配しておられる頃でしょうから——失礼」

「え？」

失礼。そう言った後、ドーマンはすつと黙り込んでしまった。

前に立ってみてもうんともすんとも言わない……何があつたんだろう？

一分ぐらい経ったあたりかな？急にドーマンが動き始めて、

「申し訳ありませんぬ、リコ殿。少々待たせてしまいましたな。では帰るとしましょう…」

そう言うドーマンは、何だか何時もより焦っているような感じがしたけれど、ドーマンにそれを聞いても、するりと躲されるだけで、何も教えてくれなかった。

そのままドーマンのジユツと一緒に「村」に帰った。

リコ殿を転移させるに至った最たる原因は、式神『二号』より届いた一本の念話にございます。

『本体！本体！！これよりそちらにフアプタ殿を転移させますぞ！』

『——は？』

忘れもしませぬ。あれは拙僧が〓村〓の守護神だった  
ころ・・・65

『は？』

『何を呆けておるのです！急がねばもう時間が——ッ、追いつかれたか！』

その並々ならぬ慌てぶりは、自分の事ながらまるで信じられませんでした。思わず聞  
き返して、

『一体何故そのような状況になったので？』

『地雷を踏んだのです。まさか深界六層に斯様なものがあるなどと思わずッ！ぬオオッ  
！』





がらミサイルの様な速度で撃ち出すものですから、お荷物姫君を抱えたままでは戦闘にすらなりません。

生身の人間だというのに……どれ程の筋力があればこんな芸当が？

『ンンンン……分かりました。ではファプタ殿を早く此方に』

『少々お待ちを………今ッ！』

〈急々如律令〉！

眼前に迫る巨石と、大質量の物体に磨り潰される感覚を最後に、式神“二号”との一切の感覚共有が絶たれました。

「うゝうゝうゝ……なんすすかなんすすか。何でこんな事になってるすすか……」

『ファプタ、ファプタよ。大事無いか』

「大事しかねーそすうー!!」

僥倖僥倖！転移は無事成功しました！お二人ともご無事で何よりですねエ！ですが

：

…何です、アレ？

あのように巨大な熊の如き風貌をした者キャラクターなど拙僧知りませぬぞ？

寸胴の様な体型ではありましたが、胸部に細やかなれど膨らみを有しておりましたので、恐らく性別は女。

もう一人女が肩にも乗っておりましたがアレは何なのでしょう？

何もかもが全く分かりませぬ。これが、これこそが全く未知の世界……いえ、通常はこれが普通なのですが。

(……一度大規模な未来視を行う必要がありますな)

「おいデカ男！オメーも何か言えそす！」

「——ソソソ。どうかお静かに……」

（取り敢えず一旦〓村〓に戻りますかねエ……こうも騒がしくは考えを纏めることなど不可能に——）

「二度は言わぬが？」

「……ええ、承知しておりますとも」

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村”の守護神だったころ……66

怒りに顔を歪ませるファプタ殿をなんとか宥めた拙僧は、あれやこれやと考える前に一度拠点に戻ろうと“村”まで転移しておりました。

ファプタ殿とガブールン殿は今日の疲れを癒やすべく寢床に直帰され、それを見送った後。拙僧は頭を抱えております。

今後の行動を決めるためにも未来視をする必要がある訳ですが、その未来視も無論タダとは行きませぬ。準備が必要ですので。さてさてその為には……ンンンン。

上等な贄が必要なのですが……

「ドーマン？戻っていたのか！どこを探してもいないから何かあったのかと——どうしたんだ？そんな難しい顔をして」

「これはレグ殿……いえいえお気になさらず」

「いやあ。その顔で『気にしないで』と言うのは無理があるぞ…」

なんと。それ程までに酷い顔でしたかねえ？いつも通りの表情なはずなのですが……何でもないと少しばかり圧を加えて微笑みかけておきますと、レグ殿が、やはり心配そうにこちらを見ておられます。

「ドーマン、本当に大丈夫なのか？何か悩みがあるなら、ボクで良ければ話してくれないだろうか？」

「……ンン。では他言無用でお願い致しますぞ？」

「分かった。絶対に誰にも話さないと誓おう」

そして、拙僧はレグ殿に事の顛末を話すのでした。

「——外でそんなことが……それで、ドーマンはこれからどうするんだ？」

「それが問題なのですよ。レグ殿」

「問題？」

「はい。今の所……何と申せば良いのやら。そう。つまりは、服を買いに行くための服が無い”のです。拙僧が今後の行動を決めるにしてもそれはそれで問題が多々ありましてなア……」

「服を買いに行くための服……？すまない、どういう意味だろうか？」

「ソツ。ンン……」

正直あまりの言い草に我ながら呆れてしまっておりませぬ。

しかし、まあ、事実ですしなア。

今の拙僧では、遙か未来を視る事が出来ぬのです。上等な贄さえあれば未来を視る事は可能で、その贄の目星も付いております。ただそれをしてしまえば一人が死んでしまい、延いては、拙僧の目標である『ただ綺麗なだけの物語を見る』も達成不可能となりますすれば：

嗚呼笑止！何たる無様か！斯様な精神状態では大規模な未来視なんぞ夢のまた夢！！

拙僧であれば、かのアルターエゴ・蘆屋道満であればこのように悩まずとも、こう、スパツと、その場の空気で決められたのでしょうか…

……ああ。いけませぬいけませぬ。この様では何もできぬでしょう。一旦頭を冷やして……久々に睡眠でも取りましようかねエ…

どうあれ拙僧の式神を殺した者共はこの〰村〰までは来れませぬからな。時間はまだあります。ええ。きっとそうでしょう。

宿に帰るドーマンを見送りながら、ボクは慣れない考え事をしていた。

(さつきは〰誰にも話さない〰と言ったが……こんなのボク一人で抱えられるような問題じゃないぞ!!)



ドーマンが話してくれた外の状況は、リコ達の反応がまるで予想できないほど度し難いものだった。

どうやらボクや、この「村」の住民とは全く別の探掘家がいたらしく、ドーマンはその人物たちと交戦したそうだ。

撃退はできたらしいが手傷を負ったためしばらく休みたいらしい。

そう。手傷を負った、らしい。

オーゼン不勳と互角に戦い、ボンドルド黎明を打ち倒し、ファプタさえ傷一つ付けずに捕縛してみせたドーマンが、手傷を負ったのだ。

(今までの旅も決して油断していた訳じゃない。どの冒険も命がけで——あれ?)

(——ボクらって、ドーマンに頼りすぎているかい?)

そこまで考えて思わず冷や汗が流れる。お世辞にもボクらは戦力として数えることが出来ない。少々特殊な能力——力場を読めたり、知識が豊富だったり、光線が撃てる——があるだけの、ただの子供だ。

彼は——ドーマンは、そんなお荷物な子供を五人も、忙しなく介護しながら降りて

きたのか…？今更ではあるがその事実には戦慄する。

そうだ。そもそもがおかしい。なぜドーマンはこんなにもボクたちを助けてくれるんだ？ボクたちはドーマンに、何も返せてなどいないというのに。

…ボクはなぜ、今更になつて、こんな当たり前の事に気づいたんだ？なぜ今まで、こんな当たり前の事に気が付かなかつたんだ？こんな単純な事、気付く事の出来るタイミングはいくらでもあつたはずだ。例えば…：例えば？

いつだ？

(まずい…。何かが、まずい…)

これ以上は考えてはいけない。僕が踏み込んでいい領域じゃない。誰か、誰か別の人、そう、リコに…

ああダメだ。ドーマンと約束してしまった。外で起こったことを、他の誰にも話さないと約束してしまった！

「どうすればいい…：ボクは…」

皆で一緒に考えたいという想いと、約束を破ってはならないという理性が頭の中でせめぎあつてぐちやぐちやだ。

ボクは暫くここに立ち尽くして、それで考え付いた。

ボクは——

・忘れもしませぬ。あれは拙僧が〃村〃の守護神だったころ・・・67

リコはあの商店街で品物を物色していたから、少し歩き回ればすぐに見つかった。

考えは上手く纏まらず、頭の中で紐のように絡まりあつたままだ。でも、ちゃんとした言葉に整える余裕はない。ボクの考え——考え過ぎであつて欲しいが——が正しければ、ドーマンが眠っているこの瞬間以外にチャンスはない。夜でもいいんだがドーマンはいつも……——ドーマンはいつ眠っている？また謎が一つ増えた。

(あ…)

思考の、記憶の隅々にヒビが入っていく。美しい冒険の日々に影が差していく。思わず胃の中の物を吐き出したい衝動に駆られるが、ダメだ。それも含めて伝えなければ……伝えるべき事が多すぎる。でも全部を正確に伝えることはできない。今までの人生

の中でこれ程頭を働かせた事があつただらうか。ワズキャンのあの言葉、ファプタの教えてくれた「村」の成り立ち。なるほど。無駄な事なんて一つもない。全部が線で繋がっていく感覚がする。

「……度し難い。度し難いな」

リコはやはり楽しそうに笑っている。無造作に並べられている旧式探窟家装備の山の中から遺物を掘り出して、その機構の複雑さに目を輝かせている。

「リコ」

「……うん？あ、レグ！見て見て！この遺物すつごいんだよ！ほらここ——」

「リコ！今はそれどころじゃないんだ！」

「……え？」

ボクができるのは、リコたちにドーマンという存在を考え直してもらおう事。それだけだ。それ以上の事をしてしまえば、きつとすぐ消される。

「リコ。考えてみてくれ——」

「ドーマンが最後に眠ったのはいつだ？」

「えーつとね……うーん？ いつだったっけ」

「そうだ。いくらドーマンが強いといっても流石におか——」

「でも、別にねえ？」

「——は？」

知りうる限りでただの一度も眠ってない人間。そんな人間がいるものか。そんなボ

クの不審を、リコは一蹴した。

「だってドーマンだし……そんな驚くことかなあ」

「そ、そ、そんなこと、だっておかしいだろう!? ドーマンは『奈落の至宝』でもなんでもないただの人間で、それなのに眠らないなんて!」

「うくん。私はてつきりオンミョージュツでどうにかしてるんだと思ってただけど  
「さ」

ちがう。ちがうちがうちがう! 何故だ! 何故リコはこうもドーマンを疑わないんだ!? 考えたくも無い予感が頭をよぎる。まさかりコは既に、ドーマンに――

「――すまない。ボクの勘違いかもしれない」

「え? うん。そりゃいいけどさ……」

結局、ボクはリコを説得できなかった。あの状態のリコをどうにかできるとは思えなかったんだ。何も、思い浮かばない。

自分の無力さに絶望する。ボクは皆の洗脳を解くこともできないし、思い出させることもできない。ドーマンと……ドーマンと戦うのなんてもつての外だ。

意気地無しと罵つてもらつても構わない。

頼む。誰か教えてくれ。ボクはどうすれば良いんだ？

宿に帰る事もできず〓村を歩いてみると、気付けば見晴らしの良い場所にいた。思考は酷く絡まったままで、そのまま行動していたからこうなったのだろうか。

縁に寄り掛かって景色を眺める。眺めたからといって現状が良くなるわけでは無いが、何かに逃げないとこの恐怖に耐えられない。

今の自分は、本当に自分なのか？ボクは本当にボクなのか？このボクは、ドーマンにとって都合のいいように作り変えられたボクなのではないか？そしてそれは、ボクだけではなく皆も——そう考えると、心細くて、不安で、悲しくて仕方無いんだ。

「もしかしたら、おかしいのはボクの方かもしれないな……」



機械の体に、人間の心。そんなモノ遺物であっても存在してはならないのかもしれない。この悩みも、もしかして、ボクが本当に人間だったら持ち得なかつた悩みなのかもしれない。

分らない事ばかりだ。嫌になるなあ。

こんな風に悩んでいる自分を、何だかバカらしく思つて、つい笑いが漏れてしまう。

「おやあ？キミはリコちゃんの所の……レグ君！どうしたんだい？」

「ん……ああ、ワズキャンか」

“村”が夕焼けに照らされた頃、不意に声をかけられた。隣を見れば誰であろう、村長のワズキャンだった。

ワズキャンがボクの横に立つと、何だろう、何か甘い匂いがする。つられて彼の手元

——蔓のようにウネウネとしている、手？腕？——を見てみれば、湯気の立ち上るコップが二つあった。

「ああこれかい？お茶だよ。飲む？」

「い、いや、悪いが遠慮させてもらおう・・・」

「ええ・・・あ、これは僕が淹れた物じゃないよ？ベラフに淹れてもらったんだ。花の蜜入りの特製ブレンドさ。まー飲みなよ。気持ちが落ち着くよ？」

「言われるままに手に取ってみればやはり温かい。彼の言う通り、本当に淹れたばかりのようだ。何か謎の成分が空気中に溶け出している訳では無さそうで安心した。」

「ありがたい・・・だがワズキャン、どうしてボクにお茶を？」

「散歩してたらたまたま見かけてね。家も近いしせつかくだからと思つて持つてきたんだけど・・・迷惑だったかな？」

「い、いやいや！そんな事は無い！」

「そう？なら良かったー！……それで？レグ君。君はいつたい何をそんなに悩んでたんだい？」

「……いや。悪いがそれは話せないんだ……」

「む。なら当ててみようか。うーん……ドーマン君の事だったり？」

「……」

「凶星かな？まあドーマン君胡散臭いもんねー！彼への悩みの一つや二つ、あつたつて何もおかしくないさ」

「でもねレグ君。悩みや疑問をいつまでも抱えておくことはできないんだ。キミがキミである限り、いつか必ず清算しなければならぬ時が来る……」

「……その時に悲しくならないように、どうにかできそうな悩みは早いうちから消しといた方がいいんじゃないかな？」

「……だが、ワズキャンはこの村の長だろう。これはボクたちの問題だ。だからボクた

ち自身で——」

「解決しなきゃいけない、か。なるほどねえ。それならやっぱり問題ないね！」

「……え？」

「あれ？ドーマン君から聞いてないのかい？僕たち〓村〓の住民は既に、リコちゃんの探掘隊の指揮下にあるんだ。つまり村長である僕よりも君たちの方が立場が上……」

「……だから君が悩む必要は無いんだ。君が悩みを解消するために僕らを利用する事は、別に悪い事じゃないんだよ」

「さあ、レグ君。君の『願い』は何だい？君はいつたい、僕たちに何をしてほしいのかな？」

ボクはやつと、この一連の出来事に終止符を打つだけの資格を得た。

今、ボクは新たな協力者を得ようとしている。ワズキャンが手を差し伸べる。

仮面の向こう側でにこやかな笑顔を浮かべているような気さえした。

考える時間は終わった。後は行動を起こすだけだ。

「——ボクは……」

「……ボクはドーマンに聞きたいんだ。何でボクたちを欺いていたのかを」

ボクは彼の手を取った。

ああ。何かが捻じ曲がる音がする。本当に、本当にこれは正しい事なのだろうか？

忘れもしませぬ。あれは拙僧が“村”の守護神だったころ・・・68

全身が鉛のように重く、暗い感覚に包まれており、それが心地よくてうつとりとしておりました。有体に言えば拙僧、現在すやすやと眠っているのです。

ですがその安寧も長くは続きませんでした。なにやら外が騒がしいようで、先ほどから絶え間なく爆発音が：

ンンン爆発音ンン!?

「なあッ……は!？」

慌てて飛び起き窓の外から村の様子を確認しますと、住人たちが各々の武器を持って広間の方へと向かっていくのが見えます。

何が起こっているのかサツパリ分かりませんので、式神を用いて爆発音の聞こえた方へ式神を飛ばし、確認してみますと、“村”の外壁に巨大な大穴が開いておりました。

そして、その穴の傍らには、右腕から蒸気を燻らせておられるレグ殿とワズキャン殿



窓から飛び降り、レグ殿がおられる方へと駆けてゆきます。陰陽術を使用すれば一瞬ですが、今は瞬間移動を行うための魔力さえ惜しい。多少時間はかかりますがこちらのほうが都合が良いのです。移動している最中の詠唱も、概念礼装の換装も忘れませぬぞ。今回ばかりは拙僧も覚悟を決めねばなりませんので。

なぜ拙僧がこれほどまでに慌てているのかと言えば、魔術工房が未だ完成していないからなのです。本来であれば一月ほどかけて作成する拙僧の陣地、魔術工房。何分生物の中に作るのは初めてのことでしたから慎重に慎重に……とゆつくり作業をしていたのが命取りになってしまいました。

そも、アルターエゴである拙僧に限らず、魔術師という存在は工房の中にあつてこそ真価を発揮するのです。自身の工房の中であれば大抵の事が可能でありますれば、儀式の成功のためにはやはり必須。ですので、ええ。

今からパパッと完成させます。

言うまでもなく、走りながら陣を描くのは至難の業です。特に、このやり方では、村を痛めつける事になりますので、拙僧も精算の対象に選ばれてしまうのですよ。そのため痛みの出ない方法で術を刻み込んでいたのですがねエ…

うねうねと拙僧ににじり寄ってくる黒い粘液を、退散の呪術で追い払っております



が、煩わしいものです。

「ええい鬱陶しい！拙僧に構う程ヒマがあるのなら外敵を駆除しに行った方が宜しいのでは!？」

ぶつくと文句を垂れながらも描いておりますと、そこでようやく気付くことになります。未だ未完とはいえども自身の工房に魔力を、感覚を通過させていたからこそ感じる、この重圧、この恨み、そして何より、濃密なりし殺意。

「——それは……不味い、ですなあ」

姫が帰還なさいました。